

混譚～まぜたん～

ラゼ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

異世界編の登場人物

水晶ロリババア、ケモシヨタオイラツ子、見た目ビッチガール、ポジティブ読心レディ

現代編の登場人物

俺様系大金持ち男子、転生悪役令嬢、貞操観念逆転世界来訪系ドスケベ少女、僻み根性丸出し卑屈ガール、靈感商法霊能巫女
とりあえず異世界編からスタート

※小説家になろう様にも投稿しております。

目次

ケモーションナル・エンカウント	1
スピット・スキット	10
ホット・シヨット	19
ミステリー・ジャンル	28
スラット・メイデン	38
リデイクラス・シエア	46
アメシスト・フラストレーション	54
ピンキー・アトモスフィア	63
デープ・インパクト	76
モノクローム・キャット	86
アイヒマン・サイコロジ	96
サイレンス・アマリリス	105
フォスフォファイライト・ファイアフォレスト	118
フォックスフェイス・フラテーション	133
ジニア・レゾナンス	144

ケモシーヨナル・エンカウント

非日常——それは文字通り『日常とは非なるもの』という意味である。しかしそれが稀なものであるかといえ、そうでもないだろう。漫画のように奇天烈な事態がなくなるとも、少し諸外国にでも足を伸ばせば、それは立派な非日常だ。

自分の日常以外を非日常と定義するならば、世の中に非日常というものはありません。あふれている。だから今の僕の現状も、僕以外の誰かにとっては単なる日常の一コマでしかない……と、そんな現実逃避をしている真っ最中である。

僕の身に起きたことを言葉に出してしまえば、きっとほとんどの人は僕を『頭のヤバイ奴』だと思っただろう。しかし事実は事実。ピンクの河童に追いかけられたとか、猫の忍者に見張られているだとか、そんな被害妄想にかられた人たちと僕を一緒にしてほしくはない。

——そう、僕は宇宙人にアブダクションされたのだ。

僕の頭は正常だし、体も正常だし、なんなら難解なクロスワードパズルでも解けそうなくらい冴えている。そんな灰色の脳細胞から導き出された答えが、宇宙人による拉致事件というわけだ。

謎の光が僕を包んだと思ったら、周囲の景色がアマゾンもかくやと、言うほどに大森林に変化しており——その上、植生を見る限りおおよそ日本とはかけ離れた……とか地球とはかけ離れた魔境っぷりである。どこか別の星に連れていかれたなんて結論を出すのも致し方なしだ。

そうだ、少なくとも人間を食事にしようとする植物なんて、記憶の限りでは存在していなかったように思う。なんとはなしに甘い香りに誘われて歩きだしたら、巨大なハエトリグサのような植物に捕縛された——それが今の僕の状況である。軽い感じと言えば命の危機であり、重い感じで言うなら生命を損なう恐れがあるのだ。

幸いと言え、いいのか、彼に鋭い牙は生えていないし、今の所二枚葉で押し潰してくるような挙動もない。ただしゴキブリホイホイよろしく、粘着性のある表皮から逃れられなくなってしまったのだ。獲

物が衰弱死するのを待っているのだろうか？ それともここから更に、大自然の神秘アタックをかましてくるのだろうか。いったい僕が何をしたというんだろう。

別の惑星なのか、別の世界なのか、別の時空なのか。何がどうなっているかは知らないけど——もしこれが人為的ななにかであるならば、僕は下手人の顔に洗濯バサミを百個付けてやるとここで誓う。しかもギザギザのちよつと痛いやつだ。

…しかし誰か通りかからないものか。この際、熊さんとかでもありがたい。植物から僕という獲物を奪おうとして、一大バトルを繰り広げる——隙に僕が逃げるといふ、なんとも都合の良い計画にすらすがりたい気分だ。

さらなる厄介事を呼び込むかと思ひ自重していたが、もう力の限り叫んで助けを求める方向にシフトするべきだろうか。うん、そうしよう。そうと決まれば、喉が枯れるまで叫んでやろうじゃないか。口上はどうすべきか……やはり先人に則って『助けてくれええ!!』にしようか。言葉が通じない可能性を考慮し、できるだけ悲壮な感情を込めて叫ぶとしよう。僕らが動物の感情をなんとなく理解できるように、宇宙人や異世界人や異次元人だつてきつと理解してくれるさ。

——と、いざ叫ぼうとしたところで人の気配。別に僕が何かの達人というわけではないが、喧騒とは程遠い森のなかで、草木を掻き分けて歩く音くらいは判別できる。少なくとも、人間大で二足歩行なのは間違いないだろう。ざわざわと茂みが揺らぎ……ひよこりと姿を現したのは、なにやら獣の特徴が入り混じった、人間らしき生物だ。有り体に言ってしまうえば、獣人とかそっち系のやつだろうか。頭に生えている長い耳と、パツチリした瞳に長いまつげが印象的だ。少年か、あるいは少女か……見た目では少しわかりにくい。

「んー？ お前……なにしてんだこんなところで」

「やあ、こんな不格好で失礼。ちよつと全身で大自然を味わいたくてね」

「…どういふ強がりだよ。ま、そんならオイラは行くけども」

「ちよつと待った」

「うん？ …やっぱ助けてほしいのか？」

「先に聞いておきたいんだけど…：君は男の子かい？ それとも女の子？」

「…いま聞く？ それに見りやわかんだろー。男だっつーの」

「ふむふむ。ではどうぞお名前を」

「え？ あー…：フル・フリットだけど」

「年齢は？」

「十一」

「好きな食べ物は？」

「タコの酢漬け」

「どのような趣味をお持ちですか？」

「趣味…：まあ探検が趣味つちや趣味かな…？」

「…うん、じゃあ最後に一つだけ」

「おう」

「助けてくれええ!!」

「先言えよ」

モフっとした少年——フルが植物の口元を両手で掴んだと思ったら、次の瞬間、カップ焼きそばの蓋を剥がすかのように彼を裂いた。まるでバンドを取り分けたハンバーガーのごとく二つに分かれた彼は、ビクリと体を震わせた後…：絶命した。小一時間ほど同じ時を過ごし、なんだか情すらわいていたというのに、これはあんまりだ。

「——なんで殺したんだー！」

「お前を助けるためだけ!?」

「どうもありがとう！」

「どう致しまして」

…とまあ冗談はさておき、助かりはしたものの、僕の体には葉が付いたままだ。ゴキブリホイホイも驚きの粘着力と言うべきか、接着面が剥がれる気がしない。背中の八割と右肘くらいまでが緑に覆われ、レインコートの前半分を無理やり破られたようなスタイルである。

肌にくっついている部分はちゃんと取れるのだろうか？ セメダインが手についた時の百倍くらい不安なんだけど。というかそれ以

前の問題として、めちやくちや動きにくい。円形の葉がそのまま体の後ろに張り付いているのだから、それも当然だろう。なんとか破ろうとはしてみるものの、植物とは思えない頑丈さだ。レザースーツを素手で破るよりも無理そう感。

「これ、取れる?」

「ん、ちよつと待ってな」

藁にもすがる思いで少年に助けを求めたところ、彼は紙切れでも破るように葉を千切っていった。僕も握力や身体能力は自信があったけど、どうやら井の中の蛙だったらしい。そんなことをぼんやり考えていると、皮膚や服にくっついていっている部分以外は、あらかた千切り終わっていた。感謝感激雨あられである。しかしこのままでは『背面が緑一色な変人』という評価に繋がりそうなので、そのあたりもどうかできないかお願いしてみよう。

「くっついてる部分は無理そう?」

「んー……どうだろうなあ。いよいよ——しよつと……!」

「あ、ちよつと待って。めつちや痛い」

「男だろお? ちつとは我慢しな」

「いや、ほんとにこれヤバイ系の痛み……いだだだだっ! 皮膚が剥がれそう!」

「お、もうちよいでイケそうだぜえ」

「——待ってくれ!」

「や、ほんとにもうちよい——」

「これ以上は……君を末代まで呪う……!」

「そこまで!?!」

こんな大森林で皮膚が剥がれたら、破傷風待ったなしだ。ここは無理をするところではなく、半身河童野郎という評価を甘んじて受けるでしょう。後回しにできることは後回しにすればいい。夏休みの宿題は最後の二日でどうにかするものだ。

さて、気を取り直して……聞きたいことが盛り沢山でどうしたもんだろう。まず何を聞くべきか——うーん……おお、先に彼の性別を聞いておこう。

「ところで君の性別は？」

「さつき聞いただろ!？」

「いやほら、最近では男装女子とか男の娘とか女装子とか紛らわしいのが多いから…」

「ええ…?」

ケモシヨタなのかケモロリなのかははっきりしておくべきだろう。ドラゴンと車のカップリングですら興奮してしまう変態が多い昨今、勘違いを避けるためには重要なことである。男の子なら、ぜひ僕を守ってほしい。女の子なら、頑張つて僕を守ってもらおう。とりあえず彼がいなければすぐに死ぬことは間違いなさそうさ。

「さて、じゃあ行くっか」

「しっぽ握るな! つーかなんでついてくる気まんまんなの!？」

「別について行かなくてもいいけど、その場合——僕は死ぬぜ」

「どういう脅迫だよ……まあ別にいいけどさ。だいたいなんでそんな弱っちいのに、こんなとこいんだよ。ちよつとありえねえぜ?」

『「こんなとこ」つてのがまずわかんないんだよ。ついさつきまで街中にいた筈んだけど……神隠しつてやつ?」

「ふうん…? そりゃあ珍しいっつーか、災難だな。どつから来たんだ?」

「あ、信じてくれるんだ」

「そりゃあ、そういう風に考えた方がおもしろいかなあ。世界は広いんだ……なにが起きたつて不思議ねえ。なにも起きないんならこつちから探しに行く——それが『ワールド・ワイド・ウォーカーズ』だぜ」

耳をピコピコと揺らしながら宣言する姿は、輝かしい未来を語る子供そのものだ。しかし『ワールド・ワイド・ウォーカーズ』か……さつきから日本語と横文字が入り乱れているが、いったいどういう仕組みなのだろうか。獣人の世界でも日本語がフォーマルだというならば、僕にとってはありがたいことだけでも。

「ところで君が喋ってるのって日本語?」

「んあ? それ以外なんだつーんだよ……英語のがいいならそつち

で喋るけど。でもお前日本人だろ？」

「…日本の首都はどこだっけ」

「…？ 東京だろ？」

「むむ…：じゃあここはどこ？」

「『ダストパイル』の奥地」

「——今って西暦何年？」

「二千六百十四年だけど」

「そうきたか…」

そうくるのか…：え？ なに？ 人類ってたかだか六百年くらいでこんなに進化するの？ それともバイオハザードが起きて新人類でも台頭してきたのだろうか。とにかくめっちゃ困る。すごく困る。異星か異世界か未来か知らんが、僕は帰りたいし、帰らねばならないのだ。

「とにかく——そう、フル。僕は猫を飼ってるんだ」

「へえ、いいじゃんか。オイラも猫は好きだぜ」

「そして僕は実家住まいなんだけど…：いま両親は旅行中だ。一週間は帰ってこない」

「ふむふむ」

「せめて三日以内に帰らないと、お猫様が飢え死にしかねない」

「つつてもなあ…：だいたい奥地だぜ、ここ。通信できる範囲まで戻るにしても、三ヶ月半はかかんなあ」

「…なによりの問題はさ。僕の覚えてる限りだと——現代ってやつは、西暦二千十九年だった筈なんだよね」

「へえ…！ 神隠しじゃなくてタイムトラベルってやつか？ ちよつと面白くなってきたじゃんか」

「——君はさ。当事者にとつて、それが本当に面白いと思うのかい？」

「え？ あ…：いや、わ、わりい…：オイラ、そういう意味で言ったんじゃ…」

「正直めっちゃ面白い」

「謝り損じやねえか！」

「面白いつっちゃ面白いけど、帰れないのは困るんだよね。そういうわ

「僕を過去へ送ってプリーズ」

「むちゃくちゃ言うなオイ……でもなあ、未来には行けても過去は無理ってのが定説だかなあ。厳しくねえか？」

「そもそも時間移動において『三日以内』ということに意味があるかも不明だが、想定は常に最悪とすべきだ。最大限、やれることはやっておかなくては。だいたい、本当に時間移動したのかもまだわからない。このモフモフちゃんが精神異常者だという可能性だって無きにしもあらずだ。」

「フル、君は精神異常者なのかい？」

「失礼すぎるー！」

「いや、待てよ？ 極限状況下に置かれたせいで僕の方がおかしくなってる可能性もあるな……」

「…なら簡単なテストでもしてやるよ。ういひつ……お前は男か？」

「女か？」

「女だよ」

「…っ!? え、ま、マジか…？」

「嘘だけど」

「ぐっ、くっ……お、お名前をどうぞ」

「沙羅双樹さらそうき」

「年齢は？」

「二十三」

「好きな食べ物は何？」

「ぎる蕎麦」

「どのような趣味をお持ちですかあー？」

「うーん……ボランテアとかかな」

「嘘くせえ……」

「胡乱げに僕を見るフル。負けじと僕も見返し、なぜか森の中で見つめ合う状況になった。ちようどいい機会だし、体の隅々まで観察してみるとしよう。瞳は透き通るくらいに美しく、まるで翡翠を思わせる。森の中だということのかなりな軽装だが、これは全身を覆う毛のせいだろう。服の下のだこまで生えているかは不明だが、あまり厚着し

ては体温調節が難しくなるのは想像に難くない。

毛に覆われていない部分——手の甲から先、そして首より上を見る限り、肌の色は薄い褐色といったところだろうか。長めの金髪は肩までかかっている。一人称の『オイラ』は思春期ゆえのナルシズムか、あるいは三十周期くらい流行が回ったせいで江戸っ子的な感じになっているのか。

「な、なんだよお……」

気まづかったのか、はたまた照れ臭かったのか、ぷいっと視線を外すフル。自然界では先に視線を外した方が負けというが、見た目ほど獣の習性に寄ってはいないようだ。話した感じは大人びているが、そういうところは思春期を感じさせる。僕はそのフワフワな手を取り、しっかりと目を合わせて語りかけた。

「…友達になろう、フル」

「な、なんだよ急に？」

「困っている友人を無償で助ける——それが友情ってやつさ。僕はぜひ君と友達になりたいんだ」

「打算しか感じねえ!!」

「もちろん、君が困っていれば僕は全力で助けるとも」

「メリットねえだろ…」

「友情に打算を求めちゃいけないよ」

「鏡見て言えよお!」

「君がどう言おうと、この手は決して放さない!」

「カツコいいけど情けねえな!」

縫るものがあれば全力で縫りたい所存である。どこまでこの森が広がってるかは知らないけど、このタイミングで出会えたのはちよつとした奇跡だ。垂らされた蜘蛛の糸は慎重に手繰るべきだろう。なにより、ここで彼に頼らなきや確実に死ぬ。九割九分九厘死ぬ。僕の直感がそう訴えかけてくる。

「ったく……ま、本人も状況も面白そうだからなあ。しばらくは面倒見てやるよ」

「サンキュ。僕のごことは双樹サマって呼んでくれ」

「友達ってなんだっけ」

「気安く冗談を言い合える関係のことさ」

　　なんだか小さくため息をつかれた。まあ何がどうなっているかは未だにわからないけど、こんな状況でも友人はできるものだ。むしろこんな状況にならなくちゃあり得なかつた友情を、今は喜んでおくとしよう。ふわふわでモフモフな、毛深くて新しい友達を見て——僕は
そう思うことにした。

スピット・スキット

右も左も分からなければ、前も後ろも過去も未来も不明なこの状況——しかし、継る人ができたというのは非常に喜ばしい。道とも言えない道を進みつつ、フルの後ろをついていく。落ち着いて見れば、やはりどの植物をとつてみても地球のものとは思えない。鮮やかな青色を魅せる雑草や、ギネスを遥かに超える巨木。ラフレシアが慎ましやかに思えるほど派手で毒々しい花。本当に未来だと言うならば、いったい何が起きたのやら。

「しっかし西暦二千十九年なあ……戦争の真っ只中だろ？ 親が旅行って、どこ行ってんだよ」

「…ん？」

「…？ なんか変なこと言ったか？」

「…どこが戦争してるって？」

「どこつつーか、世界中だろ。第三次世界大戦」

「えええ……二千十九年の後半からってこと？」

「へ？ あー……んん、オイラ歴史そんな得意じゃねんだよ。んつと……ソ連とアメリカが戦争おつ始めたのが最初——だったっけかな…」

「ソ連……ソ連？ そうきたか…」

どこの世界線だそれは。なに？ 未来じゃなくて平行世界的な感じ？ やめてよね、更に帰るのが難しくなってきたじゃないか。あれかな、第三次世界大戦で核兵器ぶっぱあった結果、放射線で人類が獣化したとかそんなかな。どこぞのゲッターなロボじゃあるまいし、勘弁してほしい。

「未来で平行世界かあ…」

「…うん？」

「ちなみにここは地球のどの辺りなのかな。流星に日本じゃないよね？」

「ここか？ ここは地球じゃなくて『異世界』ダストパイルだぜえ」

「いい加減にしてくれないか」

「なにが!？」

未来で平行世界で異世界ってなに？ カレーライスとハヤシライスが混ざったようなカオスっぷりじゃないか。もうお腹いっぱいだよ……彼の言っていることは本当に本当なのだろうか？ 洗脳教育を受けた改造人間の説も無視できなくなってきたぜ。

「君は異世界人ってこと？」

「おいおい、オイラはどっからどう見ても日本人だろ」

翠の目に金髪……褐色肌にモフモフの毛。そして名前は『フル・フリット』。いったいこの世界の日本人事情はどうなっているのだろうか。正直、ちよつと頭の整理が追いつかない。どこかで休めるところなどはないだろうか？ フルも単身、こんな軽装で来ているくらいだ。近くに村か街か都市くらいはある筈。都会っ子の僕には、マイナスイオンがキツツイぜ。

「まあ日本人の定義は置いといて、どこかゆつくり話せるところとかない？ 最寄りの街とか」

「うん？ ……ああ、そうだな……んー……」

「ちよつと遠かったり？」

「だなあ。前に寄った街が一番近いと思うけど、一ヶ月はかかんなあ」

「ははは、冗談は存在だけにしてくれよ」

「ひどくねえ!？」

一ヶ月歩き続けないと人の文化圏に着かないって、あり得くない？ 未来どころか時代逆行してるレベルだよ。だいたい、本当にそうだとしたら彼はどうやって生活しているんだ。こんな森の中で子供が自給自足って……可能なのか？ 僕を救ってくれた際に見せた膂力は凄まじいものがあつたが、果たして強さだけで森での生活が成り立つものなのか。

「どんだけ広いの？ この森」

「さあなあ。それが知りたいからオイラはここに居るわけだし」

「子供の冒険にしちや壮大すぎるぜ……」

「冒険に大人も子供もねえさ。どんな危険だつて——未知への憧れ

「にや勝てねえんだ!」

「まあそれはともかく…」

「さらっと流すなよお!」

「最寄りの街まで一ヶ月つてことは、少なくとも一ヶ月以上に渡って野宿してるつてことだよ。それにしちや君、小奇麗すぎないかい?」

「オイラきれい好きだかんなあ」

「いや、服とかカバンとか」

「こつちは高次炭素繊維で出来てんだ。毒性を排除したカーボンナノチューブとマイクロン単位で汚れを弾く…」

「ここで未来要素入ってきたよ。なにやら通販の商品を紹介する人のように、装備品の良さを語っているが…そのあたりを抜きにしても、野生の生活を続けている人間とは思えない。髪はキューティクルが輝いているし、肌にも傷一つない。お風呂なんてないだろうに、すえた匂いもしない。いや、むしろいい匂いすらしてくる。」

「嗅ぐなあ!」

「いや、ほんとに良い匂いというか…」

「や、やめろよお…」

「こう、なんて言えばいいのかな。まるで——」

おひさまの匂いというか、たつぷり陽を吸い込んだ布団の香りというか。妙に人を安心させる体臭だ。いや、待てよ? 干した布団の香りつてのは、ダニの死骸の香りと聞いたことがある。

「——そう。まるでダニの死骸の香りだ」

「喧嘩売ってる!?!」

「おっと、未来では褒め言葉じゃなかったか。僕の時代では最高の賛辞なんだけど」

「ぜってえ嘘だ!」

「…」

「…嘘だよな?」

「…」

「や、嘘じゃなかったんなら、その、オイラも別に…」

「嘘だけど」

「くっ、くっ…!」

とりあえずわかった事が一つ。フルは悔しい時に尻尾をパシパシと地面に叩きつける癖があるようだ。そして十一歳とは思えないほど自制がきき、大人びている。どういった境遇で育ったのか気になるところだが、そもそも世界がどういった情勢かも不明だ。案外、これが普通なのかもしれないな。

「ま、なんだ。オイラも聞きたいことはいっぱいあるし、双樹も同じだろうけどよ。いまは我慢しとこうぜえ。ちよつと急ぎてえんだ」

「了解」

「…いや、もちよつとなんかあんだろ? どこに向かっているんだとか、どうするつもりなんだとか…」

「無駄口は嫌いなんだ」

「どこが!？」

「必要なら話してくれるだろ? 僕たちは親友なんだからさ」

「なんかランクアップしてるう…」

彼がいらないとどうにもならない以上、黙ってついていくだけだ。全力で頼らねば生きていけないこの状況だと——そう、まるで母親と幼児のような関係性である。現状において僕はなににもできないし、自己判断は危機を招くだけだろう。

「母上」

「母上!？」

「僕たちはいつたいどこに向かっているんだい?」

「結局聞いているし…:ハア」

「ため息は幸せが逃げるぜ」

「…ダメ息子が苦勞をかけてくるかなあ」

「なに訳わかんないこと言ってるの?」

「乗ってやったんだろ!？」

「フルは優しいね」

「くう…! 馬鹿にされてるう…!」

「それで、いつたいどこへ?」

「…あの山の上までだよ。仲間とはぐれちまってよお、わかりやすい目印んとこ向かってんだ」

「通信機器とか持つてないの?」

「……じゃきかねんだよ」

なるほど、流石に子供一人で冒険つてこともないか。しかし山登りとは……体力には自信があるけど、あのそびえ立つ大山脈を専用装備なしで登りきれるとは思えない。そもそも麓に辿り着くだけでどれだけかるんだろうか。ちよつとサイズ感がおかしすぎて、距離がうまく測れないぜ。

「あー……ごめんフル。僕にはちよつとキツイかも。標高も随分高そうだし……」

「わかつてるつて。オイラがしよつてやるから、心配すんな」

「いや、体力以前に凍え死にそうなんだけど。高山病も心配だし」

「ん? ああ、そつちも気にすんな。『ここ』はどこも一定の気温だし、気圧も変わんねえ」

「……あり得くない?」

「物理法則もちげんだよ。言っただろ? 『異世界』だつて」

それだけの高低差があつて気温と気圧が変わらないと言うのなら、そもそも空気中における酸素濃度もまったく変わつてきそうなものだけど……どういふカラクリなんだろうか。というかここは惑星なのか? 地上を見渡せる高度まで行つたら、地平線が曲線かどうか確認してみるとしよう。まさか象と亀と蛇が世界を支えているなんてことはないだろうな。

「なんなら、こつからおぶつてくか? その方が手っ取り早いけど」

「君が大丈夫なら是非お願いしたいけど——僕つて割と重いぜ?」

「百キロないくらいだろ? 問題ねえよ」

「そう? じゃあよろしく、相棒」

「またランクアップしてる!」

フルが鞆から取り出したベルトのようなものでグルグル巻にされ、まるで荷物のように背中におぶわれた。普通に背負つたらいいじゃないかと聞けば、振り落とされるからダメとのことだ。いったい時速

何キロ出るんだろう。僕の内臓が心配で仕方ない。

「んじや行くぜえ…！」

道などない森を行くのだから、ある程度のすり傷は覚悟していたのだが——フルの掛け声を聞いた瞬間、少しの負荷と恐ろしい浮遊感が僕を襲った。そして次に見えた光景は、眼下に映る、端の見えない大森林だ。どうやら近くにあった巨木へ跳び乗ったらしい。垂直跳びにして二百メートルといったところだろうか？ 僕の常識で言うなら、足の筋肉が少なくともあと三十倍はいると思うんですけど。もしかしたら筋繊維の硬さや密度が異常なのかもしれない…：ちなみに僕は高いところが苦手である。うーむ…

「漏らしたらごめんね」

「ぜってーヤメろよ!？」

「出物腫れ物所嫌わずって言うじやないか」

「限度あるだろお！」

なんだか涙目になりながら四肢に力を込めるフル。しかし泣きたいのはこちらである。木々を跳び移りながら進んでいくとすれば、どれだけ急制動と急停止を繰り返すのだろうか。人間の体ってそういうのに耐えられるようにできてるのかな？ めっちゃ怖いんですけど。ガチで内蔵飛び出したりしないだろうな。

——と、そんな心配もしていたけれど。実際は酔うどころか、ふわりとした感覚の連続しか感じない。フル曰く、卵を運ぶ時の要領と同じらしい。そうとなればこちらも安心できたもので、柔らかな毛皮をまさぐる余裕も出てくるものだ。

「ちよ、おまつ——こらあつ！」

「ふわっふわだねえ」

「うひゃひゃつ、やめつ——どわああつ!？」

「…え？」

——空中で戯れていると、地上から白いギザギザの壁が迫ってきた。上下にわかれ、内側にはヌメヌメとした赤黒いなにかが…：あ、これ巨大生物の口的な何かだね。非常に悲しいが、人生終了である。親より早く死んでしまおうとは、なんたる親不孝だまったく。

「——オラアアアッ!!」

：などと走馬灯を振り返っていたところで、フルが器用にも牙の先を掴み、顎が閉じきる前に巨大生物の鼻先へと脱出した。眼前にはギョロリとした爬虫類の瞳がある。ドラゴンチックな何かだと思われるが、巨大すぎてわかりにくいな。

しかし僕たちを食べるためにその巨体を動かすエネルギーと、僕らを食べて得られるエネルギーは釣り合っていない気がするんだけど、そのあたりはどうなんですかドラゴン殿。ああ、縦に裂けた瞳孔が恐ろしすぎて現実逃避しっぱなしだぜ。

「シィッ——!」

鼻先にしがみついた僕たちを振り落とそうとするドラゴンの、その機先を制するようにフルが両腕を振りかぶり……ハエでも叩き落とすように、大質量を地上へと墜落させた。遠目に見た感じ、頭がエゲツないレベルでへこんでいる。

うーむ……彼我の体重差を考えれば吹き飛ばすのは僕たちだと思うんだが、そのへんは後で聞いてみるとしよう。とにかく、いまは生存を喜ぶべきだ。そして失禁と脱糞を耐えた、僕の膀胱と括約筋に最大級の感謝を贈ろう。

「ふう……つぶねえ」

「ありがとうございやす、フル様」

「めっちゃ卑屈になってる!」

「へへ、なんでもお申し付けください。あ、なんなら足でも舐めましようか?」

「や、やめろよお。オイラ、そういうの好きくねえよ……」

「そう? じゃあフルが僕の足を舐めてくれ」

「なんで!?!」

まあ冗談はさておいて、僕が心底から不安にならない理由がよくわかった。現代の人間にも少しくらいは残っている『生存本能』というやつが、圧倒的強者に守られていたという事実を無意識に感じていたのだろう。

とりあえず先程の件は反省し、移動中は大人しくしておこうと肝に

銘じた。驚くほどに速く流れる景色だが、恐怖は感じない。畏敬すら覚える巨大な自然も、今は優雅に観察していられるくらいだ。端的に言うなら、ライオンの背に乗ったネズミのような気分である。

「うーん……ほんとに気温差ないんだね」

「ああ。だから雨季以外は風もほとんど吹かねえんだ。世界全体に乾季と雨季が短いスパンで巡る……物理法則だけじゃなくて、天候もむちやくちやなんだぜえ」

たまに軽いお喋りをしながら、斜度の急な山を駆け上がる。程なくして山頂へと辿り着いたが——「一番近い街まで一ヶ月」というのは、まさかフル基準なのだろうか？ だとすると、僕の足では年単位どころか寿命が尽きるレベルで遠いんじゃないだろうか。まあ踏破する以前の問題として、最初の一日で死ぬの間違いないだろうけど。食人花やらドラゴンやらがいる森で、数時間と生きていられる自信はない。

「とう……ちやくつとお！ 気分とか悪くねえか？」

「うん。強いて言うなら今すぐ吐きそうつてとこくらいかな」

「酔ってんじやねえか！」

「うぷつ……」

「こういう時はなあ、吐いた方がスッキリするぜえ。そのへんの茂みで吐いてこいよ」

「怖いから一緒についてきて……」

「ガキんちよか！」

「…次に君が……僕を見た時は……うぷつ……事切れた死体だった……なんてことになったら……後悔するぜ」

「ああもう、わかったつて。ほら、背中さすった方がいいか？」

いくら緩やかとはいえ、あれだけ揺られていれば三半規管が悲鳴をあげてしまうのも仕方ないだろう。のたのたと吐き場所を探していると、木々の隙間から山の逆側の風景が見えてきた。そしてそこには——先が見えない程に、大規模な街並みが広がっていた。

「…」

「…」

「そっか……僕は最初から裏切られてたんだね」

「うえっ!? ちよ、違うからな!? オイラだって先に何かあるかは知んなかったし——そんな目で見んなよお!」

「いや、冗談だよ。この目は単に……吐き気が限界に達したってだけの話さ……うぶっ……!」

「へ? ——うぎやああああ! あっち向いて吐けよお!」

——気持ちよく広がる街並みを見下ろしながら、僕は最悪の気分で胃の中身をぶちまけた。大自然の中での嘔吐は初めてだったが、トイレで吐くよりは清々しい……そんな要らない知識が増えた、今日この頃である。

ホット・ショット

吐瀉物で汚れた口の周りを洗い流しつつ、毛づくろいをしているフルを眺める。毛皮に少しかかったようで、ぐすぐすと鼻を鳴らしながら身を清める姿は、妙に可愛らしい。もちろん舌による毛づくろいではなく、水で洗ってから櫛で整えているようだ。

ちなみに貸してもらった水筒は、植物から水分を抽出濾過できる優れものらしい。優れものってレベルじゃないけど。聞きたいことがどんどん増えていく状況だが、眼下の街へ入ればそれも解決できるだろう。落ち着いて話せる場所ができたのは、非常に喜ばしいことだ。

「ふいー……つたく、散々だぜえ」

「そんなに気にしなくても、汚物程度で価値を落とす君の毛皮じゃないさ」

「あのなあ……たっつけえ指輪でもさ、一回便器に落ちたって聞いたらいやだろ？」

「確かに。近寄らないでくれる？」

「誰のせいだと思ってるの!？」

「冗談冗談。でもほんとに匂いとかは残ってないぜ。変わらず良い香りさ」

「だから嗅ぐなってえ……」

いや、僕も人の体臭を嗅ぐ趣味は持ち合わせていないんだけど……いかんせん、人を惹きつける匂いだ。朝方のパン屋さんに近付くと幸せな気持ちになれる——それと一緒にだろう。少しのあいだ二人でワチャワチャした後、ようやく出発と相成った。

「さってと……先に言っとくけどよ、オイラもあの街の勝手はわかんねえ」

「ええ？ 役立たずだなあ」

「おおい!？」

「ウソウソ、これ以上ないくらい感謝してるさ。それで？」

「つたく……一々質問に説明したくねえから、まずは全部聞けよ？」

この世界の文明はなあ、奥に行けば行くほど独自性がツエーんだ。 ”

入口” 付近は発展してるけどよ、この辺りになってくるとそもそも来れる奴があんまいねえから、ガラパゴスみてえなもんだ。そんで――

「入口っていうのは？」

「全部聞いてからって言ったろ!？」

「じゃあまず『全部』の定義から決めていこっか」

「いつまでかかんだよ。ハア……そん・で――だ。基本的に、どこの集落も文化の大元は日本だ。大抵は日本語で喋ってっし、ここもそれは外してねえと思う」

「ふむふむ」

「わかりやすく言うのだな……んー……日本人が無人島に漂流して、そこで文化を築いたとするだろお？ 外部との交流はほとんど無しで、数百年間かけて独自に発展した――っつー感じだ。訳わかんねえ決まりごとがあるかもしんねえし、ひよつとしたら外部の人間は受け入れてないってこともある」

「ほうほう……フルみたいな――獣人？ を受け入れてない可能性もあると。すまない、君との友情もここまでみたいだ」

「手のひら返し！ ……まあもう慣れてきたけどよお。冗談は程々にしよけよなあ、つたく」

「…」

「え？ ちょ、冗談だよな…？」

「…」

「なんか言えよお！」

「あはは、冗談ですよフルさん」

「他人行儀になってる！」

まあ恩知らずになりたくはないし、彼に何か不都合があつたのなら、僕は全力で助けになる所存である。ちよつとショックを受けているフルの頭を撫でながら、話の続きを促す。尻尾が安心したように揺れる――こういうところは子供らしくて可愛らしいな。僕との友情なんか、フルにとっては何んのメリットもないだろうに。

『獣人』ってーのはなあ、人によつちや嫌われるからやめとけよ？

オイラたちみたいなのは「浮葉」^{ふよう}って呼ばれてんだ……まあ場所によつちや違うだろうけど。それとなあ、双樹みたいな原種の方がいまどき珍しいかなあ。地球だけでも七%くらいしかいねえし、他の世界も入れると余裕で1%切ってんなあ。基本的に変種の方が優性遺伝なんだぜえ」

「聞きたいことがまた増えた……」

「とにかく大事なことだけ伝えとだなあ……この『異世界』はオイラたち浮葉がいつちゃん多い。特に奥地まで行くとほぼ100%だろうなあ」

「ということはつまり——」

「双樹のが少数派ってことだなあ」

「尊い友情の復活だね、フル」

「調子良すぎねえ!?!」

フルみたいな子が沢山いる街か……沢山っていうか全部？ とにかく、ケモナーがいたら滂沱の涙を流すこと請け合いだろう。いや、ケモ度の嗜好によつては地獄かもしれん。なんて業の深い性癖なんだ。

「まあ……なんつーか、何が起きてもおかしくねえってことだな。場合によつちやあ、とんぼ返りも充分ありえるかなあ？」

「肝に銘じとくよ」

「……人種差別とかは——たぶんないとは思っけど、一応注意しとけよなあ」

「その言い方ってことは、ない方が普通なんだね」

「あー……ん、まあそうだな。特にこの世界だと、その……差別されて移ってきた奴らが最初だかなあ。『自分たちは絶対に差別しない』って考え方が根底にある——らしい。オイラもよくは知んねえけど」

「……獣の特徴があるから差別されたのかい？」

「いんや、逆だな。差別されたから獣になったんだ……ま、そのへんは追い追いで教えてやるよ。あんま気持ちいい話でもないかなあ」

意味深な言葉を残すフル。大丈夫か？　なんかこのまま死んじや

いそんなフラグを立ててない？ もしくは重大な情報を秘めたまま失踪する人みたいになつてないだろうか。なんか不安だし、できる限り引っ付いところ。

「ところで、ここが待ち合わせ場所って言つてなかったっけ。離れて大丈夫？」

『周辺で一番目立つ場所』だかなあ。どう考えてもあつち行くだろう」

「なるへそ……そういえば聞いてなかったけど、はぐれたお仲間さんつて何人いるの？」

「二人だぜえ。ルーチェとラリカつてんだ」

「どっちもフルみたいに見た目？」

「いや、どっちも原種に近いタイプ。街に入ったんなら、聞き込みすりやすぐわかなあ」

生存を微塵も疑つていないあたり、きつとその二人も強者にあたるのだろう。むしろなぜはぐれたのかが気になるところだ。吐き気の余韻を紛らわすため、ゆつくりと山を降りていくと、次第に街の雰囲気が見えてくる。

異世界かつ大森林の先にある街———というと、いかにもファンタジーな想像をしてしまうが、僕の目の前にある街は実に和風である。時代劇風味というか、まるで京都の映画村にでも迷い込んでしまったかのようなだ。

ちよこちよこフルに抱えてもらいながら麓に到着し、街へと近付いたはいいものの……壁とか入り口が全く見当たらない。化け物みたいな野生生物が彷徨いているというのに、どうということなんだ———いや、違うか。あんな大質量相手に壁なんか無意味だろうし、建てる理由がないんだろう。

そしてそれが意味するのは、少なくともこの周辺に住んでいる人々であれば、ドラゴンを討伐する術があるということだ。フルが特別というより『浮葉』が特別なのだろうか？ 街の住人がみんなあのレベルだとすれば、軽く世界征服できそう。

壁はないけど物見櫓っぽい建造物はあるから、外敵の侵入自体は警

戒してるんだろう。果たして僕たちを受け入れてくれるのだろうか？ 既に視界には入っていると思われるが、特にあちらからのアクションはない。

そのまま真下まで行くと、浅黒い肌で犬耳を携えた男性が、気さくに声をかけてきた。僕と同じ年くらいだろうか？ 筋肉質でガツチリしていて、その手の人間から見ると非常に魅力的なタイプだろう。

「いよう、お疲れさん。アンタ——斬新なファッションだな」

「やあ、ありがとう。巷で話題の流行を取り入れた、プラントスタイルさ」

「マジで!？」

「うん。できれば剥がす方法を教えてもらえれば助かるんだけど」

「どんな強がりだお前……」

いまだに僕の背面と右側部分には、葉っぱが張り付いたままだ。時間が経てば粘着力も落ちてくるか——という期待と裏腹に、むしろ皮膚への馴染み具合が進んできている気がする。ちよつとした恐怖である。

「そいつは湯で洗えば取れるぜ。温度変化に弱いんだ……湯屋なら真っ直ぐ進んで、鐘塔の近くにある」

「ご丁寧にも。ついでにお金も貸してもらえると嬉しいな」

「ついでかそれ!？」

「なう……オイラたち外から来たんだ。ここは貨幣流通してんのか？」

「へえ、そりや珍しいな。一日に二回も——つつうかお仲間か？」

「ちよつと前にも一人、毛無しが通っていったけどよ」

「ほんとか!? どんなやつだった?」

「あー……なんつーか、ドスケベな格好してたな。長い黒髪の女だ」

「ああ、そりや間違いなくオイラの連れだ」

「ええ……」

痴女が仲間だったとは、予想外にも程がある。フルとかは毛皮があるからまだしも、森の中で露出の激しい格好をする度胸が凄い。未開の地に住む虫に刺される恐怖はないのだろうか。巨大生物とかもあ

れだが、毒や病気も無視できるものじゃないだろうに。それとも無視できちやうのかな。

「それと——ああ、通貨だったか。中心の方は使ってるけどよ、このへんは物々交換で問題ねえさ。湯で落としたらソレで払っちゃまいい」
「…こんな葉っぱで大丈夫？」

「乾けばまた粘着力が戻んのさ。割と需要もあるし、入浴料にしちや上等だぜ」

「そりや助かるね」

手と尻尾を振って見送ってくれた兄さんに礼を言い、僕たちはお風呂へと向かった。明らかに嬉しそうなフルの表情から察するに、やはり毛皮から吐瀉物の匂いが抜けきっていないのだろう。もしかしたら嗅覚も普通より優れているのかもしれない。とりあえず『毛皮の汚れ』仲間の消息』という不等号なのは確かのようにだ。

「…めっちゃ見られてるね」

「まあ一人だけ原種がいりやあな。つつても敵意はなさそうだし、気にすんなよ」

「そうは言っても、これだけ注目集めると気になるよ。ここでいきなり裸になったらどうなるだろう、とか」

「頼むからやめてくれ」

道ゆく人々から好奇の目をさらいつつ、湯屋へと到着した。木造の立派な建物だ……というか、木造以外の建築物は全くと言っていいほど見当たらない。火事が起きたら街ごと全焼しそうな勢いである。加えて、金属らしい金属が使用されていないのも気にかかる。

「こんにちはー」

「あい、らっしやい」

「ちよつとこの葉っぱを剥がしたいんだけど、いいかな？ 代金代わりにこれは譲るって形で」

「お、バカグサの葉か。こりやあ……おいおい、千切れてるとこ手でやったのか？ すごい馬鹿力だな、あんちゃん」

「でしよおっ！」

「オイ」

「服と葉は湯船にいれねえようにな。二人分と……二階も好きに使ってくれや」

靴を脱いで暖簾をくぐると、イグサの匂いが鼻をくすぐってきた。脱衣所を畳敷きにするとカビだらけになりそうなものだが、なにか工夫をしているのだろうか。広い空間には数人ほどが半裸で過ごしており、こちらに視線を向ける人もいれば、特に気にしていない人もいる。

「浮葉」とひとくくりにしても、その種類は様々なようだ。フルのように猫か兎に近い系統から、犬や狼、いまいちよくわからないような種類の人もいる。どういう遺伝の仕方をするのか、興味がつきない。

——そして目下のところ重要なのは、ここが混浴という部分である。脱衣所から既に男女兼用のだが、狐耳の女性が恥ずかしげもなく裸体を晒している。なんとはなしに彼女を見つめていると、不意にバシリと目があった。彼女はほんの少しだけ口角を上げ、からかうような流し目で浴室へ入っていった……うむ、年齢は五十歳くらいと思われる。気っ風の良いおばちゃんって感じだ。

「…全裸に鞄とか、その年にして中々のフェティシズムだね。どの層に需要があるんだい？」

「なにが!？」

職人魂の感じられる籠に靴下を入れ、とりあえず着衣のまま、いざ入浴といったところで——鞄を斜めにかけて、前を隠すフルの姿が目に入った。タオルで隠すならまだわかるが、鞄で隠すのは斬新すぎるだろう。

「…あんなあ、まだここがどういう場所かもわかんねえんだぞ? 治安がどんくらいかも知んねえし、用心しとくに越したことねえよ!」

「ああ、なるほど。でも濡れちゃわない?」

ふむふむ、ほほう、完全防水とな。頑丈で汚れもつかず、防水性もある鞄か……確かに、仮に中身がなくなっても価値がありそうではあるね。僕の貴重品といえば財布とスマホくらいのものだが、大して役に立たなそうだ。立たなそうだけど、一応フルの鞄に入れておいてもら

おう。帰れた時に無くなってたら普通に困る。

「しかし暗いねえ」

「ん？ ああ、奥地はだいたいこんなもんだかなあ。鉱物が少なえから、提灯とか行灯で賄ってんのさ」

中心にやたら大きな行灯と、後はやたらと数の多い窓から光源を取っているようだ。薄暗さと、湿気を含んだ木の匂いが相まって風情を感じる。ぱつと見た感じ、お客さんは十人いるかどうかだ。まだ日も高いし、空いてる時間帯なのだろうか。

当たり前だがシャワーはないようで、桶で湯を汲んで体を洗うらしい。服を着たままの僕を訝しがる人が数人いたが、背中側を見ると納得したように視線を外していく。この暗さでバカグサとやらが見えるってことは、おそらく目の性能も優れているに違いない。優性遺伝というのも納得である。

ざばりと頭から湯を被ると、ブルリと葉が揺れて剥がれ落ちた。気持ち悪つ。え、なに、生きてるの？ これ。ゾツとしつつも、解放された気分を味わいながら服を脱ぐ。今更ながらに気付いたんだが、着替えをどうしよう。乾くまでお風呂は流石に厳しいぜ。

とりあえず代金を払っていない状態は気持ちが悪いので、番台さんに葉っぱを渡しに行く。特に全裸を咎められることもなく、普通に受け取ってくれた。風紀が割と緩いのだろうか？ 貞操観念がどの程度かはわからないが、少なくともムスリムなどとは程遠いようだ。

——戻ってみると、フルが体を泡だらけにして遊んでいた。いやまあ、遊んでいるわけじゃないんだろうけど……毛の生えている部分が多い関係上、全身シャンプーみたいな感じになるのだろう。白い泡が羊のようで、なんだか面白い。

「お手入れ大変そうだね」

「んー？ まあ慣れたらそうでもねえよ。髪の毛よりや乾きやすいかなあ」

「背中の方、やったげるよ」

「ん……あんがとな」

猫や犬を水浸しにすると、ミイラになるのが基本だが——フルは短

毛だからか、濡れても小さく見えたりはしないようだ。水を吸って泡立った毛皮は、滑らかで心地良い。思わず抱きつきたい気分である。

「うぎゃああ!? ヤメロこらあ!」

「まるで贅沢な巨大タワシだ…!」

「例え方!」

なんやかやで僕もだいたいぶ汚れていたし、街へ入ってすぐお風呂に入れたのは幸運だった。街並みは古い時代を思わせるが、水源は豊富なようで、お湯を大量に使用しても問題はないみたいだ。温泉ではないけど、かけ流しであるところを見るに、燃料はかなり安価に流通しているのだろう。

というか、かけ流しじゃないとドンドン抜け毛が溜まっていくんだろうな。人種が違おうと様式も変わるという良い見本だ。

「いい湯だねえ…」

「だなあ…」

かなり熱いお湯だが、疲労を取るにはその方が良い。科学的に正しいかは知らないけど、気分的には正しいのである。ようやくリラクセスできたこともあり、対面にいたフルの隣へ移動し、後回しにした諸々を聞いてみる。

「落ち着いたところで、色々聞いときたいんだけど…いいかい?」

「おう。オイラも聞きたいこといっぱいあるかなあ。交互に一つずつ聞いてくってことでいいか?」

「オーケー。じゃあまず——」

「——全員動くな! 盗っ人改めである!」

「…まず、あれが何か聞きたいな」

「オイラもわかんねえ」

いざQ&Amp;Aのお時間だと思いきや、厳つい男性数人がドヤドヤと浴室に入ってきた。面倒事とは常に間の悪さを伴うものだ。できれば穩便に終わってほしいところだけど——そう思えないのが、最近の僕の幸運事情である。

ミステリー・ジャンル

ドヤドヤと入ってきた男衆に促され、浴場にいた人はみんな脱衣所に連れ出された。十数人が一斉に体を震わせ、毛皮についた水を弾き飛ばす姿は、ちよつと面白い。もちろんそれだけで乾く筈もなく、体を拭いたり毛を櫛で整えたりと——なんやかんやで結構な時間が経っている。それをじつと待っていた男衆は、見た目ほど横暴という訳ではないらしい。

「盗つ人改めって……警察みたいなものかな？」

「たぶんなあ。こつちじゃ珍しいけど……」

「珍しい？」

「必要ねんだよ。狭いコミュニティで犯罪なんかおこしたら、どうなるか目に見えてんだろお？　こんな奥地で村八分になつちまったら、どうしようもねえ。外で生き抜けるやつなんか、中々いねえかなあ」

「……つまり？」

「…想像以上に広いかも知んねえな、ここ。ま、端が見えねえ時点で想像はついてたつちやついてたけどよお」

フルから話を聞くに、この世界の都市というのは小規模であるのが普通らしい。まず入り口というのがなんなのかということすら理解していないが、とにかく——このような奥地にありながら、大都市を誇るこの街は異質であるとのことだ。

「全員、着替え終わったな——ん？　お前はなぜ全裸なんだ」

「やあ、申し訳ない。さつき風呂場で洗ったばかりで、着替えがないんだ」

「風呂場で洗うなよ……せめてタオルでも巻いとけ」

三人の男性の内、僕と同じ年くらいの……一番若い彼が、もつとも立場が上のような。虎のような特徴が垣間見えるあたり、強さが立場に影響を与えている可能性が高そうである。まあフルのような姿でも強いことを考えると、元になった動物の強さは当てにならないかもしれないけど。

「じゃあまず経緯を説明させてもらおう。先程、飯処『いろは』から『種』が盗まれた。俺達は下手人を追ってここまで——」

「——トラ！」

「…っ！ あ、姐さん…」

「もういいって言っただろ？ 不用心にしてたアタシも悪いんだよ。犯人探しなんてやめておくんな！」

「姐さんは悪くねえよ！ 盗んだ奴が悪いに決まってるんだろ？ それに姐さんがよくっても、盗人をのさばらしとく訳にやいかねえ」

「…アタシの頼みが聞けねえってのかい？ ——トラ坊！」

「うぐっ…」

経緯を説明すると言いながら、始まったのは痴話喧嘩のようなやりとりだ。猫っぽい女性の方が尻に敷いているようだが、トラ坊と呼ばれた彼もなかなか引き下がらない。察するに、アネゴ肌の彼女が『種』とやらを盗られ、義憤に駆られた弟分が犯人を捕まえようと張り切っている——といったところだろうか。

「フル…『種』って何かの暗喩？」

「いんや、そのままの意味。この世界はなあ、土壤が特殊なんだ…どんな植物だって育つ。だから奥に行けば行くほど、新種の種は喜ばれんだ。それだけで一財産ってこともあるかなあ。嵩張らねえし、冒險するんなら持つって損はねえ」

「へえ…昔で言う胡椒みたいなもんか」

そうこうしている内に押し問答も終わったようで、姐さんとやらが部下二人の片方に無理やり連れていかれた。ああいうことをすると後が怖そうだが、彼のその後が心配である。冷や汗をかきながらこっちに向き直ったトラ坊さんは、頬を一つ叩き、しかつめらしい顔で口を開いた。

「見苦しいとこをすまねえ…じゃあさつき続きだ。聞いてただろうがよ、いろはの姐さんの種が盗まれた。匂いを辿ってここまで来たんだが、湯で洗い流したせいかぷっつり途切れちゃってな」

「えーつと…本人の匂いってことなら、お風呂に入っても意味ないような…」

「…ん？ ああ、違う違う。間抜けな犯人が、逃げる時に味噌汁引っ掛けちまったらしくてな。その匂いを追ってきたんだ」

「ふむふむ…：人相の方は？」

「それが『覚えてない』の一点張りですよ…：姐さんにも困ったもんだぜ。優しいだけじゃやってけねえ——ってなんでさつきから俺が質問されてんだ」

「まあまあ、そう言わずに。僕ってこういうの得意だからさ。疑われたままってのも嫌だし、手伝わせてよ」

「いや、お前も容疑者の一人だからな？」

「大丈夫大丈夫。僕がやってないってのは、僕が一番知ってるよ」

「それじゃ意味ねえよ！」

「さて、まずは味噌汁の匂いを消すために犯人が取った行動だけど…」

「無視すんな！」

「聞くだけなら損はないだろ？ みんなで推理していこうじゃないか」

「む…」

「どうやら『盗つ人改め』とは公的な機関と言うわけではないらしく、強権を振りかざすような真似はしないらしい。少し考えた後、僕の提案に頷いた彼は、腕を組んで清聴の構えをとった。腕つぶしには自信がありそうだが、考える方は苦手なのかもしれない。

「『推理』ってのは、状況を推測することから始まるんだ。人間が行動すると、何をどうしようとも『繋がり』ができる」

「む…？」

「味噌汁の匂いがついたならどうするか？ そうだ湯屋へ行こう…：これは繋がってるだろ？」

「ああ、そうだな」

「逃げる時に引っ掛けたんなら、当然衣服にもかかっているだろうね」

「ふむ…」

「となれば、服の方も洗った可能性が高い。わざわざ湯屋で服を洗う人間が目立たない筈もないだろ？ 目撃者はきつといるさ。——誰か！ そんな人間を見ていないかい？」

——みんなの視線が僕に突き刺さった。

「…まあ、今までののはただの推測。それだけで犯人を決めつけるなんて、愚の骨頂だ。さっきまでの説明はなかったことにして——」

「捕らえろ」

「はっ！」

「ストップストップ！ まだ推理は終わってないぜ！」

「…聞いてやろう」

「とりあえず、味噌汁の匂いなんかより重要なことがあるだろう？ …そう、持ち物検査さ！ シンプルに、種を持っている奴が犯人だよきつと」

「誰でも考えつくことだな…」

「王道つてやつさ。ところで『種』つて、むき出しじゃないよね？」

「ああ、肉球の模様が入った白い袋に入ってたらしい。飯の代金として受け取ったばっかで、見えるところに置いとちまったんだとよ」

「…ん？ 種は高価なものだって聞いたけど…ご飯の支払いで使われたの？」

「一人で米二十俵、食い切ったらしいからな。蔵の四分の一無くなっただけで——まあそれでも釣り合っただけだよ」

「なるほど…いやいやいや」

二十俵つて…え？ 一トン超えてるよね？ どんな化け物だ。しかし彼の表情は至極真面目で、嘘を言っているようには思えない。ならばそこは言及するところではないのだろう。しかし常識が違うとはいっても、限度があるだろうに。食前と食後でどれだけ体重差あるんだ、その人。

「じゃあ手荷物検査させてもらおうか！ ——ん？」

「…フル？」

トラ坊さんの視線が僕の下半身へ移動したため、まさかそつちの人かと誤解しかけたが…よくよく見ると、少し隣のフルへ視線をやっていた。僕も釣られて見てみれば、なんだか非常に顔色が悪い。冷や汗ダラダラである。

「あ、い、いや…その…オイラ、それ持って…」

『それ』って……肉球柄の袋に入った種のこと？」

「う、うん——や、盗ったんじゃねえかな！ その『客』ってのがたぶんオイラの連れで……おんなじの持つてるから、だから、それで……！」

「…見苦し言い訳はやめろ。そんな偶然があるか？ ——抵抗はするなよ」

「くっ……！」

ううん……僕はフルがやってないってわかってるけど、確かに彼らから見ればほぼ犯人確定だろう。物証というのは、それくらい強いものだ。しかし黙って見ているわけにもいかないし、フルには返しきれない恩もあるし……なにより友達だ。

「ちよつと待つ——」

「邪魔すんじゃねえ！」

「——えべっ！」

「ふあっ!？」

押し通ろうとするトラ坊さんの腕を掴んだら、振り払われた……のはいいんだが、まるで自動車に衝突でもされたかのような衝撃に襲われ、積んである籠の方へ吹っ飛ばされた。少し額が切れたようで、視界が赤に染まる。とはいえ頭の怪我は出血が派手に見えるだけだし、見た目ほど重傷ってわけでもないだろう。少しふらつきながらも、なんとか立ち上がる。

「っ、痛う……」

「双樹！」

「え？ あ、す、すまん、そこまでやるつもりは……——っ!? なっ……！」

トラ坊さんのセリフと狼狽ぶりを見るに、おそらく僕の力が想像以上に弱かったんだろう。フルいわく『原種がここにいるのは有り得ない』とのことだし、なんの力も持っていない人間を相手にしたことがないのかもしれない。

そう、だから僕は怒っていない。不幸ないき違いってやつだろうし。問題があるとすれば——フルが僕のために怒ってくれていると

いうことくらいだ。それ自体はとても嬉しいのだが……僕は少し勘違いしていたらしい。

浮葉という種族が強いのは確かなんだろうけど、やはりフルはその中でも特別なようだ。僕のところへ駆け寄ろうとするトラ坊さんの——その前に立ちはだかるフルは、ハッキリと怒りをあらわにしていた。僕からは背中しか見えないけれど……いや、背中しか見えないからこそ、その奥にいる人たちの感情が手に取るようにわかったのかもしれない。

そこには確かな『怯え』があつた。この中で最も小さな少年に、みんなが総毛立っている。比喻ではなく、本当に総毛立っている。驚かされた猫の尻尾のように、二倍くらいに膨らんでてキュートだ。

「いつつ……ありがと、フル。僕は大丈夫だから」

「あ——う、うん……わりい、守ってやれなくて」

「反省してるんなら許すさ。次からは気をつけるんだぜ」

「うん……いや、なんかおかしくねえか!？」

本能的に強さがわかるのか、それとも別の何かに反応しているのかは不明だが……争うまでもなく格付けは済んだらしい。恐怖で固まったままのトラ坊さんの肩に手をポンと置き、僕は安心させるように語りかける。

「——これが僕のだ……!」

「オイラのだ……!」

「……僕の家族のだ!」

「またランクアップしてるう……!」

凝り固まった空気をほぐすように、おどけてみせる。今の空気は、友達をからかいすぎてマジ切れさせてしまったような気まずさを感じられる。もしくは、授業をボーコットした先生が出ていった後の教室のような雰囲気だ。『誰が謝りにいく?』『お前いけよ』的な。

「……まあそんな訳で、僕はひ弱だから乱暴なことをするのはやめてくれ」

「あ、ああ……悪かった。まさかあそこまで吹っ飛ぶとは思わなかった……!」

「僕が貧弱だつて言うのか!？」

「いま自分で言ったじゃねーか!」

「まあそうだね。じゃあ誤解もとけたところで、真犯人を探そうか」

「…ちよ、ちよつと待て! それとこれとは話が別だ!」

「…怪我が痛いなあ…:痛いなあ…?」

「うぐつ…! お、お前なあ…」

「——確かに君の気持ちもわかる。いまこの場で誰よりも怪しいのは、フルに違いないさ。だから…:一回だけチャンスがほしい。真犯人——『煉獄の強奪者』を見つけ出すチャンスを!」

「誰だそれ!」

「——犯人はこの中にいる!」

「知ってるよ!」

薄暗い脱衣所を見渡し、ぐるりと容疑者たちを見渡す。老若男女様々、動物の特徴も多様で、見ていて楽しい限りだ。フルの威嚇の恐怖から抜けきっていない人もいて、ちよつと申し訳ない気分である。彼らの注目は僕に集まっついていて、腰にタオルを巻いただけのこの状況に——少しばかり興奮してきた。別に露出が趣味という訳ではないが、こうもマジマジと見つめられると照れるぜ。

狐耳のおばさんに、口髭をたっぷりと蓄えた狸っぽいご老人。黒猫…:いや、黒豹だろうか? しなやかな印象を覚える少女に、ボディビルダーもかくやといった犬耳偉丈夫。ぱつと見では誰が犯人かなどわかる筈もないが——僕にはお見通しだ。

「犯人はお前だ!」

「全部すつ飛ばした!」

「にやつ!? な、なにか証拠でも…」

「説明は後だ! ——捕まえてくれトラ坊!」

「トラ坊つて言うな!」

「ちいっ——! くそ、なんでバレた…!」

僕が完全に断定していることを察したのか、トラ坊さんが動く前に、犯人と思しき少女が逃げ出す。とはいえ、フルがすぐに動いてくれるだろう…:と思っていたが、展開についていけないようで、頭

の上にハテナマークが浮かんでいる。可愛い。

外へと駆け出していった彼女を追いかけ店の前へ出ると、通行人たちが驚いた表情で上を見ていた。その視線の先には、鐘塔の屋根に乗った少女の姿がある。まあいきなり屋根の上に飛び乗るなんて頭のおかしいムーブをかませば、誰でも驚くだろう。

「…なんで私だとわかったの？」

屋根の上——というより、屋根の頂点に足と手をつけてしやがむ少女。思い切りパンツが見えている……いや、ふんどしかあはれは。十五、六歳と言ったところだろうに、羞恥心というものは無いのだろうか。いや、さつき一緒に風呂に入っていたのだから今更かもしれない。惜しむらくは、薄暗すぎて彼女の存在に気付けなかったことだろう。

「おう、俺もそこは気になるな。どうということなんだ？」

「先に捕まえなくていいのかい？」

「ありや無理だ。あの身のこなし……追いつける気がしねえ」

「そうなの？ 意外と不甲斐ないねえ」

「ぐっ……！ こ、この辺じゃ敵無しなんだけどな……」

「ま、いいや。聞きたいなら話してあげるよ」

興味津々といった風に、みんなの視線が僕へ集中する。こんな往来で腰巻き一つとは、なにかに目覚めそうである。というかあの娘もさつきフルにびびってたんだから、早く逃げなくていいのだろうか。それとも強さと逃げ足の速さはまた違うってことなのかな？

「あの脱衣所にいた容疑者は十二人……その内、僕とフルを除けば十人だ。これが何を意味するかわかるかい？」

「……？ いや……」

「……『十人の中に犯人が一人』いるってことさ」

「お、おう……？」

「——僕はその十％に賭けた……！」

「ただの勘じゃねーか!!」

「結果オーライ！」

「納得いかねえ……！」

僕は自分の直感をなにより信じるタイプだ。その勘が囁いたのだ、彼女が怪しいと。結果としては間違っていないかったのだから、万々歳といったところだろう。ふんどしちゃんも目を丸くして驚いているが、油断してていいのかな？僕はフルの方へ目を向け、片目をパチパチと瞬かせる。アイコンタクトで『彼女を捕らえろ』と合図した——が、伝わらなかつたようで、少し首を傾けた後にウインクを返された。可愛い。

「ふいー……なら私に落ち度はなかってことだな！　そうだろう？　二人共！」

「バレてんなら一緒じゃないの？　ちよワンミス〜」

「まったくだ。だいたい逃げる時に味噌汁を零すのが悪いんだ、阿呆め」

「う、うるさいな！」

「なんか増えた……」

気付けば鐘塔に乗っている娘が三人に増えていた。みんな一様に黒い毛皮で、猫科の動物の特徴を持っている。どうやら盗つ人は三人組だったらしい。右端の娘が手に持っているのは、盗まれたと思しき種袋だ。なるほど、持ち物検査をしても意味はなかったようだ。危ない危ない。

「ふふふ……経緯はどうあれ、よくぞ私の正体を見破つたな！」

「なう……勝手に自爆しただけじゃね？」

「そこの半裸男！　名を名乗れ！」

「こういう時は先に名乗るのがマナーだぜ」

「確かに！　……ならば聞け！　——我が名は『桃千代』！」

「私は『栗神名』〜」

「そしてあたしが『柿つばべっ!?!』」

「あつ……」

何故かどうどうと名乗りを上げようとした三人娘——いやもう三馬鹿でいいか。最後の一人が見得を切ろうとしたところで、すっ転んだ。よくよく見れば足首に巨大な何かが巻き付いていて、それに引つ張られたようだ。それは他の二人も同様だったようで、悲鳴を上げる

間もなく屋根の上から引きずり降ろされた。

近くに駆け寄ると、彼女たちの足首に巻き付いていたものの正体が知れた……僕の腕よりも太い、大蛇だったようだ。カラフルな鱗の、その先を視線で辿っていくとそこには――

「ラリカー！」

――そこには、ドスケベな格好をした女性が決めポーズをかましていた。気を抜くと腰巻きにテントが一つできそうである。後で水風呂にでも入るとしよう、そうしよう。

スラット・メイデン

清楚な美しさを称える時、日本ではしばしば「大和撫子」やまとなでしこなどと表されるが——ラリカと呼ばれた少女は、まさにそれだった。日本人らしい和風な顔つきであり、腰まで届かんばかりの艶やかな黒髪が無造作に、それでいて美しさを損なわずに揺れている。白無垢でも着せれば、立派な日本美女の完成だろう。

そう——着せれば、だ。彼女の首から下に視線を向ければ、なんとまあ、恥という概念を脱ぎ捨ててしまったような状態である。下半身はデニムのようなものを身に着けているが、その丈は太ももの付け根から少し伸びた程度のもので、脚のほとんどは晒け出されている。そしてその短さに加え、横にスリットまで入っているのだ。彼女がちゃんとパンツを履いているのかどうか、僕の中で疑惑が尽きない。

上着は黒いタンクトップだが、丈はヘソよりも上に留まっている。ピッチリとした着こなしで、そこそこにポリウラムのある胸の形が丸わかりだ。物見櫓のお兄さんが『ドスケベ』と評したのも、わかり味が深い。背中のでかいリュックには旅の装備が入っているのだろうか？ フルがやけに軽装だったのは、彼女が荷物持ちを担当中だったからなのかも。だとすれば『早めに合流したい』ってのも頷ける。

「フル！ 良かった、会えたねー！」

「おー、割と早めで助かったぜえ。けどなんでそいつらがワルモンだって知ってんだ？」

「やーやー……女将さんに渡した種なんだけど、間違つて渡しちゃつててき。急いで戻ったら女将さんいないし。従業員の人に聞いたら泥棒がどうたら言つててね、こっちきたらちようど種持つてる人がいたから——ここはラリカの出番かなって！」

「間違つてたらどうすんだよ……」

「ふふん、バカと煙と悪者は高いところが好きって言うもんねー。バッチリ正解だったっしょ？」

「んまあ、そうだけだよお」

フルと彼女の会話をしげしげと眺めていると、一つ気付いたことが

ある。先程までは彼女のことを『大蛇を操るドスケベテイマー』だと考えていたのだが、よくよく見てみれば蛇の胴体はそのまま腕に同化して繋がっている。ふーむ…？ まあいいや、フルの仲間だというならば先に挨拶をするべきだろう。

「やあ、こんにちは。僕は沙羅——」

「どこ向かって喋ってんの!？」

「いや、蛇の方が本体という可能性を考慮したんだけど」

「そんなことある!？」

「絶対には言えないぜ」

僕の言葉に対し、彼女は自分が本体だと主張するかのように、腕を人間のそれへと戻した。まるで伸ばした巻き尺を戻すような光景に、目を疑う。この世界にきてからは僕だけが驚きっぱなしだったが、これについては往来の通行人も少なからず驚愕をあらわにしていた。

「…何かの病気?」

「ちがーう! これは——って、ああつ!？」

「ふははは! バカめ、自ら拘束を解くとはな!」

「おつむ弱めく?」

「頭も股も緩そうな見た目だしな!」

「なつ…! い、言わせとけばあ…!」

拘束が解かれた瞬間、ゴキブリもかくやと言うほどに素早く逃げ出した三馬鹿娘。くるりと回転しながら屋根の上に跳び乗る姿は、言動とは裏腹に惚れ惚れするほど華麗だ。三者とも別々の方向に逃げ出すあたり、こういつた事態に慣れているのだろう。

「フル、追わないのかい?」

「別にそうする義務もねえかなあ。盗まれた方は別にいいつつってんだから…捕まえたところで得られるもんもねえ。トラなんちゃらって奴のメンツくらいかあ? オイラのこと捕まえようとしたし、双樹にも怪我させっし、協力してやる義理なんざ欠片もねえなあ」

「うぐっ…」

「それに街の外ならともかく、人のいるところだと限度つてもんがあるかなあ。あいつらの速度がほぼ上限だぜえ——建物とか壊しても

いい、人にぶつかって怪我させてもいいってんならやりようもあつけどよお」

「なるほどねえ…」

逃げ出す三人を悔しそうに見つめるだけだったラリカ嬢にも納得だ。個々の身体能力に相当な差が生まれる社会だと、そういつたところには気をつけなければ、生身同士での交通事故というのもあり得るわけだ。

「まあ種は取り返したんだし、結果としては悪くないんじゃないかな」

「…へっ？ あ、あれ、なんで種、持って…？」

「念のためにね」

「意外と抜け目ねえのな、双樹」

「彼女が抜けすぎってだけさ」

「む、むう…：…っていうか君はなんなのさ。なんかフルと仲いいみたいだけど…？」

「人の素性を尋ねる時は、自己紹介から始めるのが筋だぜ」

「はい。えつと…：…ラリカはねえ、『ラリカ・クルトクルン』っていうの。好きなものは卵焼きでー、嫌いなものはヌルヌルしたもの！」

「ご丁寧にも、僕は沙羅双樹。好きなものはざる蕎麦で、苦手な人は『自分のことを自分の名前で呼ぶ人』かな」

「いきなり嫌われてる!？」

「いやいや、嫌いなんじゃないやなくて苦手なだけさ。ぜひとも仲良くしてほしい」

「どっち!?! …っていうか！ ラリカがラリカのことをどう呼ぼうがラリカの勝手だもんね」

「…ちなみに年齢は？」

「十六！」

「ラリカ——君のために—っだけ言っておきたい」
「な、なに…？」

僕は真面目くさった顔でラリカを見つめた。半裸の僕と、ほぼ半裸のラリカが往來で向き合っているのは、この街の風紀的にどうなんだろう。というか、このままでは住人たちの「毛無し」への認識が、基

本半裸といった感じになるんじゃないかな。

「——十歳を超えてもまだ一人称が名前の人間はね……はたから見るとかなり『痛い』」

「…っ!? そ、そんなことないよ! そうだよね? フル」

「フル!」

「なう……実はオイラもちょっとアレだなんて思ってた……」

「そ、そんな……そんなこと言わないでよ! だったらフルの『オイラ』だって相当だよ!」

「うなっ!? お、おまつ、オイラのことそんな風に思ってたの!」

「——二人共! …醜い争いはやめるんだ!」

「誰のせいだよ!」

いや、僕のせいってほどでもないような……? まあとにかく。自分のことを自分の名前と呼ぶのは、せめて小学生で終わりにしておくべきだと思う。許されるとすればドナルドくらいのもだろう。それを客観的に理解させるためにも、ここは僕が犠牲になろうじゃないか。

「双樹はね、二人が仲良くしてくれる方が嬉しいなって。双樹はそう思うんだ」

「うわあ……」

「そう、その『うわあ……』を、今まで君と接してきた人間は感じていたんだぜ。目の前にしたら理解できるだろう?」

「はうっ……!? うわ、うわ——うわああ!!」

両手を頬にそえ、顔を真っ赤にしながらその場で足踏みし始めるラリカ。今までの自分がどう見られていたのか、フラッシュバックしているのだろう。黒歴史を自覚した時というのは、総じてそういうものだ。僕はそんな彼女の肩に優しく手を置き、耳元で囁く。

「いま気付けたんなら、まだ遅くないよ」

「あ……」

「言いにくいことでもちゃんと指摘しあえるような関係をね、友達っていうのさ。これで僕と君は友達だ」

「う、うん……！」

「順番だとただの悪口じゃね？」

「フルは黙っててくれ。ラリカ、僕の助言が役立つのは理解できたかい？」

「うん……」

「よし、じゃあ今日から僕の言葉には絶対服従だ」

「うん！」

「おおい!？」

「フル！ ……今は人格を否定して洗脳してるんだ。静かにしてくれ」

「やめろっつーの！」

「——げふうっ！」

「双樹様！」

「ほんとに洗脳されてるう！」

まさかフルに腹パンされるとは思わなかったが、これはこれでいいものだ。より気安い関係になれたとも言える。しかしただの冗談だったのに、どんだけ染まりやすいんだラリカは。悪人に騙されないか心配になるな。

「さて、じゃあ一件落着きということ……お風呂に入りなおそっか。体も冷え切っちゃったし」

「おー、そうしようぜえ。さつきは中途半端だったかなあ」

「トラ坊、これ……いろはの姐さんとやらに返しといてよ。ラリカのとほもう交換したからさ」

「だからトラ坊っつーなつての。俺は虎太郎ってんだ……『八坂虎太郎』。犯人には逃げられたけどよ——なんだかんだ助けられちまったな。お前ら外からきたんだろ？ なんか困ったことがあったら言うってこいよ。割と顔は聞く方なんぞな」

「はは、そんなに恩に感じられても困るよ。じゃあさっそくなんだけど、新しい服が欲しいから湯屋まで届けてほしいんだ。あと血は止まったけど、お風呂には入りたいから絆創膏かなにか欲しいな。お腹も減ったから、虎太郎の家でごちそうしてもらえる？ あ、もしかしたら泊まらせてもらうかも」

「謙虚って言葉知ってるか？」

「僕の座右の銘だね」

「左右盲だろお前」

座左の名でも意味は同じだけどね。湯屋へと入っていく僕らを、なんとも言えない表情で見送ってくれるコタくん。なんだかんだで優しい彼に、甘え倒させてもらおうとしよう。僕は社交辞令でも真に受けるタイプの人間なのだ。京都でぶぶ漬けを出されたら、最後まで完食するような人間に僕はなりたい。

「ラリ——わ、私も一緒に入ろつと。久しぶりだなー、お風呂！」

「ここ、混浴だぜ？」

「私は気にしなーい」

「そうなのかい？　ありがとう」

「なんのお礼!？」

「ま、どっちにしろ僕は後になるけどね。湯船を血で汚すわけにもいかないし、お先にどうぞ」

「あ、怪我してるんだ。じゃあ私が治してあげる！」

「…治す？」

訝しがる僕を無視して、ラリカが僕の頭を両手で掴む。彼女も基本的な身体能力は化け物じみているんだろうし、力加減を間違えられると、僕の頭は潰れたスイカになること間違いなしだ。しかし信頼を損なうような指摘をするのもどうかと思い、僕は目の前のおっぱいに集中して恐怖を紛らわした。母性の象徴とは、男を安心させるものである。

——などと考えていたら、傷口を乱暴に舐められた。獣っぽいフルに舐められるんならまだわかるけど、どういう状況だこれは。そういうえば腕を蛇に変えていたが……もしや吸血鬼だったとかいうオチじゃないだろうな。最近の創作ではそういうタイプの吸血鬼も減ってきたが、古い物語では、オーソドックスなコウモリの他にも獣や蛇に姿を変える存在は珍しくない。

「んっ……うわ、すごい健康体」

「長寿記録塗り替え、狙ってるからね」

「ふふ、双樹じや無理でしょ——っていうかこの血の味……なんで原種がこんなところにいるの？　ありえなくない？」

「不可能を可能にするのが僕って男なのさ」

「オイラに会わなきゃ死んでたじゃねーか」

僕の血をモゴモゴと舌で転がしているラリカ。そして口の動きが止まったと思ったら、傷口に指を当ててきた。その瞬間、少しの痛みと熱が僕を襲い——彼女が離れた時には、綺麗サツパリと傷口が消えていた。唾液が付着した部分をいくら触っても、僅かな痛みすら感じない。僕は内心で驚きつつも、額をこすった指を鼻の前に持っていた。

「なにしてるの？」

「いや、臭くないかなって」

「失礼すぎない!？」

「いや、どんな人間だろうが唾ってのは乾くと臭いもんさ」

「臭くないもん！　ほらほらほら！」

「ぐあつ——!？」

いったいどんな教育を受けたら、他人の顔を舐めたくる十六歳になるんだ。特定の人間にはご褒美かもしれないが、僕の性癖は至ってノーマルだぞ。しかしどう力を加えようと、ラリカは微動だにしない。体重差を考えればありえないのだが、いったいどうなっているんだ。うーむ……：そういうえば彼女は一トン以上もの米をたいらげた後だったな……：生命の神秘を百段階くらい超越してるぜ、まったく。唾液でベトベトになった顔を彼女の服で拭いながら、そんなことを考える。

「ふぎやつ!!　なにすんだようー！」

「こっちのセリフなんだけど」

手の甲におっぱいが当たったような気がするが、不可抗力である。しかし不思議な素材の服だな……：温かいような冷たいような、固いような柔らかいような。どこまでも伸びていきそうな伸縮性もある。

まあそれはおいといて、これで心置きなく湯船につかれるというものだ。ラリカにお礼を言いつつ、三人で浴場へ向かう。薄暗いとはい

え小さな窓からの光も差し、行灯の光もチラチラと揺らめいている。いや、むしろその薄暗さが隠微いんびを淫靡いんびに変えているとすら言えるだろう。ちよつとエツちなハプニングくらいは期待していいのだろうか……などと考えていたら、湯船に入っていた先客が目に入る。そこにはなんと――

「にやつ!？」

「あゝ」

「ゲッ!」

――脱兎の如く逃げていった筈の三馬鹿が、ゆつたりと足を伸ばしていた。犯人は現場に帰ると言うが、いくらなんでも度胸ありすぎだろう。というかどのタイミングで湯屋へ入ったんだ？ 揃いも揃って細身で華奢な裸体が、透明な水越しに垣間見える。うーん……ま、とりあえずご相伴にあずかるとしよう。風呂場で騒がないというのは、当然のマナーなのだ。

リディークラス・シェア

壁側を背にする三馬鹿娘を囲むように、僕たちは湯船につかった。まるで蛇に睨まれた蛙のように縮こまっているのは、やはり強さに隔たりがあることを理解しているのだろう。まあ僕の方へ突進とかされたら死んでしまう気がするけど、チラチラとフルの視線を感じるので、危なくなったら守ってくれろと信じよう。『守れなくて悪かった』などと、本当に思ってくれているようで嬉しいような申し訳ないような。

「おいどうする…?」

「灯台下暗し作戦、失敗〜?」

「だからさっさと離れようつつたんだ…ふぎやつ!」

「つーかまえたああ…!」

「ひいいっ!」

先程アバズレ扱いされて怒っていたラリカが、その表情に怒気を孕ませて、一番小さい娘の尻尾を掴んでいた。猫の尻尾を掴むのはよくないらしいが、大丈夫なのだろうか? …というか、いま気付いたんだけど——ラリカの髪の毛がショートカットになっている。うーん…今までの情報から推測すると、彼女は自身の体を自由自在に変化させられるということなのかな。となると、あの均整の取れたボディにも偽装の可能性が芽生えた。後で聞いてみよう。

「誰の頭と股が緩いつてえ…?」

「じよ、冗談だつて! 緩くない、ない! 締まりも良さそうだもんな! ——あべっ!」

「言い方!」

「つつう…! くう…あ、あたし達のこと、どうするつもりだ…?」

涙目で頭を擦りながら、自分たちの処遇を尋ねる——柿なんとかさん。名乗っている最中にラリカが引きずり降ろしたせいで、彼女の名前だけ半端にしか覚えていない。ちなみに見た目は金髪のベリーショートで、活発な印象といった感じだ。

最初の一人、黒髪短髪で褐色の娘が桃千代…だったかな? もう

一人、間延びした喋り方が特徴的な娘は栗神名だった筈。髪型はふわっとしたソバージュで、タレ目で眠そうな表情である。『頑張らない姿勢』に憧れる年頃なのかもしれないな。

しかし褐色率の高さがすごい。フルも入れれば、半分が黄色人種よりも濃い目だ。コタ君も浅黒い肌だったし、浮葉という人種はそうなりがちなのかな？ 栗神名と名乗った娘は白い肌だから、一概には言えないかもしれないけど。

「柿つば……柿つば九郎、君はなぜ——」

「柿椿だ！」

「おっと失礼。『かきつば』までは聞こえてたから、予想してみたんだけど……外したか」

「当てる気あつた!?!」

「もちろん」

フル以外の浮葉の裸体を間近で見てわかったが、肌の表面積における毛皮の割合というのは、人それぞれのようだ。共通していることといえば、胸や局部の周辺には生えていないということくらいか。毛のある動物でもその周辺は薄いし、役割を考えるのならば当然といったところだろうか。そんなことを考えながらまじまじと三人娘を見つめていると、横のラリカに肩を叩かれた。

「双樹、見すぎ」

「え？ ああ、ごめんごめん。やましい気持ちはないんだけど、すごくエッチだなあつて」

「それやましいって言わない!?!」

「いや、でも……逆に聞くけど、『君の裸体には何も感じない』って言われたらラリカはどう思うのさ」

「う……それはそれでムカつくけど……」

「だろ？ なら僕がそういう目で見るとは、彼女たちへの礼儀みたいなもんだよね」

「むちやくちや言ってるぞアイツ……」

「でもそういうことなら、誘惑したら見逃してもらえるかも」

「よっしや！ 灯台下暗し作戦から色仕掛け作戦に変更だ！」

「ラリカ、彼女たちは見逃す。いいね？」

「まだ誘惑されてもないよ!？」

「お前らなあ……風呂じゃ静かにするもんだぜえ」

顔を半分くらいまで沈めつつ、口でブクブクと泡を立てながらジト目で僕たちを睨むフル。そんな可愛い行動のせいで、顔の上半分に視線がいったせいとか、今更ながらに気付いたことがある。頭上の獣耳の他に、横にも普通の耳があるのだ。三人娘の方を確認しても同じだったから、これは浮葉共通っぽいね。うーん……きつとセルフ立体音響な感じで、ライブなんかを百二十%楽しめるのだろう。羨ましい限りだ。

まあそれはともかく、自己紹介もまだだったことを思い出したので、サービスショットはまたの機会ということでご我慢した。ラリカの方も、相手を十分に怯えさせたことで満足したのか、捕まえる意志はないようだ。フルもそうだったが、正義感や義務感にことさらにこだわる様子は見られない。自分に関係がないのなら、特に気にしないということなのだろう。

「なんの話してたんだっけ……ああ、そうだ。君たちはなんであんなことをしたんだい？ 魔が差したって感じでもなかったけど」

「…話したら見逃してくれるか？」

「僕に決定権はないよ」

「そうなのか？ じゃあお前ら、誰が頭なんだよ」

「リーダーはまだハグレたままだけど——っていうか、まず双樹は何者なの？ なんでフルと一緒にいるの？」

「僕？ 僕は六百年前から時を超えてやってきたタイムスリップパーで、平行世界の住人さ。フルと一緒にいるのは僕を守ってもらうためと、僕の面倒を見てもらうためと、僕を送り返してもらうためだよ」

「頭大丈夫？」

「大丈夫じゃなかったら、ラリカには治せるのかい？」

「そっち系はちよつと無理……っていうか真面目に話してよねー」

「大真面目も大真面目さ。僕にとってはさっきの説明が真実だよ。あとは頭がおかしくなっちゃったのを自覚してないか、実は夢の中かも

しれないってことくらいしか思いつかないぜ」

「うーん…？ フルー？」

「んー？ まあ森の中で一人ぼっちだったのは事実だかなあ。それにきつき財布の中身とスマホ見せてもらったけどよお、年代は双樹が言ってる通りだったぜえ。別に作ろうとすりや作れねえこともねえけどよ、意味ねえしな。オイラは双樹のこと信じてる」

「スマホ？」

「ん？ ああ、今で言う『オルタ』みたいなもんだ。オイラも博物館でしか見たことなかったけどよ」

「へええ…！ ねね、ちよつと見てもいい？」

三人娘をそっちのけで、スマホに興味を示すフリカ。まあ大昔の機械とかに惹かれる気持ちはわかる。記念館とか博物館へ行くのは、そういう好奇心を満足させるためだしね。僕が領いたのを見て、フルが鞆からスマホを取り出して渡してくれた。風呂場だけど防水だから特に問題もない。

そして三人娘も、珍しいものを見たともいうように寄ってくる。明らかに時代回帰してる街並みから考えても、電気製品は少ない……あるいは皆無なのだろう。ここで生まれた彼女たちからすれば、珍しい代物なのかな？

「すげー！ なんか光ってる！」

「うはっ…！ やっぱ古臭えなあ。画面タッチ式とか面倒くさくねえの？」

「猫が映ってる。絵じゃないの？」

「ふえー…携帯するのに厚すぎじゃない？ それにこれじゃ割れやすそう…」

「あたしにも見せてー！」

原始人と未来人に品評されているような気分だ。いやまあ、事実そんな感じだけだ。しかしこうも間近で囲まれると、どこを向いていいのかわからなくなってくるな。視界を占めるのは顔が二割、毛皮と肌が四割、そしておっぱいが実に四割だ。無、小、中、大とバリエーションにも富んでいる。

「ラリカ、よかつたら膝の上にくるかい？」

「露骨すぎる！」

「ちよつとエツチなことしたいって思っただけじゃないか！」

「そこが露骨って言ってるんだけど!」

「兄ちゃん、さつきから発情期でもないのに盛さかってんなあ…」

「はつ——え？ 発情期…?」

ちらつとフルやラリカを見ても、桃千代の言葉に違和感を覚えた様子は無い。発情期…発情期？ 人間にそんなものがあるなんて、聞いたことがないけれど。ただまあ、獣の特徴が習性にまで及んでいるなら、有り得ないことじゃないのかもしれない。

そうになると、特に忌避感もなく裸の付き合いをしているこの状況も納得できる。『時期』で性的興奮が高まるというのなら、つまりそういった時期から外れると、その手の昂りはある程度まで抑えられるということだ。

しかしラリカはどう見ても浮葉の特徴はないし、どういうことだろう…いや、待てよ？ 『混浴だぜ?』という僕の言葉に対し彼女は『気にしない』と言っていた。膝の上にくるかという言葉に対して突っ込みを入れた事実も、僕の言動に少なからず性的なものを感じたからこそだ。となれば、彼女に限って言えば本当にそういうのを気にしないタイプってだけの話かもしれないな。

「なう、原種は時期とか関係なく発情すんだ。こんなとこまでこれる原種なんかいねえかなあ、知らなくてもしやあねえけどよ」

「原種?」

「んあ? …ああ、こつちじや毛無し…だったっけか?」

「へえー…じゃあこつちの姉ちゃんのスケベなカツコも、ずっと発情してるからか? 年がら年中で男を誘ってるって——やっぱユルユルじゃん? ——ぎにやにやにやつ!」

「桃千代ちゃんはお口がユルユルだねー…いつそ閉じないようにしちやおつか? 砕くのと抜くのと、どっちがいい?」

「ごめんにやひやい! ごめんにやひやい!」

僕の目には、ラリカが桃千代の顎を軽く掴んでいるようにしか見え

なかったが——少し耳を澄ますと、ざばざばとお湯が流れていく音の他に、ミシミシとなにかが軋む音が聞こえる。親指と人差し指だけで骨を砕けるって、どんなピンチ力してるんだろう。

「あー……お前らは自分たちのことなんて呼んでんだ？」

「…？ 桃千代だ！」

「栗神名く」

「柿つば——」

「いや、そうじゃなくてよお。『毛無し』に対して自分たちは、ってこと」

「…？ 普通に『人間』だけど」

「——ああ、なるほどなあ。そこまで交流ねえのかあ……毛無しがこの街に来るのってどのくらい珍しいんだ？」

「さあ？ 私は見たことないしな。そういうのがいるって知ってるだけだ」

「私もく」

「あたしも！」

「んー……ここまで来ると、そんなもんか。一応言つとくとなあ、毛無しにもいくつか種類があんだよ。双樹みたいになんの力も持つてねえのが『原種』……強めに叩くだけで死んでしまうから、気をつけろよなあ」

「ふーん……？」

「ラリカみたいなのが『奇杏』ききせう つつてなあ、さっきみたいに自分の体を変化させられるんだぜえ。まあ限度はあつけど、ラリカはそんなでも一級品だかなあ」

「…僕の怪我を治したのはどういうカラクリなんだい？」

「あれはねー、私の細胞を変化させて傷口と同化させたの」

「うーん……アメーバみたいだね」

「まったく間違つてはないかなー。細胞の変化中はアメーバ運動に近いし……まあ速度は比べ物にならないけどね」

「その理論でいくなら、完全に別人になることもできるのかい？」

「それは無理」

ふむふむ……なるほど、頭は変化させられないと。まあ脳味噌まで別人になったら、戻り方すらわからなくなるもんな。当然の話だ。あとは、基本的に有機物にしか変化できないらしい。なんともまあ、羨ましい体をしているものだ。僕がそんな力を手に入れたら、まず人面犬になってみたいものである。

「つーか話、変わりすぎじゃね？ あんまゴチャゴチャすると、頭に入っついていかねえぜえ」

「むむ……じゃあ単刀直入に聞くけど、フルは双樹を連れていくつもりなの？ 街の中ならともかく、原種を旅に連れてくのはちよつと無理だよ……」

「なう……とりあえずルーチェに引き合わせよつかなって。双樹が戻れるかどうかはわかんねえけど、こういう訳わかんねえ事態はアイツに任せんのがベストだかんなあ」

「ちよつと待ってくれフル。僕が帰れるまでずっと一緒にいてくれるって言葉は——嘘だったのかい？」

「言っつてねえけど!？」

ううむ……できる限りフルとは離れたくないが、しかし本気で迷惑をかけてしまうと言うなら、涙をのんで別れなければなるまい。それに大抵の場合、転移だのなんだのといった事象は、最初にいたところが怪しいものだ。あまり離れてしまうのはよろしくないだろう。

——とはいえ、見知らぬ土地で一人残されるというのも厳しいものがある。フルたちに頼るのが不可能というなら、新しい寄生先……じゃなかった、新しい拠り所を見つけないければならない。

「桃千代、僕を養う気はないかい？」

「ないけど!？」

「栗神名は?」

「いや〜」

「そっか……」

「……」

「……」

「あたしにも聞けよ!」

「柿椿。人をお願いをするときは『お願いします』を付けようぜ」
「ぬがつ……お、お願いします」

「断る」

「なんでだよ!?!」

「言ったところで、君は頷くのかい?」

「そ、それは……!」

「君の『お願い』は空っぽだ。ただ『自分だけ仲間はずれは嫌だ』なんていう、つまらない感情しか込められていない」

「なっ……!」

「違うのかい? なら証明してほしいな。きちんと、君の言葉で」

「ぐっ……いいさ! 養ってやりやあいんだろ!?!」

「もう忘れたのかい? …『お願いします』」

「ぐぐ……お、お願いします……! 養わせてください……!」

「その言葉、忘れないようにね——あだだだだっ!?!」

「ツバキにナニ言わせてんだあ——!」

チヨ、チヨークスリーパー……! 濡れてぺちやりとした毛皮の質感と、褐色が艶やかな生肌、そして桃千代の桃が背中に密着する。首が千切れていない以上、手加減はしてくれているのだろうが——苦しいものは苦しい。

「ぐっ……ごほっ、ごほっ——こ、これが……」

「……っ!? な、なんだよ! お前が悪いんだからな!」

「……これがほんとの……『裸締め』——なんちやって」

「死ね」

「はぐっ!?!」

柔らかな感触、それと同時に頸動脈をキュツと締められて——僕の意識は暗転した。

アメシスト・フラストレーション

——はっ！　なんだか気持ちのいい夢を見ていたような気がするが……ん？　なぜ僕は脱衣所に寝転がってるんだ。しかも服を着ている状態である。ねずみ色の着流しに、横に置いてあるのは羽織だろうか。深く青い色合いが実にシャレオツで、随分と仕立ても良さそうだ。

この状況が意味するのは、誰かが僕の裸を隅々までタオルで拭き、服まで着せたという事実である。しかも下着はふんどしだ。ふんどし。この下着の履き方を考えれば、下手人は僕のイチモツを触った可能性すらある。

「おう、気がついたか」

「ん……ああ、コタ君。もしかしてこの服、君が？」

「コタ君!?!　…いいやまあいいけどよ……服の方は爺さんが着てたお古だが、質は中々のもんだぜ」

「どうもありがとう、助かるよ。ところでみんなは？」

「二階で飯食ってる……っつーかアイツら！　どの面下げて戻ってきてんだ!?!」

「まあまあ、気にしない気にしない」

「するわ!」

「僕もお腹へったし、二階行くぜ。犯行動機が聞きたいんなら、コタ君も一緒にどう？」

「むう……わかった」

粗野な雰囲気と裏腹に、何かに付けて素直だよねコタ君って。彼と一緒に階段を踏み鳴らして二階へ上がると、畳敷きの部屋でフルたちがちゃぶ台を囲んでいた。それぞれにご飯とお味噌汁、あとは山盛りの肉がドドンと真ん中に置かれている。

ラリカの横には空になったおひつが三つあるが……さつき米二十俵食べたんじゃないのか？　摂取した質量はいつたいどこへいったんだ。お腹がぽっこりしている風にも見えないし、謎すぎる。

「あ、双樹。もう大丈夫なの？」

「バツチリさ。僕の方は？」

「ちゃんと置いてるよー。ご飯よそつたげる！」

「直食いしてるおひつから？」

「私は気にしなーい」

「ラリカの唾液付きご飯か……これも一種の体液交換ってやつかな」

「や、やっぱ新しいの貰ってくる……」

「うん、そうしてくれ」

ラリカの横に僕の分のお茶碗とお箸が並べられていたので、そこに収まる。コタ君は事件前に食べたばかりらしく、近くの座布団に腰を落ち着けた。視線は三人娘を捉えて離さないが、それを向けられた当人たちはと言うと、意にも介していない。豪胆だなあ……まあそれはともかく、お腹の虫も限界だ。野菜が少ないことに物申したいところだが、とりあえず何か腹に入れよう——というところで、隣の桃千代がおずおずと話しかけてきた。

「そ、その……気絶するまではやりすぎた。悪かった」

「……えつと、どちら様？」

「——にやつ!? き、記憶が……?」

「うん、一時的な記憶喪失になってるみたいだ。この責任はどうとるつもりだい? 桃千代」

「う、うう……ん? ——覚えてるじゃんか!」

「覚えてるけど」

「こ、こ、このお……!」

「ん? 殴るのかい? この僕を? 加減を間違えると死んじゃうぜ? ——さっきの謝罪は形だけだったのかな?」

「うぐぐぐ……!」

「弱者の傲慢だわ〜」

悔しそうに唇を噛んでいる桃千代。ちらりと見える八重歯は鋭く尖っているが、舌を噛んだ時に悲惨なことにならないのだろうか。あるいは歯に青のりが付いた時に取りうとして、突き刺さったりはしないのだろうか。

「冗談だつて。君はちよつとやりすぎで、僕もちよつとやりすぎた

「……だからこれでお互い様ってことにしようぜ」

「むう……わかった」

「じゃあ仲直りの証に土下座してもらえるかな？」

「なんで!？」

「…? おかしなこと言ったかな？」

「おかしすぎる!」

「…双樹い。もしかして、昔は仲直りの時に土下座するのが普通だったのか？」

「そんなことないけど」

「じゃあどういふことだよ!」

「いや、あわよくば異文化にかこつけて上下関係をはつきりさせとこうかと…」

「最低すぎる!」

ふむふむ、とりあえず土下座に対する感覚は僕の時代と変わらないようだ。こういったところから色々と推測していかないと、何が常識で何が非常識かというのはわからないままだしね。どれだけ丁寧に教えてもらったとしても、教えるほうが『違い』を理解していないと、ずれたままになってしまう。

「新しいおひつにご飯いれてもらったよ! あと双樹の分のお味噌汁!」

「ありがと、ラリカ。しかし具無しのお味噌汁とはまた斬新だね……おひつのご飯も少なさ」

「えへへ、ちよつとつまんじやつた」

「ええ? 仕方ないなあ…」

「…外の奴らってみんな頭おかしいのか？」

「オイラまで一緒にすんなよなあ」

お揚げと豆腐が消え去った、寂しい味噌汁をすする。出汁が違うのが独特な味わいだ、これはこれで悪くない。肉の方も食べたことのない食感ではあるが、臭みのない淡白な肉を濃い味付けに仕立てていてグツドだ。

僕も含めて全員が健啖家のようで、馬鹿みたいに盛られていた肉の

山もすぐに消え去った。ラリカ以外の面々は食べた質量を無視するようなこともなく、相応にお腹も膨らんでいる。ケモっ子のぽっこりお腹は実にキュートだ。

「さて、お腹も膨れたところで……君たちに聞きたいことがあるんだけど、いいかな」

「なんだ？」

「なんで盗みなんてしたんだい？ あの杜撰さだと慣れてるってわけでもないだろうし、常習犯じゃなさそうだけど」

僕の問いに、気まずそうにしながら三人は顔を見合わせる。悪事を働いたという自覚はあるのだろう。フルもそうだし、彼女たちもそうだけど、見た目より精神年齢が高いように思える。狩猟や採集が生活の手段として実際にあると、そうなりがちなのかもしれない。

「あー……まあなんつーか、金が欲しかったんだよ。ほんとは竜でも狩ろうかと思つてこんな端っこまで来たんだけど……」

「お金を？へえ……」

狭いコミュニティにおける金銭の価値つて、あまり高いようには思えないんだけど……そのへんどうなんだろう。そもそも外とほとんど交流がない時点で、紙幣だろうが銭貨だろうが発行する必要性は感じないけど——という考えを読まれたのか、フルが言葉が発した。

「さつき聞いてわかつたんだけどよお、ここつて北海道くらいでさえみたいだかなあ。街つてより国みたいなものだぜえ」

「私たちの知つてる中じゃ最大規模だねー」

なるほど、それなら流通の関係上お金も必要になつてくるだろう。フルが言つていた『警察的な機構の必要性』に關しても、人口が多ければ必然とあるべきものだ。通信機器もなさそうな以上——どちらにせよフルは『ここじゃ使えない』と言つていたが——犯罪を犯しても、その地域を離ればなんとかなるのだろう。

「いま中央で『病氣』つてのが流行つてるんだ。なんかよくわかんないけど、怪我もしてないのにみんなバタバタ倒れちゃつて……それで……医者なんてほとんどいないからさ。今はもう、金持ちしか診てもらえないんだ」

「…まるで病気が珍しいみたいに言うんだね」

「実際、珍しいかなあ。浮葉が罹患りかんするのは、現状じゃ三種類の病気しか確認されてねえ。外傷、内傷、免疫系……基本的に原種とは比べもんになんねえほど、抵抗力もたげえんだ」

「だからねー、いざ病気になったらすぐく厄介なの」

「免疫不全系が一つ、アレルギー性が一つ……そんでなあ、感染を伴うのは一つだけだ。『狂方症』きやうほうしやうつつてなあ、狂犬病ウイルスの変種が原因の感染症だぜえ」

ちよいちよい思つてたんだけど、フルつて言動や知識が子供のそれじゃないよね。彼が天才なだけなのか、それとも教育水準が高いのか。気になるところではあるが、しかしいま考えるべきはフルが言葉にした『狂犬病』の部分だ。

『変種』というからには特性も変化しているのだろうが、僕が知っている限りにおいて狂犬病とは、発症すれば致死率百パーセントの恐るべき病気だ。発症する前にワクチンを投与すれば問題ないが、こんなところにそんなものがある筈もない。中央とやらには絶対に近づかないでおこう。

「危険な病気なのかい？」

「なあ……だいぶやべえな。下手すりや国ごと全滅もありえるぜえ」

「…マジ？」

「今は予防接種も義務付けられてつから、発症する奴なんていねえけど……初めて発症が確認されてから、ワクチン完成までに四百万人は死んだらしいかなあ」

「なるほど。ちなみにかかるのは浮葉だけ……みたいなことは？」

「ねえな。哺乳類なら大概かかる」

「僕も？」

「かかる」

「かかったら？」

「死ぬ」

うーん……ちよつと不幸すぎない？ 日常から吹き飛ばされたかと思えば、いったいどれだけ死にかければ気が済むんだ。順調に感染

が広がれば、いずれここにも被害は及ぶだろう。かといってフルに付いていくのはかなり迷惑みたいだし……いやまあ、いざとなれば拜み倒してでも付いていくけども。しかしそれは、この街に住む人々を見捨てて行くのと同じことだ。実に悩ましい。そして桃千代たちも、想像を遥かに超えた事態だったことに口をあんぐりと開けている。

「う……嘘だよな？」

「嘘じゃねえよ。ただまあ、推測でしかねえかなあ。未発見の病原体のせいかもしれないし、もつと訳わかんねえ事態ってこともあんなあ」

「…死ぬのか？ 爺ちゃんも、婆ちゃんも……！ みんなも！」

「もし狂方病なら、そうだ」

「…っ！」

「っーか飛沫感染だかなあ、お前らもかかってんじゃねえか？ 潜伏期間は二週間から一ヶ月ってとこだぜえ」

「え……」

「…ん？ それって、僕も手遅れじゃ……」

「感染源になんのは発症してからだかなあ。まだ大丈夫じゃね？」

ほっ、よかった。いや、絶望に沈んだ顔をしている三人を見ていると、よかったなんて言えたもんじゃないけどさ。コタ君も、あまりにもあまりな事態に動揺を隠せていない。もしフルの言った通りなら、一刻も早く三人を隔離しなきゃだろうし。隔離したとしても中心から感染が広がってくるなら、最悪、故郷を捨てる覚悟すら視野に入らなければならぬ状況だ。

「ふ、ぐっ……！ お、お前ら、外からきたんだろ!? なんとかできないのか!？」

「できるけど」

「できんのかよー！」

半泣きだった桃千代が、涙を引つ込めてちやぶ台に突っ込みをいれた。本当はフルに蹴りでも入れたかったのだろうが、流石にそれは怖いらしい。しかしなるほど、ずっと平静だったフルの態度はそういうことだったのか。出会ってから大した時間も経っていないが、彼が優

しい人物だというのは理解している。もし本当にどうしようもない状況だったのなら、もつと悲痛な表情をしている筈だ。

「ただオイラたちだけじゃ無理だぜえ。もう一人仲間がいて……ルーチェってんだけどなあ、そいつがいねえとどうにもなんねえよ」

「…この辺りにいんのか？ それなら俺も探すの手伝うぜ。どう考えても他人事じゃねえしな」

「なう。そりや助かるぜえ、トラ坊」

「トラ坊はやめろ」

「そうだぜ、フル。彼にはコタ君っていう立派な名前があるんだ」

「んじやコタ坊だなあ」

「…もうなんでもいいけどよ。で、そのルーチェってのはどんな見た目なんだ？」

「背はオイラよりちよつとだけちつくくてなあ、お前らが言う『毛無し』だ。んまあそっちより、髪の毛見りや一発だけどなあ」

「髪の毛？」

「アメシストってわかるか？ 透明がかった紫の髪してつから、めちゃめちや目立つぜえ」

「どんな人間だそりや…」

確かに、どんな人間なんだそれは。しかも髪が透明がかったというのなら、光の加減によつてはハゲに見えるのではないだろうか。そして衝撃の事実と言うべきか、最後の一人はフルよりも子供だったらしい。どうなってるんだこの世界は。

「街に入つてつかもわかんねえかなあ、外にも探しに行きてえんだ」

「櫓の奴らに聞けばわかるだろ。ついでに回覧も回しとく」

「私達も手伝うぞー！」

「てめえらは動き回んじやねえよ。もし途中で発症したら撒き散らすだけだろうが」

「う…」

「つーか、俺はまだ許しちやいねえからな？ 少なくともてめえらがいろはの姐さんに頭下げるまではな。どんな事情があれ、人様のものに手え出す奴あクスだ」

「んだとお…！」

「まあまあ、落ち着いてコタ君。クズ千代も」

「誰がクズ千代だコラあ！」

「でもさ、桃千代。たとえば君がとても大事にしている宝物を盗られたとしたら、どう思う？　ましてや、その犯人が悪びれもせずヘラヘラ笑ってるんだぜ。僕なら三日三晩、相手の前で呪詛を唱え続けるよ」

「こえーよ」

「悪いことをしたら謝る、頭を下げる。それができないなら、非難されるのは君たちだけじゃない。君たちを育てた人間の株まで下げることになる」

「…」

「それだけじゃない。君たちが育ったコミュニティまで蔑まれることになりかねないよ。『お里が知れるぜ』って——なあコタ君」

「俺も同じ里なんだが」

「はは、可哀想に」

「喧嘩売ってんのか!？」

憤慨するコタ君をどうどうと宥めていると、桃千代たちが彼に頭を下げた。日本式の最上級謝罪——いわゆる土下座だ。しかし彼女たちがその姿勢をとると、猫が香箱座りをしているように見えて仕方ないな。

『俺じゃなくて姉さんに謝れ』という言葉が発したあと、コタ君はしかめっ面を解いた。もう怒ってはいないようで、彼自身は許したということなのだろう。なんとも気持ちのいい男である。

「…あたしたちは外探したほうがいいか？」

「やめとけ。外で発症なんかしたらなあ、すぐ死ぬぜえ。ここで待機しとけよ」

「僕はどうしたらいい？」

「もしルーチエがまだ来てねえんなら、オイラたちが外探すけど……双樹一人で街中歩かすのもなあ。コタ坊のところで待たしてもらえばいんじゃないかね？」

「…？　ここじゃダメなのかい？」

「浮葉は発症から二ヶ月くらい保つけど——原種はだいたい一日で死ぬかんなあ。最悪のこと考えたら、そいつらには近付かないほうがいいぜえ」

「種族間の格差が理不尽すぎる…」

「んまあ、なにかと不便なのは間違いないなあ」

「つか関係ねえところにやべえ奴ら置いとけるわけねえだろ。お前らは俺の家に来て…：双樹はここで待つときな。時間かかりそうなら、ここに泊まれるように言つとくからよ」

「了解。定期的に僕の安否は確認するようにね」

「自分で言うのか…」

善は急げとばかりに、ぞろぞろと部屋を出ていくフルたち。一人になると色々考えさせられるな…：街に入れば落ち着いて情報交換ができると思っていたのに、結局のところ疑問だけが増えていく。事態が二転三転するのは、なにか不可思議な力でも働いているのだろうか。

——そんな益体もないことを考えながら窓辺でまどろんでいると、視界の端にキラキラとしたものが映りこんだ。金属的なものが少ないこの街では中々に珍しいんじゃないかなるかと思線に向け…：その先には、紫水晶を頭から生やしているような少女が歩いていた。うーん…：めっちゃシュール。

ピンキー・アトモスファイア

見た目は……十歳ほどの少女だろうか。腰まで届く紫の髪は、フルが言っていたように透明感があり、なおかつ硬質さも持ち合わせているように見える。しかし揺れ方から見るに、触ればさらりと柔軟に流れることだろう。

フルは軽装、ラリカは超軽装だったが——彼女はと言うと、僕が想像する『探検家』といった風体そのものだ。ガールスカウトっぽさが漂っており、場所が場所でなければ微笑ましさすら感じられる。

みんなとは入れ違いになったのだろうが、櫓のお兄さんから目撃情報を聞けば、フルたちもすぐに戻ってくるだろう。だったら僕の役目は、彼女をここに留めておくことだ。すぐさま羽織を引つ被って、一階へ駆け下りる。

コタ君に頂いた草履を履いて店の前に出ると、ちようどいいタイミングで彼女とかち合った。浮葉だらけのこの街で毛無しと出会うとは思っていなかったのか、彼女の目が少しだけ見開かれる。少しツリ目気味の相貌とは裏腹に、その雰囲気はまるで老木を思わせるほど穏やかだ。幼い見た目とチグハグで、なんとも違和感を覚える。

——さて、どう言葉を発したもののか。普通にいくなら『君がルーチエ?』といったところだろうか。斜め上でいくなら『仲間の身柄は預かっているぞ:』みたいな?。しかし今はふざけている場合でもないし、真面目にいくとしよう。

「へーい彼女。いま暇なんだけど、よかつたらお茶でもどう?。」
「っ!」

僕の言葉があまりにも予想外だったのか、少しだけ見開かれていた目が、今度は皿のように丸くなった。そして何度か口をパクパクさせた後、意を決したように唇を固く結び、毅然とした態度でこちらに視線を向けてきた。

「わ、悪いが! わたしはそういった軽薄な輩に付いていく気はないぞ!」

「え? あ——ごめん、君の後ろの女性に声をかけたつもりだったん

「だけど…」

「…へっ？ ……っ!!」

手を振られて振り返したら、それは後ろの人間に向けられたものだった——という恥ずかしい体験は誰しも覚えがあるだろう。今の彼女の気持ちは、それと同様だ。顔を真赤にして、体を震わせながらうつむいている。後ろの女性のクスリとした笑いも、羞恥心に拍車をかけているのかもしれない。

そんないたたまれない感情に包まれている彼女の手を取り、しゃがみながら視線を合わせる。紅玉のように赤い目が特徴的で美しいが、しかしそれ以外にアルビノの特徴はない。先天性の遺伝子疾患というわけではなく、この世界ならではの種族的特徴の一つなのだろう。

「やあ、ごめんごめん。まさか勘違いされるとは思ってたなくてさ」

「…わたしが勝手に勘違いしただけだ。はっ…はは、こ、こんな子供に声をかけるわけがないのにな…グスツ」

…っ!? な、泣くほどのことだっただろうか？ ちよつとからかっただけなのに、予想外すぎるぜ。だしに使わせてもらった女性の瞳が、僕を非難するように細められた。うーん、女の涙と子供の涙はいつだって男の弱点である。彼女の場合、相乗効果で倍プッシュ。

もちろんそのままにしておける筈もないので、着流しの袖で彼女の涙を拭い、言い訳を考える。子供をあやすのは得意だし、女性を褒めるのも苦手ではない。泣いた経緯を考えれば、子供扱いはよろしくないだろう。おこちゃまをレディとして扱うのも、紳士の嗜みである。

「いや、そういう勘違いじゃなくてさ。ほら…」

「…」

「君の可愛さは——その、僕には高嶺の花すぎてね。むしろ声をかけたと勘違いしてくれただけでも、充分に光栄さ」

「…っ!!」

「けど、君に恥をかかせたのも事実だ。よかったら償う機会を貰えないかな？ そう——上でお茶でもどうだい？」

これ以上ないくらいに真赤になっていた彼女だが、僕の言葉を聞いてさらに真紅に染まった。照れている可能性が八割、気障ったらしい

セリフに共感性羞恥を覚えている可能性が二割。まあどちらにせよ、僕が恥を上塗ったということでも勘弁していただく。

是とも否ともつかない態度の彼女の手を引き、二階へと連れ込む。さながら気分は少女誘拐犯である。というか、はたから見るとそれそのままにしか映らないだろう。所在なさげにしている彼女を座布団に座らせ、セルフサービスのお茶を取りに行く。

調理場と飯場と休憩所と売店が一緒くたになった場所で、狼っぽいおばちゃんがパイプをふかしている。コタ君はこのへんでは有名人らしいので、彼のツケでお茶菓子セットを頼んだ。僕と少女を見て、おばちゃんが胡乱げに『あつちは夜しかやってないからね』と釘を刺してきたが——なんのこっちゃ。

：ん？　もしかしてそういうことか。昔の湯屋はそういうのもセットだったらしいけど、僕はいったいどういう目で見られてるんだ。微妙な気持ちになりながらちやぶ台へと戻ると、彼女がカチコチになりながら自己紹介を始めた。お見合いにでも臨んでいるかのような緊張感である。

「わ、わたしはルーチェ・ルミナリアだ。よろしく頼む」

「僕は沙羅双樹。よろしくね」

「う、うむ……いい名前だな」

「君もね。ちなみに年はおいくつ？」

「ん？　…ええと、今年で……三百……十四だったか。長く生きていると、どうも気にしなくなっちゃってしまっただけ。はは」

「アポト○シン4869でも飲んだの？」

「なんだそれは」

なんだ、こんどは不老の種族とでも言うのだろうか。それともダイオウグソクムシの浮葉とかか？　この世界にきてから驚いてばかりだが、今度ばかりは心底からだ。人の永遠の夢とも言うべき不老長寿が実現しているのなら、是非あやかりたいものである。

「あ、それと、そのだな……さ、誘ってくれたのは嬉しいのだが、少し急いでいてな。あまり長居はできんだ」

「へえ。もしかして人探しでもしてるのかい？」

「…っ！　なぜわかるんだ？」

「勘が効くのさ、僕は。探している人数は、そう…：二人つてとこかな？　名前はフルとラリカ…：なんてね——ええええっ!」

「…お前…：まさか『生き残り』か？」

ちよつとからかおうとしたら、ルーチエの髪が生き物のように蠢いて僕を拘束した。なんだよ『生き残り』って。いや、その前になんだその髪は。自由自在に動かして伸び縮みさせられるって、すごく便利そう。背中が痒くなっても、手を動かすまでもない優れたものだ。

「…私の心を読んだんだな？」

「いや、フルとラリカがルーチエを探しに行くって言うから、僕はここに残ってるだけだけど」

「えっ」

「友達なんだ。さっきなつたばっかりだけどね」

「え、あ、え…？　じゃあ…」

「勘違いPart2だね」

「…っ！　す、すまん…!」

気落ちした彼女の心情を表すかのように、シユルシユルと縮んでいく髪。三百年以上も生きている割には、出会った当初からやたらと情緒不安定である。最初に感じた穏やかな雰囲気はどこへやら、今は年相応の童女にしか見えない。

「ふう…：…ところで『心を読んだんだな?』ってのは、どういうこと？」

「う…：…あ、いや…：…あまり吹聴できることではなくてだな…：…すまんが聞いてくれるな」

「ん、わかった」

「…いいのか？」

「しつこく聞いたら教えてくれるのかい？」

「…無理だな。わたし以外の者に迷惑がかかる」

「だろ？　なら二人の将来についても話す方が建設的つてもんさ」

「うむ、すまん——ん？　しよ、しyouらっ!」

毅然としたり狼狽したり、しおらしくなったり赤面したりと忙しい娘だな。七輪で焼かれたてのおかきを頬張りつつ、彼女をじつと見つ

める。すつと目をそらされ——もう一度ちらりと顔を向けられた。コミュニケーション能力に乏しい人間の、典型的なアクションだ。しかし話し方は割と尊大なあたり、内面の複雑さが垣間見えている。十倍以上も年に開きがあると、単純には量れないということなのだろう。

「まあ冗談は置いて、たぶんすぐ帰ってくるだろうからここで待つときだよ」

「うむ……というかお前は何者なんだ？ まさか原住民というわけじゃないだろう。同業か？」

「同業？ ……ああ、フルが言ってた——『ワールド・ワイド・ウォーカーズ』……だっけ。探検家的な意味だと思ってただけど、仕事なの？」
「仕事ではないが、成果を持ち帰れば栄誉は得られる……それを知らんということは、異世界育ちか」

「んー……異世界つちや異世界かな。過去で平行世界で異世界、みたいな？」

「……？ 面白そうだな。詳しく聞いていいか？」

結局、腰を据えて現状を話せるのは、フル相手でもラリカ相手でもなく彼女——ルーチェ・ルミナリアとなるようだ。鷹揚おうように話を聞く姿は、先程とは違い泰然自若といった様相だ。彼女は研究者らしく、有り余る時間を使って世界の謎を究明していたらしい。

「ほう……なるほど、面白いな。決定的な差はキューバ危機のあたりか……？ 平行世界、あるいは並行世界——いまだ証明はなされていないが……」

「……ラリカには異常者扱いされたけど、ルーチェは信じてくれるんだね——っ、と……!?!」

あまり疑ってくれないのもどうかと思いき問いかけるが、ずずいと身を乗り出した彼女が、鼻先が触れ合うほどに顔を寄せてきたため、言葉に詰まる。真紅の瞳が鮮やかに輝いて、まるで底の底まで見透かされているような気分だ。

「……嘘なのか？」

「まさか。全部ありのままだぜ」

「ああ、そうだろう。わたしにはわかる……お前は嘘をついていない」
「…？ それはさっきの『心を読む』云々と関係があるのかな？」
「いいや、単にわたしの技能だ。他人が嘘をついているかどうかくらいは、簡単に見抜ける」

「へえ……そりや凄い。愛してるゼルーチエ、結婚しよう」

「ぶっ!? —— なっ、なな…！ なにをきやつ、きゅっ、急に…！」
「…」

「——はっ！ う、嘘をついたな！ …あれ、ちょっと待て本当……いや、ん…？」

なるほど。心を読んでいるのではなく、人体における何かしらの反応を見て判断を下しているのだろう。しかし僕の言葉に対する彼女の反応を考えれば、精度はそこまで高くはないらしい。精々がポリグラフィ式の嘘発見器か、それ以下といったところだろう。それくらいであれば、僕なら誤魔化せる。

「それで、僕が元の世界へ戻ることはできるのかな？」

「いやちよつと待て！ さっきのは結局、ど、どどどっちなんだ！ 嘘か!？」

「…」

「答えろよお！」

「いや、簡単に見抜けるって言うってたじやないか」

「うっ……その……なんというか、どうやらお前は簡単な男じゃないらしい」

「…人の真意なんて簡単に見抜けちゃつまないだろ？ 問えば返ってくるなら、感情なんて要らないぜ。一方的に人の心を量ろうなんて、強盗と一緒さ」

「む…」

少し考え込んだ後、しかつめらしく頷いたルーチエ。割と簡単に言い包められるタイプらしい。小さくため息をつきながら、おかきをモグモグと食べている姿が非常に可愛らしい。

「…未来から過去へ行くのは不可能だが——世界が違うだけなら、可能性はある。来れた以上、帰れないということはないと思うが…」

「方法は？」

「それは——ううむ……機材があればまだ調べることもできるんだがな。なにせこんな場所だ、持ち込むこともできん」

「…そっか」

困ったなあ……なんとかならないものだろうか。こんな若い身空で、異世界に骨を埋める覚悟はしたくない。黙り込んだ僕を心配したのか、ルーチェが励ますように肩を叩いてくれた。こういったところは年上っぽいというかなんというか……部活の先輩にドンマイされたような気分である。

「ま、なるようにしかならないか……じゃあ今度はこっちが質問していいかな？」

「切り替えはやっ」

「悩むのは、それが解決に繋がる時だけさ。いま僕がウジウジ悩んだところで、なんの意味もないしね」

「…言うは易く行うは難し……お前の言うそれが簡単にできれば、誰も苦労はせん。進むべき道がわかっていたとしても、踏み出せない人間などごまんという」

「人それぞれだろ？ 僕はね、ルーチェ……信用できる友人がそうすべきだって言うなら、躊躇いなく崖だって飛び降りるぜ」

「…あまり健全とは言えんな」

「もちろん自覚してるさ」

顎に手を当てながら、見定めるように視線を向けてくるルーチェ。またぞろ真否を判断しているのだろうか？ まあ今回に関しては、誤魔化す必要もない。先の発言は一言一句真実だ。僕は自分の異常な部分をしっかりと自覚しているし、『普通』などという言葉とは縁遠いことも理解している。そもそも自分のことをしっかりと把握していなければ、他人への配慮が上手くできる筈もない。

『何が出来て』『何が出来ないか』。これは人生において非常に重要だ。物語などではしばしば『自分の優秀さを理解していない状態』を、そのキャラクターの凄まじさの表現として扱うが、これは裏を返せば、その当人が『出来て当然』と思っている状態だということだ。『こ

んなの凄くないよ』という歪んだ謙遜は、つまり『こんなこと誰でもできる』という錯誤である。それは実に恐ろしい状態じやなからうか。

コタ君と僕を例に取ればわかりやすいだろう。コタ君にしてみれば少し強く押しただけなのに、僕は怪我を負うところだった。これは『自分の強さを理解していない』『他人の弱さを理解していない』という誤認が生んだ、先程の表現におけるネガティブな側面である。だからそう——自分を理解していない人間に、他人を理解できる筈もない。

「…まあ、そうだな。こんな短時間でフルと友達になれたんだ——普通じゃないのは確かだろうな」

「…？ どういうことだい？」

「アイツもアイツで複雑なんだ。もちろん私も…：ラリカもな。普通に育ち、普遍的な精神を持つ者に、フルはあまり気を許さない」

「ふうん…？ そう言われると…：思い当たる節もあるか」

自分の無実が証明された後は、犯人である桃千代の逃走にもまつたく我関せずだったのはそういうことかな。僕とラリカ以外には素っ気ない感じだったのも納得だ。今風に言うとう塩対応ってやつだろうか。今っていうか、六百年前風？

「…で？ 聞きたいことというのはなんだ？」

「ん？ ああ、ちよつと大雑把で申し訳ないんだけど…：世界全体のことと言うか、なんというか…：言葉にし難いな…」

「ふむ…：要は六百年前との差異が知りたいんだな？」

「そうそう、それぞれ。ルーチエは賢いねえ」

「子供扱いはやめろ」

「ルーチエお婆ちゃんのお知恵袋は凄いいねえ」

「ババア扱いもやめろ！」

「うーん…：精神年齢はどんなもんなの？ よく精神は肉体に引つ張られるなんて言うけどさ」

「む…：まあ、そうだな…：自己診断するなら、二十代から三十代が近いだろう。ただ、私ほど見た目と実年齢がかけ離れている者はまずお

らんからな。他のサンプルが取れんのだ」

「長寿は種族的な特性じゃないってこと？」

「いや、それに関してはその通りだ。わたしたち『ウルズ』は、ある一定の年齢までは原種と同じように成長し……それが緩やかにになった時点で、寿命の予測がつく。仮に二十歳で成長が止まったとすれば、寿命はおおよそ三百歳と言ったところだ」

「へえ……となると、ルーチェは？」

「わからん。わたしほど若い年齢で成長が止まった事例は、他にない」

「……なるほど。それが君の『普通じゃない』部分ってわけだ」

「う……む、まあ他にもあるが、概ねその通りだ」

『浮葉』 『奇杏』 ときて『ウルズ』になる不思議。そのへんも聞いておきたいところだけど、質問は後回しにしたほうが良さそうだ。知識の深さも見識の深さも、長く生きているだけあって常人とは比較にならないようだし、上手くまとめてくれそうな予感がする。それに僕とフルでは六百年の隔たりがあるけど、ルーチェとは三百年しかないってのもある。

江戸時代の人間とは多少分り合えそうな気もするが、室町時代ともなると意思疎通も難しい……という曖昧な感覚だが、やはり三百年の差は大きいと思う。それに時代の変遷へんせんを自分の目で見てきた彼女であれば、感覚の違いも上手く説明してくれそうだ。

「さて、それで……ああ、今がどういった状況か知りたいんだったな——とはいつても、文化が一定以上に成熟すると、人間の営みに大した差は生まれん。今まで出会った連中も、お前の世界の人間とそう変わらないだろう？」

「そう……かな？ 魅力的な人がいっぱいだったけどね。ルーチェなんか特に」

「——そ、そうか？ ふ、ふふ……んんっ、ごほんっ！ ええと、なんだったっけ……ああそうだ、文明社会の話だったか。ううむ——シヴイリゼーション・リミットとでも言えればいいのか……文明の発展には、限度があるんだ。特に今の地球は『匣月』ひめつきという人工知能によって管理されているからな。千年単位でも、そうそう大きな変動は起こ

らんだろう」

なんかマト○ックスみたいで怖いんですけど。地球の方は水槽に浮かぶ脳味噌だらけとかいうオチじゃないだろうな。恐る恐る聞いてみるが、流石にそれはなかったようだ。しかしそういった実験自体は過去にあったらしく、解体はされたものの、やはり永遠の生を夢見る者は一定数いるらしい。

「まあ文化はともかく、お前にとっては人種の違いが最も顕著だろうな。その年代だと、まだ原種以外はいないだろう？」

「…」

「…な、なんだ？」

「いや、いつになったら『お前』から『双樹』になるのかなって」

「むっ……いい、いや、まだ出会ったばかりだしな……」

「プロポーズまでした仲だろ？」

「くくっ！ …あれは本気と受け取っても……その……いいの……？」

「それは困るけど」

「おかしくない!？」

「いやでも初対面でいきなりプロポーズなんてさ、見てくれにしか興味ありませんという宣言みたいなものじゃない？ 容姿だつて立派な長所だとは思うけど、それしか見てない相手とか僕は嫌だぜ」

「ま、まあそれはそうだが……」

「その年で未経験な君の心中は察するけど、あんまりがつつくと悪い男に引つかかるよ」

「うぐっ!？ な、なぜそれを……はっ！ ゆ、誘導尋問とか、お、

おま、おまつ……!」

「…」

「見るな！ そんな目で見るなあつ！ ——仕方ないだろう！ こんな見た目に言い寄ってくる男がいると思うか!？ いや、いるにはいるが……どいつもこいつも童女趣味の変態だ！ だから百年も引きこもる羽目に……あばばっ！ じゃなくてっ……!」

「ええ……」

「うう……ひいいん!!」

馬のいななきのような声を出して、ちゃぶ台に突っ伏すルーチェ。もしかして普通じゃない部分の『他にもあるが』は、超引きこもりだったことを指しているのだろうか。人の一生分も引きこもるなんて、たまげたなあ。

とりあえず泣いた子供をほっとくのもアレなので、向かいに座る彼女の横に腰を下ろし、肩を優しく叩く。さつきは彼女が肩を叩いてくれたが、こんなにも早くお返しをする機会が巡ってくるとは思わなかった。まあ誰のせいかと言えば僕のせいだけでも。

「別に容姿がどうだろうと、ルーチェは魅力的だぜ」

「…嘘だ」

「嘘か本当かわかるんだろ? 『君は魅力的だ』——さ、どうだい?」

「…」

「…」

「…」

「…」

「…わからあああん! どういう心理状態なんだ!」

「ええ……どこ見て判断してるのさ」

「…無機物、生物問わず、物体には固有の振動がある。わたしには個人の“波”が見えるんだ……その揺らぎで心理状態を把握できる……
筈なんだ!」

「僕がおかしいってこと?」

「うう……もうなんかよくわからん。波自体は普通だが、本気で言ってるのかどうかまったく判断がつかん……」

「うーん……」

ちよつとだけお世辞も込みだったのが悪かったのだろうか。仕方ない、ここは褒め殺し作戦でいくとしよう。本当かどうかわからないということとは、つまり嘘かどうかもわからないということである。幸いにしてルーチェは魅力的なところだらけだし、褒める対象には困らない。

「さつき肩を叩いてくれただろ? ああいうところで人の本質って出

るよね。まだ会ったばかりだけど、君が優しいってのはよくわかるよ」

「え、あ……う……」

「それに、こんな透き通った髪……見たことないよ。聞き飽きてるかもしれないけど、それでも言わずにはいられないよね。すごく綺麗だ」

「う、あ、え、ええと……わたしは、水晶の『ウルズ』だから……」

「ルーチエ、君は今まで出会った誰よりも知的だ。知性は瞳に宿って言うけど……その真紅の眼差し、吸い込まれそうだよ」

「あえ、あう……ちち、近いって……」

よし、ここまで言えばもう大丈夫だろう。少なくとも、未経験を指摘されたシヨックは抜けきっているように見える。それどころか、目を閉じて唇を突きだしながらキス待ちをする程に元気である。

…褒めすぎたのだろうか、それとも三百年ものの乙女を舐めすぎたのだろうか。なんとも騙されやすそうな少女である。真つ赤に頬を染め、そして緊張のせいか下唇が少し震えている。ふるふると揺れる下顎にそつと手を添えると、ビクリと体が揺れた。

いや、ううん、どうするべきか……このままだと雰囲気の流れさうだ。なんだか、さつきから甘いお香のような匂いがするし……何かに当てられたように、頭がクラクラしてくる。導かれるようにルーチエの右腕を引いて抱き寄せ、頬に手を添えた。

彼女の華奢な体が密着し、早鐘はやがねを打つ心臓の鼓動が伝わってくる。なんだろう、ルーチエが凄く愛おしく見えてきた。僕ってこんなに無節操だっただろうか……ん？ 振り切るように彼女の顔から目をそらすと、なにやらお香を焚いているおばちゃんが目に入った。僕と目が合うと、ビシツとサムズアップしていた。アンタのせいだよ！

しかし、ちよつと、これは……なんと言えいいのか、マタタビに当てられた猫になった気分だ。どうにも抑えがきかず、桃色の唇へ吸い寄せられ——そうになった瞬間、部屋のふすまが勢いよく開いた。「双樹い。ルーチエのやつ、もうこの街に入ってるみたいだかなあ、いつか……つ!？」

「どしたの？ フル——…っ!? な、ななっ…！」

…さて、どう言い訳をしたものだろうか。とりあえず全てをおばちゃんになすりつけるプランを考えつつ、すっかり冷えてしまったお茶を流し込んだ。ルーチエはいまだにぶるぶる震えたままである。

デイーブ・インパクト

キス一歩手前の光景を見たフルとラリカの行動は速かった。つかつかとこちらへ歩いてくるや否や、ラリカがルーチェの後ろへ回り込みつつ両腕をロックし、フルが正面から正拳突きを叩き込んだのだ。

「ぐぶうっ!? ——なん……ぬあっ!? お、お前ら……」

「なう……会えて何よりだぜえ、ルーチェ」

「ほんとにね……で? 申し開きは?」

「な、なんのだ!」

「オイラたちほっぽって色惚けてたことについて……だろ?」

「ま、待て! わたしは、ただ……ここにいればお前たちが帰ってくる
と聞いたから、無駄に動き回る必要はないと判断しただけだ!」

「じゃあなんでキスしようとしたの?」

「う、いや、それはだな……」

こういつた場合は男が責められるのがセオリーだと思っていたが、蓋を開けてみればルーチェだけが弾劾されている状況である。文化の違いなのか、はたまた普段の行いのせいなのか。藪蛇になるのもアレなので、ここは静観することしよう。

「いい歳なんだからよお、またやらかすのはどうかと思っぜえ」

「う……い、いや! あの時とは違うぞ! こい——そ、そ……双樹は! 明らかにわたしへ好意を寄せているからな!」

「ほんと? 双樹」

「ルーチェは物事を飛躍させる癖があるみたいだねえ」

「おまつ、だっ——しっかり言葉にしたらだろ!」

「どっちにしても、約束破ったのは間違いねえなあ」

「はうっ……!」

「…約束?」

『簡単に誘いに乗んなよ』ってなあ、約束したかんなあ。一回それで痛い目見てんだからよお、ちゃんと学べよなあ。見た目通りのガキじゃねえんだぜえ?」

「うぐ…」

「ふうん…?」

パツと見の年齢差で言えば、兄が妹を叱っているように見えなくもないが——実際は三百十四歳が十一歳に説教されている状況である。なんだかパツが悪そうにうなだれているルーチエを不思議に思っているのと、フルが呆れ顔で説明をし始めた。

「ルーチエはなあ、ネットで知り合った悪い——」

「ぎゃー! 言うなあ!」

「そそ、悪い女に引つかかってねー。あわやポルノ被害に——」

「だから言うなってえ!」

「女…? え、ルーチエってそっち系の人?」

「ち、違う! 騙されただけだ!」

「オングのフレンドにそそのかされてー」

「百年ぶりに外へ出たらなあ…」

「三級の“シン”なんか引つかかっちゃってー」

「オイラたちが止めなきや行くとこまで行つてたぜえ」

「ううう…」

「危うく“合法児童ポルノスター”ルーチエちゃんの誕生だったんだよねー」

なんだその酷すぎるワードは。確かにルーチエがセクシー女優を目指すとなれば、特殊な性癖の方々は諸手を挙げて喜ぶだろうが、百年引きこもってからのそっち路線とか波乱万丈すぎるぞ。まあ先程のお手軽ガールっぷりを見れば、騙されるのもわかるというものだけだ。

「ところでシンってなんだい?」

「ん? ああ…まあ平たく言えば犯罪者のことだなあ。地球でしか使わねえ言葉だけだ」

「へえ…普通の犯罪者とは何か違うのかい?」

「んー…そうだな。例えばこういう異世界ならなあ、やむにやまれずで悪いことすんのも、まあわかんなくもねえだろ? どうしようもない状況つてのは出てくるもんだ」

「ふむふむ」

「だけどなあ、地球で『不足』は出ねえ。衣食住も医療も、そんで大抵の娯楽も望めば供給される。犯罪ってのはなあ——生活や命が脅かされるから……ままならねえことがあつから起きんだよ」

「…そうだね、一理ある。けど…」

「そう、〃けど〃だ。幸せを好きなかだけ享受できんのに、それでも満足できねえ奴らつてのもいるかなあ」

「人の不幸がねー、楽しくて仕方ない奴らなの」

「人間だかなあ、多かれ少なかれそういう部分があんのは仕方ねえ」
「けどね、その『度が過ぎる』人間を〃シン〃って呼んでるの。三級くらいならまだ『たちが悪い』で済むけど、特級のシンは本気でイカれてるから絶対に近付いちやダメだよ」

うーん……つまりアレか。何不自由ない暮らしでも満足できない、幸せを感じられない——そしてそれを我慢できず、行動まで起こす人間を〃シン〃と呼ぶのだろう。幸せを相対的にしか感じられない、他人の不幸を見てようやく自身が満足するような輩といったところか。「というか、地球に『不足』がないつて……そんなことある？ 社会から貧困がなくなるとは思えないけど」

「…先程の講釈の続きだな。人間という種族に、それまでは考えられなかった進化を与えたのも——未曾有の繁栄みそろうを与えたのも、全ては〃異世界〃の恩恵によるものだ」

「君をポルノへ誘いざなったのも？」

「ああ、それも異世界の恩恵——なわけあるか!! 　　というか！　　もうちよつとデリカシー考えろよ！」

「まあまあ。それで？」

「むうう……そ・れ・で・だ！　　…今のところ公式に四つ、非公式に二つの異世界が確認されている。そしていまわたしたちがいるここは、最初に発見された異世界——〃豊穡の世界〃とも謳われる、地球の食糧事情を支える場所〃ダストパイル〃だ」

「前にちよつと話しただろ？ 『土壌が特殊』だって。どんな作物だつて育つし、生育も早え。連作障害だのなんだのとも無縁だかなあ。

その上で、まだ世界の果てすら確認できねえんだ……飢える奴なんか出るわけねえだろ?」

なるほど……だから不足もない、そして争いもないと。結局のところ戦争とは、限り在る資源を奪い合うからこそ起きるものだ。富に限りがなくなれば、そりゃあ戦争だって起きにくくなるだろう。

ただ宗教や信仰、文化の違いからくる争いは無くなるとは思えないけど——いや、違うか。さつきルーチェが言っていた『世界はAIが管理している』という言葉が真実なら、地球上の人間の価値観は、大部分が目線を同じくしているのかもしれない。

「そして二つ目に発見された異世界『ウルルドメイン』は、資源やエネルギーの問題を解決した。現在消費されるレアアース、レアメタルの類はほぼこの世界に依存していると書いていいだろう」

「なるほどねえ……ってことは、人種の違いも異世界の発見が関係してるのかい?」

フルは原種「以外」が優性遺伝だと言っていた。となると、異世界民族との交配が進むにつれ地球原産の種族は淘汰されていくわけだ。既に数パーセントしか残っていないと話していたが、もう数世代も進めば完全に消えてなくなるんじゃないだろうか。

「ああ、そうだ。人間は『異世界の入口』を進む際、身体に変化を伴う。いまだそのメカニズムは解明されていないが、重要なことは一つ——入口をくぐれるのは『一度切り』だけだということだ」

……ん? なにやら想像とまったく違っていているような気がする。いまち理解が及ばないが、その雰囲気を読まれたのか、ルーチェがさらに詳しく説明を始めた。

「例えばこの異世界——ダストパイルへ足を踏み入れたならば、人間は獣の特徴を有した姿へと変貌する……そう、浮葉と呼ばれる種族へな。同様に、ウルルドメインへ踏み入れればわたしのような姿へと変化するんだ」

「幼女に?」

「ああそうだ……ん? ——んなわけあるか!!」

ふむふむ、なるほど。体の一部が鉱石の特徴を持つようになると。

そりやあなんとも不思議な現象だ。つまりその理論でいくと、僕も何らかの特殊能力に目覚めることができるのだろうか。フルやルーチエみたいに外見が変化するパターンだと、自分の世界へ帰還した時に少し困るが——ラリカのような能力であれば、ほとんどメリットしかないだろう。是非とも他の異世界へ行ってみたいものである。

『一度切り』っていうのは?」

「言葉通りの意味だ。人間の体は、二度目の変化に耐えられない……異世界へ入るのはいいが、出ようとすれば悲惨なことになる。およそ人とは思えない姿——そうだな、いくなれば “人の残骸” とでも言うべきナニカに変わる」

「こわっ」

「そうだ、怖いものだ。そもそも一度目の変化でさえ、たまたま人間にとって都合のいいように作り変わっただけに過ぎん。必ずしも有益な姿へ変化するわけではなく、デメリットの方が遥かに大きい能力を手に入れる場合も……ある」

「ふうん……心が読めるようになったり?」

「——っ!? おまつ、なっ……!」

「あ、やっぱりそうなんだ」

「ぐむ……いや、口を滑らしたわたしが悪いか……それについても、その種族についても、歴史から抹消された事実だ。他言無用で頼むぞ」
「オーケー。たださ、ルーチエの言ってることが事実なら、どうやってこのダストパイルへ入ったんだい? 姿が変化してる以上、少なくとも一回は別の異世界に入ったんだらうし……ん? や、違うか。姿と能力は遺伝で……じゃあ君たちは、もう戻らない覚悟でここに——いや、それも違うか。『成果を持ち帰れば栄誉は得られる』って言ったし……」

なんかややこしくなってきたな。とりあえず判明した事実を整理すると——『異世界の入口をくぐると、それぞれの世界に応じた姿と能力を得られる』。そして『入口をもう一度くぐると、人間をやめることになる』。そんでもって『姿と能力は遺伝する』と。

…そうになると、遺伝として浮葉の特徴を持った人間が、ダストパイ

ル以外の異世界へ行くといったいどうなるのだろうか。全身の毛が水晶みたいになった獣っぽい人間になったりするのかな。

「うむ、お前の疑問はもつともだ。結論から先に言ってしまうと、ここは現在、行き来自由な異世界となっている。入口を通過しても、体が変化するようなことはない」

「…つまり僕は浮葉になれないと」

「え、なりたいのか…?」

「ちよつとだけね。それで、その先は?」

「う、うむ…：要はだな、異世界には “核” があるんだ。そしてそれを壊して解放すると、地球と異世界の間が存在していた隔たりがなくなる——つまり、出入り口で体が変化することもなくなる」

…なんかゲームみたいだな。世界解放クエストとかなりそう。まあそんな無粋な突っ込みは入れずにルーチエの話を聞いていくと、今まで疑問に思っていたことの大部分に納得がいった。特に、人間サイズでありながら有り得ない膂力を発揮するところが気になっていたんだけど…：なんと世界には、それまで発見されていなかった未知のエネルギーが存在したらしい。

それが最初の異世界を解放したことによるものなのか、それとも元々あったものは不明らしいが、とにかく原種には認識できないエネルギーが空気と同じように存在しているとのことだ。とことん原種に優しくない世界である。

エジプトのピラミッド機構などがそのエネルギーを利用していた形跡があるらしく、歴史家などの間でも議論が尽きないそうだ。なるほど、古代文明の超科学的な謎はそのあたりにもあるのかもしれないな。

地球にもエネルギーは元々あったが、今とは比べ物にならないほど濃度が薄かった——というのが主流らしい。テイラノサウルスの外見だって時代とともに主張がコロコロ変わっていったわけだし、断定できるものではないんだろう。

とにかくそのエネルギーを利用して、それまでの常識を覆す様々な現象を起こせるようになったらしい。それは個人単位でもそうだし、

産業的な意味合いでも大きな発展となったようだ。

「——種族によつてエネルギーの利用方法にも制限がかかる。例えば浮葉は、体外にその力を及ぼすことは苦手だ。そのかわり、身体能力の強化率は高くなる傾向にある」

「かなり頑張つてもなあ、皮膚から数センチつてとこだけ。できることつつつたら、一瞬だけ空間に体を固定させたりとか、そんな感じだ」

「空間に……ああ、竜っぽいのを叩き落とせたのつてそういう……」

『ワールド・ワイド・ウォーカーズ』にや必須技能だかんなあ。自分よりでさえやつを相手どるんなら、力が強えだけじゃ限度あんぜえ」
創作物などではひよいひよいと数トンもの物体を持ち上げたりするが——物理的に考えれば、普通は自分のほうが持ち上がるだろう。鉄棒を引っ張つて、動くかという話だ。それを解決するとすれば、なるほどフルが言っているように『自分が固定されれば』、後は力の問題だけだろう。

「逆に、周囲のエネルギーを操ることに特化した種族もいる。ウルズはそこまで得意ではないが……それでもこれくらいはできる」

「……すごいな……」

ルーチエが指をくるくると動かすと、湯呑に入っていたお茶“だけ”が、まるで生き物のように空中で弧を描いた。超能力における念動力のようなものだろうが、この世界にきて一番ファンタジーっぽさを感じた。

「僕にもできたりしない？」

「…難しいだろうな。羽根を持っていないのに飛べるか、という話になる。エネルギーを認識する器官が、そもそもないしな」

「そっか……いやでもさ、こんな状況に陥った人間が凄い能力に目覚めるのはお約束だぜ。実は超パワーが僕にも宿ってるかも」

「…」

「…可哀想な目で見るのはヤメてくれ」

「…いや、まあ絶対にないとは言えないからな。試してみるくらいならいいんじゃないか？」

そう言つて湯呑を差し出すルーチエ。エネルギーは万物に宿り、それを動かせば物体も準ずるとのことだ。不定形の力を動かすようなイメージでやってみると言われたので、本気で集中してみる。

電気エネルギーや熱エネルギーとは異なり、人の意志が実際に影響を及ぼす——それがこのエネルギーの特徴らしい。だから、頭のどこかで『できるわけがない』と考えてしまったら意味がないのだろう。

極度の集中——湯呑と僕だけが世界に存在しているような、そんな感覚。流動する水をイメージして、自由自在に動かそうと頭の中で念じる。そしてその想像を現実に変えるべく、指先に力を込めてくるりと動かすと——先ほどの焼き回しのようになり、お茶が空中へうねり上がった。

「…っ！ できた…！」

まさか本当に出来てしまうとはと、少し誇らしいような気持ちでフルに目を向ける。そこには驚愕を露わにする彼の姿が……あると思っていたのだが、実際には、両手で口を抑えて小刻みに震えているだけだった。なんだか笑いを我慢しているようだ。

ラリカに視線をやると、なにやらお腹を抱えてうずくまっている。最後にルーチエを見ると——肩を震わせながら、お茶に指先を向けていた。

…なるほど、僕の力ではなかったと。

——ひどい。ひどすぎる。いまだかつてこんな屈辱を味合わされたことがあっただろうか。子供の頃は誰だって、夢物語を信じてた時期があるだろう。けれど、大人になるに従って現実を知り……かめはめ波もアバンスストラッシュも二重の極みも打てないと思ひ知らされる。

しかし、そんな夢をまた見れるのかもしれないと興奮した矢先——これだ。この仕打だ。僕はかなり真剣だった。だいたい真面目にやった。

それを、あろうことかおフザケのだしに使うとは……これはもう、許されざる行いだ。許されざる呪文をかけても許されるくらいに非道な行為だ。犬畜生にも劣る、ゲスのやり口だ。人道に反する、

悪鬼羅刹の所業だ。

しかし——しかしである。なんということだろう、僕にはやり返す手段が何もない。ルーチェの頭にゲンコツを落とせば、恐らく僕の拳が壊れるだろう。お尻ペンペンをしたところで、腫れ上がるのはきつと僕の手のひらだ。

：自分の弱さに打ちのめされる。もしやこんな遣る瀬無さこそが、元の世界の女性が感じていた息苦しさなのかもしれない。悔しくてもどうしようもない、やり場のない感情が胸の内に渦巻く。これが諦観というやつか……いや、諦めるのはまだ早い。

そうだ、勇気ある女性たちが古い慣習に抗ったからこそ、権利を勝ち取った過去があるのだ。たとえ力で勝てなかりうが、心まで負けてやるものか。

「ぶふっ、く、くくっ……！ す、すごいじゃないか……できてるぞ双樹——んっ？ ……ふぎやつ!？」

吹き出すのを抑えきれないルーチェの背後に回り込み、服の中に手を突っ込んで、ほんの少しだけ膨らんだ双丘を揉みしだいた。モラルハラスメントには、セクシャルハラスメントで対抗しようじゃないか。というか、それ以外にやり込められる手段を思いつかない。

「にやつ、にやにっ——んうっ!」

「へへ、暴れんじゃねえよ。考えなしにジタバタすると、どうなるかわかってんのか?」

「——ど、どうなるというんだ!」

「くつくつく……僕が重傷を負うぜえ……!」

「どんな脅しだよ! ——は、んっ、あっ……!」

「っっていうか、流石に敏感すぎない?」

「っ……! ちょ、待って、ほんとに——……くっ! んうっ、あ——」

ビクンと体を震わせた後、息を荒げてへたりこむルーチェ。そんなに僕のテクニクが凄かったのかといえは、もちろん否である。となると、これは彼女の方に要因があるのだろうか。

百年も引きこもっていれば、一人でできることなどやり尽くしている筈だ。自家発電においての自己開発が、常人の想像を超えた領域に

至っているのかもしれない。かのオナニーマスターも、百年の研鑽を積むことはできないだろうし。

「…」

「…」

「…」

なんだか見てはいけないものを見てしまったような気がして、フルとラリカと僕は気まずそうに視線を交わしあう。そしてそんな状況の中、空気を讀んだかのように——あるいはぶち壊すように、部屋のふすまが開いた。

「入るぜ——うおっ…!?!」

僕はただ、へたりこんでいるルーチェを見下ろしているだけだったが…：入ってきたコタ君が鼻を抑えたことで、独特な香りが充満していることに気付いた。男で言うところの栗の花的な。焚いていたお香の残り香も相まって、空間そのものがなんとなくエロティックである。

そんな状況をどう勘違いしたのか——コタ君は荒い息を吐いているルーチェと、その傍にいる僕…：そして少しばかり頬を染めているフルとラリカを見て、こう言い放った。

「…ごゆっくり」

——スツとふすまを引いた彼を引き止めるため、僕たちは慌てて立ち上がった。

モノクローム・キヤット

立派な門構えのお屋敷——周囲と比べてもひとときわ大きい、コタ君の家に招かれた僕は、特にやることもないのでゆったりと寛いでいた。よかつたら、と女中さんに渡された煙管をふかし、白い煙をくゆらせる。用意された座椅子に深くもたれかかり……ああ、古き良き日本の風情といった感じだ。

「それでゴホツ、コタ君ゴホツ、もゴホツ、ゲホツ、ゲホツ！」

「吸えねえなら吸わなくていいからな!？」

「いや、せっかく勧められたから……」

どうやらタバコの類は僕に合わないらしい。健康にも悪いし、金輪際吸うことはないだろう。口内に残るなんとも言えない残り香を、お茶で洗い流す。むせている間に、コタ君は、何やら書かれている紙を持って出ていってしまった。そしてちらりと横を見ると、よくわからない器具でよくわからない薬品を調合しているルーチエの姿がある。

そして薬品と共に化合されているのは——なんとラリカの体液である。ワクチンを作るとは言っていたが、まさか人体そのものを調合するとは、驚き桃の木山椒の木ってやつだ。指先から絞り出している透明な液体は、いったい何で出来ているのだろうか。

「……ふむ。ラリカ、もう少し濃度を上げてくれ」

「あいあい」

「……なんか凄い光景だね」

「奇杏の細胞は“万能細胞”なんだ。世界に存在する物質の、だいたいの十七パーセントくらい代用できんだぜえ。ああやって化合物に指向性を持たせることもできるし、単純なもんならそのまま自分で出せるかなあ」

「ふうん……じゃあ妊娠してなくても母乳が出せるってことかい？」

「最初に湧いた疑問がそれってやばくね？」

別の部屋に隔離されている桃千代たちの血液を採取した結果、やはり大方の予想通り『狂方病』で間違いなかったらしい。桃千代と柿椿が陽性、栗神名が陰性だったとのことだ。

そしてルーチェがあらゆる分野に精通した研究者だというのも本当だったらしく、手早くワクチンの製造に取りかかった姿はとても凛々しかった。三人娘の血を抜く際の手際も、それはそれは見事なものだった。体に針を刺されることを拒否した彼女たちを一瞬で拘束し、意識を刈り取った手腕はまさに暗殺者。コタ君が化物を見るような目をしていたのも印象深い。

幼い見た目だというのに全く容赦のない様は、いわゆるギャップ萌えとでも言えればいいのだろうか。普段のダメさ加減を知っているからこそ、テキパキと行動する姿が実に映える。医者であればインフォームド・コンセント——懇切丁寧な説明を心がけるのだろうか、彼女はあくまで研究者ということなのだろう。

死屍累々の桃千代たちの姿を見るに、『結果さえよければ』という氣質が透けて見える。そんな彼女に見惚れていると、程なくしてワクチンが出来上がったようだ。

「…ワクチンってあんな簡単にできるものなんだねえ」

「んなわきやねえよ。ありやリリカが奇杏として優秀だからってだけさ……もちろんルーチェの知識あつてだけどなあ」

「…あのさ、フル」

「なんだ？」

「ちよつと前から思ってたんだけど、もしかしてフルたちってかなり凄いい人たち？」

「んー？ ……ん、まあそうだな。『ワールド・ワイド・ウォーカーズ』ん中じゃ……まあ、なんつーか、最上級だ。どんな局面でもリリカとルーチェがいりや対応できるし、戦力的にも——オイラより喧嘩強えやつなんか、ルーチェの親父ぐらいしか知らねえかなあ」

「…はは、やつぱり僕のフルは凄いい人だったんだ」

「どこまでランクアップすんの!? ……オ、オイラそつちの気はねえかなな？」

「もちろん僕もノーマルさ。ところで首輪とかに興味ってある？」

「ねえよ！」

「ねえ。遊んでないで、早く二人を助けてほしいの」

フルと戯れていると、一人陰性と判断された栗神名が、憂いを帯びた様子で声をかけてきた。間延びした喋り方は相変わらずだが、沈痛な面持ちが痛ましい。とはいえ友人が恐ろしい病気にかかっているともなれば、彼女の心配も当然の話だろう。

「ルーチェ、早く安心させてあげようぜ。もう完成したんだろ?」

「ああ……といっても、これはお前のためのワクチンだな」

「……ん? あれ、僕はかかってないって……」

「浮葉は潜伏期間も長い上、発症してもまだ大丈夫だが——原種であれば同じようにはいかん。というか発症したら手遅れだからな。優先順位はお前の方が高い……ほら、さっさと腕を出せ。予防接種だ」
「断る。注射を打たれるくらいなら死んだほうがマシだ」

「嘘だろ!?!」

「……だいたい、おかしいじゃないか。六百年も未来だつてのに、なんで注射の方法が進化してないんだ? ……ルーチェ! 君も研究者なら

——経口摂取の薬くらい作って見せるんだ!」

「フル。押さえておいてくれ」

「なう」

「やめ——ぐうっ……!」

「子供じゃねえんだからよお、我慢しろって」

「う——あ……ぐああああ!!」

「大袈裟すぎじゃね?!」

無理やり腕に針を入れられるなんて、無理やりケツに棒を挿れられるのと同じことだ。いや、新たに穴を空けるんだからそれより酷い。死んだほうがマシだというのは嘘だが、ウォシユレットが付いていないトイレで大便をするくらいには嫌だ。

チクリとした痛みを紛らわすため、僕の腕を押さえつけているフルの毛皮を、ワシヤワシヤと撫で付ける。どうやら皮下注射らしく、あまり経験しないタイプの痛みがゾワゾワと肌を刺激してきた。時間になると十秒も経ってはいないだろうが、やはり注射というのは苦手だ。

「ルーチェええ……! この借りは……必ず返してやるからなあ……!」

「お前のためにやったんだが!」

「わかってるさ。だから借りはきつと返すよって言ってるんじゃないか」

「いや、さっきのだと悪い意味で捉えるだろ!」

「そう? うーん……やっぱり六百年も時代が違うと、受け取られ方も変わってくるね」

「む……そ、それもそうか。すまん、早とちりした」

「ぜってー騙されてんぞ、ルーチエ」

「なにっ!」

ほんとに騙されやすい娘だな。知識量と地頭じあたまの良さは比例しないっていうけど……いや、でもルーチエは頭の回転も速そうだし、単純にコミュニケーション不足からくる人の良さといったところだろうか。

そんなことを考えていると、着流しの袖をクイクイと引つ張られていることに気付く。少し視線を下に傾けると、そこには何か言いたげな栗神名の姿。おっと忘れていた……というかわざわざ僕に言わなくとも、直接ルーチエたちに言えばいいのに。

……まあ言いやすい人、言いにくい人つてのはあるか。彼女にとって僕以外の三人は——ラリカには屋根から引きずり下ろされ、ルーチエには拘束されて気絶させられ、フルはというと素っ気なさが滲み出ている。僕へ喋りかける方が気分的に楽なんだろう。彼女の意を汲み取った僕は、安心させるように髪を撫でながら、言いたいであろうセリフを代弁してあげることにした。

「ルーチエ。栗神名が『こつちも早くしろよババア』だつて」

「なにいつ……!」

「い、言つてない〜!」

「嘘はつかなくていいんだよ」

「や〜!」

「はは……あだだだだっ! ——なにをするんだルーチエ。別に僕が言ったわけじゃないし……それに彼女だって、友達を思うあまりつい口が悪くなっただけさ。ここは度量の深さを見せてあげなよ」

「ふん……語るに落ちたな。わたしはこいつに年齢を教えていないぞ……！ フルたちもわざわざ教えるようなことはせんだろう」

なにっ……！ しまった、とんだミスをしてしまった。すわった目で近付いてくるルーチェに恐怖を感じ、慌ててフルの背後へ回り込もうと動くが——少し遅かったようだ。いつの間にか足元に伸ばされていた髪に掴まれ、畳に擦られながら引き寄せられる。

このままでは拘束プレイで辱められそうなので、横にいた栗神名を抱き寄せて巻き込もう。いや、むしろ彼女が生命線だ。離してなるものか。力が強かろうが、体重まで変わるわけではない。感觸的に、おそらく四十キロと少しくらいだろうか——彼女のお腹に手を回して、盾にする。

「僕はどうなってもいい……彼女には手を出さないでくれ！」

「思いつきり盾にしてないか!？」

「あうう……」

「ちっ、バレちゃあしようがねえ……髪を離せ！ コイツがどうなってもいいのか——がふっ!？」

「女の子を人質に取るような男には……天誅！」

「というか、お前がどうにかされる方だろう……」

脇腹にラリカの手刀を食らって悶絶していると、気がついた時には栗神名が腕の中から奪い取られていた。そして僕はそのままルーチェの髪に絡め取られ、空中で一人テキサスクローバーホールド状態にさせられた。タップする床が遠すぎて、いったいどうすればいいのか皆目検討もつかないぜ。

「クク……！ ババアとは言ってくれるじゃないか……！ 覚悟はできてるんだらうな？ 言ったことの責任は、自分でとるものだぞ」

「……ごめんね、ルーチェ。君があまりに可愛いもんだからさ、ついイタズラしたくなっちゃったんだ。好きな娘はイジメたくなるって言うだろ？」

「……っ!? え、あ、う……ま、まあそういうことなら……!」

僕の言葉に、しゅるりと髪を縮めるルーチェ。あまりの信じやすさに、流石にちよつと心配になってきた。童貞は女性に優しくされると

すぐに惚れるというが——それを更に拗らせたらこんな感じになるのかな。うーん……そうだ、僕がいなくなっても大丈夫なように、今のうちに耐性をつけるのもいいだろう。人は裏切られて成長していくものだ。

「ルーチエ、実は僕……新しい会社を設立したいと思つててさ。ただ開業資金が足りなくて——君と僕の未来のためにも、少し融通してもらえないかな？」

「み、みらい……！——ああ、いくらでも出してやるぞ！」

「なう……突っ込みどころ激しすぎだろお……！ 双樹もいい加減にしとけよなあ」

「いや、流石に心配になつてさ。もうちょっと騙され慣れといた方がいいかと」

「んな心配しなくても、ルーチエの眼を騙せるやつなんかそうそういねえよ。言つとくけど、双樹の方がおかしいんだかなあ」

「そう？ そこまで難しいもんでもないと思うけど……」

「……だいたい、どうやってんだ？ ルーチエのアレはなあ、脈拍だの瞳孔だの誤魔化すよりよっぽど難しいぜえ？」

「そうだね……相手を騙したい時にはね、フル。まずは自分から騙すんだよ」

「……どゆこと？」

「騙そうとして言葉を発した時点で、もう駄目なのさ。心からの本音で話せば、それはもう自分の中でも嘘じゃなくなるだろ？ 真偽を問われても、堂々と胸を張ればいい」

「……そんなんで出来たら世話ねえよ。んじやなんだ？ 会社だのなんだのも本気で言つてたのか？」

「もちろん、その瞬間はね。重要なのは『ずっと先まで』を考えるとだよ。会社を興してルーチエと結婚して……余生を楽しく過ごす、最後に看取られるところまでちゃんとね」

「……難しくね？」

「育つた環境がね、ちよつと複雑だったからさ。自分を騙すのは得意なのさ」

「——ん……ワリいこと聞いたか？」

「ううん、別に気にしてないよ。親の愛情をたっぷりもらって、友人にも恵まれて——そんな人生さ」

「順風満帆じゃねえか！」

…確かにそうか。そうだけど——だからといってそれが幸福というわけでもないのが、複雑なところだ。まあそんなことは置いといて、なにやら考え込んでいるルーチェの肩を揺らす。将来設計とか子供の数を考えるのは結構なことだが、そのサイズで産めるの？

そして隣を見ると、ラリカに助け出された栗神名がお礼を言っていた。一連の流れは完全に茶番だったし、なんならラリカが彼女を引き剥がしたのも、どちらかと言うと僕の安全のためだったのかもしれないが——それでもこれは『良い機会』になるだろう。

「…それと、ツバキが酷いこと言ったの……ごめんなさい。まだちゃんと謝ってなかったから〜」

「へ？ いいよいいよ、本人には謝ってもらったし。それに、服装がちよつとアレなのは……まあ自覚してるからさ。別に露出趣味があるわけじゃないんだよ？ 体は変化させられても服は無理だから、できる限り肌は出したいの」

なるほど、なぜあんな痴女丸出しの格好をしているのか不思議だったが……そういうことだったのか。マンハッタンを通り抜けるまでに百回は襲われそうな出で立ちは、正直に言うとも目の毒だ。できれば何か羽織ってほしいと思っていたのだが、理由があるんなら仕方ないな。思う存分、凝視させてもらおう。

「それにしても、偉いね栗神名。ちゃんと謝るのは大事だよ——ついでにルーチェも謝ったら？」

「……？ なんでだ？」

「さつき血を抜いた時の話さ。気絶させる前にちゃんと必要性を説けば、無理やりするまでもなかったんじゃないかってさ」

「む……いや、だが効率も悪いし……お前は知らんだろうが、医療行為に慣れていない連中というのは割と厄介なんだぞ。意識を持ったままだと、注射の針の方がダメになる場合が多い」

「…そうなの？」

『力を抜いて』と言われても、針が刺さる瞬間は硬直する者が多いからな。原種であれば別に問題はないが、他の種族……とりわけ浮葉は、無意識でも力が入った瞬間に針が折れる。気絶させるのは、医療行為における麻酔のようなものだと考えてほしいな。ちゃんと後遺症も出ないように気は遣っているぞ」

「じゃあなんでそれを説明しなかったんだい？」

「むっ……それは……面倒だったからな」

「よし、じゃあちゃんとごめんなさいしようぜ。僕も一緒に謝ってあげるからさ」

「だから子供扱いするなって！」

「あ、あの……助けてもらうんだからさ、そんなの気にしないでさ」

「…だつてさ。ルーチェ」

「…むう。まあ、そうだな。先に説明くらいは……してもよかったかもしれない。栗神名だったか？ その……悪かったな」

三百歳近くも年下に気遣いを受けては、無下にするのもバツが悪いだろう。ルーチェが軽く謝罪をして、茶番劇は終わりを告げた。これで栗神名が一方的に感じていたわだかまりも、ある程度は軽減されたことだろう。

だいたいラリカにしてもルーチェにしても、非常に接しやすい人物だ。悪意を持って近付かない限りは、大抵のことはおおらかに受け止めてくれる。それは絶対強者であるという事実からくる、精神的な余裕でもあるのだろうが——なんにせよ、栗神名がビクビクしているのは見えていて心地良いものではない。謝って、謝られて……それで仲良くなれば万々歳というものだ。

そんな状況を眺めていると、栗神名がちよこちよこちらに近付いてきた。ふわりと甘い香りが漂うと同時に、彼女が僕の耳元に唇を寄せて、呟く。

「ありがと……双樹お兄さん」

「ん、どういたしまして」

「あと私のことは、ミーナって呼んでさ。ツバキもちよもそう呼ん

でるから〜」

「オーケー。じゃあよろしくね、ミーナ」

「えへへ…」

かなり遠回しに配慮したつもりだが、よくもまあ気付くものだ。ルーチエは別枠としても、今まで出会ったキッズたちに聡明な子が多いのは、なにか理由があるのだろうか。中学生の年頃なんて、箸が転がるだけでも爆笑する年代だろうに。

「ところでルーチエ。街の中心じゃ割と感染が広がってるみたいだけど……ワクチンとか注射とか足りるのかい？ ラリカが干からびるまで搾り取るんなら、手伝うけど…」

「やめてよ!？」

「心配しなくとも、ワクチンが必要なのはお前だけだ。狂方病への対処法は、原種と浮葉でまったく違うからな。こいつらは飲み薬で充分だ」

「そっか……残念だ」

「こつち見ながら言わないで!」

「そういえばさつき指から出してた液って、おっぱいからも出せるの?」

「デリカシーの欠片もない!」

飲み薬……ああ、最初にコタ君へ指示していた材料の調達はそういうことか。栄養ドリンクでも作るのかというラインナップだったが、あれが薬になるとはびっくりである。まあでも、被害の数によっては、感染速度が治療速度を上回るんじゃないかという心配は——杞憂だったようだ。飲み薬なら、供給の難易度もぐつと下がるだろうし。ワクチンを作製していた器具をしまいながら、ルーチエがふところらを見る。その瞳には一抹の寂しさが見え隠れして……ん？

どういうことだ。首を傾げていると、彼女がラリカとフルへ向けて言葉を発する。

「さて、これで双樹の安全も確保できた……栗神名たちの薬が出来しだい、中央へ向かわねばならん。先に——別れの挨拶を済ませておこうか」

⋮
ん
?

アイヒマン・サイコロジィ

ルーチエの言葉に、暫し呆然とする。突然の別れを告げられ、悲しみに胸が張り裂けそう——なんてことは流石にないが、急にそんなことを言い出されては驚くのも仕方ないだろう。僕が帰る意志を変えない限り、どのみち別れは必然のことなのだから、そこに関してはどうしたって避けられるものではない。

問題は……そう、問題は僕の生活基盤が整っていないことにある。この街の近くに転移したってことは、この付近に要因がある可能性は非常に高い。だったら、この辺りを拠点にしてどうにか帰還の手段を講じなければならぬのだ。そのためには、最低でも衣食住をきっちり揃えておかなければまずい。

なんの強さも持っていない僕が、縁もゆかりもない土地で身一つ、それを築くのは中々に難しい……ん？ いや、よく考えたらコタ君という親友がいたな。ならもう大丈夫だ。短くも楽しい思い出を胸にしまい、笑顔で送り出そう。

「僕を捨てるのかい？ ルーチエ……あんなに愛し合った仲じゃないか！」

「いっどこでだよ！」

「まあそれはともかく。急ぐのはわかるんだけどさ、僕がついていく選択肢はないのかい？」

「…聞いた話だと、中央までは四百キロから五百キロといったところだ。街中を走る以上、安全を考えて時速三十キロほどで走り続けるが……半日くらい背負われたままになるぞ？」

「そんなの我慢できるさ。問題があるとすれば、フルがゲロまみれになるくらいだよ」

「おおい!? …っつーかなんか勘違いしてねえか？ あっちでやること終わったら、ちゃんと戻ってくるぜえ。しばらく面倒見てやるって約束したろ？」

「…？ じゃあなんで『別れの挨拶』？」

「そりやあワールド・ワイド・ウォーカーズの流儀つてやつだ。こんな広い世界で通信機器もねえんだぜ？ 一回離れたら、二度と出会える保証もねえ。奥地まで足を踏み入れて、生きて帰れる保証もねえ。だから別れるときや、今生の別れのつもりで別れんのさ」

ああ、なるほど……そういうことか。それなら最初からそう言つてよね、びつくりするじゃないか。というか外に出るわけでもないんだから、フルたちが戻つてこれない程の何かがあるとは思えないけど。

…と聞いてみたが、何があるかわからないのが異世界というものらしい。何が起きても後悔だけはしないように行動するのが、ワールド・ワイド・ウォーカーズ。彼女たちはそう言い切ると、手を差し出してきた。握手は万国共通だと言うが、未来でもそれは変わらないらしい。

三人の小さな手を固く握り返した後、僕は小指を差し出す。握手がフルたちの別れの挨拶だと言うなら、これは僕流の再会の約束だ。

「…なう、ちよつとこつ恥ずかしいなあ。昔はこれが普通だったのか？」

「そういうわけじゃないけど……僕がやるとね。ちゃんとご利益はあるのさ」

「…？」

小首をかしげる三人と指切りをしていると、材料を調達し終わったコタ君が帰ってきた。ルーチェが早速とばかりに薬の作製に取り掛かったが、その様子はどう見ても『調理』である。というか女衆に作り方を伝授しているあたり、それそのものだろう。

浮葉への対応は『治療』というよりも、自己治癒力を高める意味合いが強いらしい。そもそも彼等が三つの病気にしかかからないのは、免疫力がべらぼうに高いからこそだ。いま作っている栄養ドリンクは免疫機能を増幅させ、更に体力を回復させる効果があるらしい。原種とは違い、治すのは彼ら自身ということなのだろう。大怪我をしても抗生剤すら必要ないというあたり、その頑健ぶりがよくわかる。

程なくして薬は出来上がり、別室の二人にそれを飲ませ——僅かな時間も惜しいというように、フルたちは慌ただしく出発していった。

桃千代たちもついていこうとしたが、体力を消費すると薬の効果が薄れると諭され、数日はコタ君の家に留まることとなった。コタ君の優しさが留まることを知らないぜ。

「しっかしあいつら夜通し走り続けるつもりかよ……なんつーか、すげえな」

「人通り少ないほうが走りやすいって言ってたしね。っていうか、コタ君だってそれくらいはできるんじゃないの?」

「できるできないで言やあでできるけどよ、やりたかねえな。ましてや、あいつらよそもんだぜ? 人が良すぎんだろ……」

「お人好しっていうなら、君も相当だと思っけどね」

「む……そうか?」

「——悪人は悪人を自覚するけど、善人は善人を自覚しないもんさ」

「へっ、やめろよ。善人なんて柄じゃねえよ」

「いや、君に言ったわけじゃないけど」

「ぬぐっ!?!」

「自意識過剰なんじゃない?」

「むぐぐ……!」

「冗談冗談、君は善人さ。もちろん僕も善人だぜ」

「…自覚してるなら、お前は善人じゃねえってことになるな」

「これは自覚じゃなくて自称さ」

「ああ言えばこう言いやがる……!」

コタ君をからかって遊んでいると、三人を見送っていた桃千代たちが戻ってきた。フルたちの姿が見えなくなるまでは僕も一緒にいたが、彼女たちはもう少し外にいたかったらしい。道の遥か先にいる家族たちを思えば、三人の安全を願うのは当然のことだろう。

「気は済んだかい? 随分長いこと見送ってたみたいだけど」

「や、ついでにあの飯屋に行つて謝つてきたんだ」

「金平糖もらった!」

「甘くておいしく」

「…つたく、子供にやあめえな姐さん……」

「僕の分は?」

「ガキにタカるなっつーの!」

「双樹お兄さん、あくん」

「ん……ありがと、ミーナ」

ただの冗談だったのだが、くれると言うなら頂こう。人の厚意は有り難く頂戴するのが礼儀というものだ。謙虚すぎでも横柄すぎでもない、ちょうどいい塩梅を探するのが人間関係の基本である。花が咲いたような笑顔のミーナを見れば、ここは甘えさせてもらうところだろう。甘味だけに。

しかしそんなミーナの行動を見て、柿椿が訝しげにこちらへ視線を向ける。尻尾がリズム良く左右に振られているが……猫の尻尾サインに準ずるなら、あまり愉快な感情だとは言えないだろう。

「…なんでそんな仲良いんだ?」

「ん? そうだね……実を言うと僕には、頭を撫でると人を惚れさせる能力があつてさ。くくっ……君たちがいない間に、ミーナは籠絡させてもらったぜ」

「なっ……!」

尻尾をピンと伸ばし、驚愕の声をあげる柿椿。しかしその後ろにいる桃千代とコタ君は、呆れた顔で僕を見ている。いい加減、僕の冗談にも慣れてきたのだろう。幼い柿椿だけが、純粹に僕を信じてくれている。ならばここは期待に応えねば失礼というものだろう。ミーナもクスクスと笑いながら、流れに乗っかってきた。僕の肩にしなだれかかり、熱っぽい顔で深く息を吐く。

「私、もうこの人がいないとダメなの〜」

「そ……そんな……目を覚ませよ! ミーナ!」

「ツバキも一緒に堕ちましょ〜?」

「ひっ……く、くるな——うわっ!? なっ……ちよ!?!」

「ふふふ……実は私も既にな……」

「う、嘘だろ!?!」

桃千代も、彼女の慌てぶりを見てにんまりと口元を歪めて参加し始めた。迫りくるミーナから後ずさって逃げる柿椿……そんな彼女を後ろから羽交い締めにする桃千代。二人によつて手足を押さえられ、

柿椿は完全に拘束されてしまった。

「や、やめろ……来るな……!」

「そんなに怯えなくても大丈夫さ。数秒後には君も——僕が大好きになつてゐるだろうぜ」

「ぎやわああ!!」

動けない彼女の頭を存分に撫でる。頭の上にある耳は少し短めで、ほんのり丸みを帯びている。猫と言うよりは、やはり豹とか虎とかの大型猫科っぽい感じだ。ふにふに触ると、柔らかく折れる。金髪のベリーショートは撫で心地抜群で、いつまでもこうしていたい気分である。

「うう……」

「どうだい?」

「……あたし、お前を好きになつたのか……?」

「自分の心なんて、人に聞くもんじゃないさ。自分自身に聞いてみればいい」

「あたし……あたしは——」

半ベそをかいている柿椿を見て、口元をひくつかせている桃千代。三人の中では、彼女が一番『いい性格』をしているようだ。くつくつと喉を鳴らしながら、困惑する仲間を笑っている。一方、柿椿の方は——キツと顔を上げ、僕へと鋭い視線を向けてきた。

「——あたしは双樹が好き!」

「アホかつ!」

「ぐふうっ!? ——なにすんだ! バカちよ!」

「バカはお前だろ!? 単純にも程があるわ!」

「撫でられたんだから仕方ないだろ!」

「撫でられただけで惚れるバカがいるか!」

「そういう力なんだろ!」

「本気と冗談の区別くらいつけろアホ!」

「なっ……! だ、騙したのか!」

まさか撫でた後も騙され続けるとは思わなかったぜ。しかしそういうことなら、まだ遊び続けるのも吝かではない。桃千代と言い争い

をしている柿椿に近付き、もういちど頭に手を乗せる。騙っていたのだな、と睨みつけてくる彼女の視線を受け流す。

「柿椿。君はアホでもなけりやバカでもないさ。さつき言っただろ？ 自分自身に聞いてみろって……その上で、君は答えを出した。だったら嘘をついているのは、桃千代の方さ」

「……！」

「『……！』じゃないっつーの！ どんだけ間抜けなの!？」

「間抜けなもんか。僕は君の意志を尊重するぜ……君に委ねて、君を信じるさ——柿椿」

「だああー！ ややこしくなるからお前は黙ってろ——あばぶっ!？」

「あたしは！ 双樹を信じるぞー！」

「私は十年來の友情が信じられなくなったんだけど!？」

「そ、双樹……あたしのはツバキでいいからな……」

「聞けや！」

「うん、よろしくねツバキ」

「へへ……」

「何がどうなってるの!？」

一人で突っ込み続けている桃千代を見て、コタ君が片手で顔を覆いながら笑っている。煙管を片手に、ニヤリと笑う様子は実に絵になっていた。

そうこうしている内に日もとっぷりと暮れ、部屋の中は行灯の灯りだけがボンヤリと光る、薄暗い状態になった。電気がないこの街だと、日暮れは就寝の合図のようなものらしい。

「部屋は……流石に一人一室は無理だぜ。わりいけどよ」

「うん、お気遣いなく。この一部屋に、布団も四人一枚で充分さ」

「ナニするつもりだオイ！」

「冗談だって。というかこの子たちの寝相によっちゃ死ぬかもしれないし、試す度胸はないぜ」

「あん？ ……ああ、そういうことか。んな心配しなくても、寝てる時は見た目相応の力しか出ねえよ」

「……そうなの?？」

「水晶の嬢ちゃんから聞いたんじやねえのか？ ……この『力』に重要なのは『人の意志』だからな。寝てる時、気を失ってる時なんかは働かねえんだ……だからこいつらも気絶させられたんじやねえか」

「あ、そっか……ということは……なるほど、寝首をかくなら寝てる時……」

「かくなよ!？」

「やだな、物の例えじゃないか」

「例え方ってあるだろ!」

憤慨するコタ君を宥め、就寝の準備をする。三人は昼に隔離されていた部屋をそのまま使い、僕はこの部屋を一人で使わせてもらえるところになった——なったが、数分後にふすまが開かれたかと思えば、ミーナたちが布団を抱えながら騒がしく侵入してきた。

「一人じゃ寂しいだろ？ 来てやったぞ!」

「それは嬉しいけど……もう少し慎みをね、持った方がいいぜ。男女七歳にして席を同じゅうせずって言うだろ?」

「席じゃなくて、布団」

「おっと、それもそうだ」

「もうちよつと粘れよ! ……うー……なんでこんな奴と……」

「おいおい、その言い方だと一緒に寝るのが嫌みたいに聞こえるじゃないか、桃千代」

「その通りだけど!」

「仕方ないな……ほら、撫でてあげるからこっちにおいで」

「ええい、触るな!」

「ははっ、恥ずかしがらなくてもいいんだぜ」

「鬱陶しがってんだけど!？」

「ええ……? ……わかったよ。悲しいことだけど……君とは金輪際、喋らないことにする」

「極端すぎる!」

「……」

「いや、別にそこまでイヤってわけじゃないからな……?」

「……」

「お、おい…」

「…」

「なんとか言えよ！」

「…」

「…ああもう！ わかったって！ お前と寝るのはイヤじゃない！

これでいいだろ！」

「…もう一声」

「にやつ!? ぐっ……お、お前と寝るのも悪くない気がする……ぞ！」

「あと一步、踏み出してみよう」

「ぬ、ぐ……お、お前と寝たい！」

「もうひと頑張りだ。正直になれよ」

「わ、私と……寝てくださいあい！」

「オーケー、そこまで言うなら仕方ない。ほら、おいで」

「にゃーん！ ……って、ざけんなゴラァ！」

「君って結構ノリ良いよね」

間違いない、おだてられて調子に乗るタイプだろう。興奮した桃千代に右手首を噛まれながら、四つの布団をくつつける。こうやって噛み付くことか、あと不意に見せる仕草はやはり猫科っぽい。今は甘噛みで済んでいるが、力加減を間違えられると血の雨が降りそうであり、ちよつと怖いぜ。

行灯を消した後も、しばらく四人でお喋りをして——誰とも知れず、一人が寝息を立て始めると皆それに倣った。ちなみに僕はと言うと、目が冴えて眠れやしない。枕が変わると眠れない……なんて繊細な神経は持ち合わせていないが、いくらなんでも時間が早すぎる。

健康的な生活を心がけてはいるが、それでも寝るのは午後九時から十時の間くらいなのだ。今は体感的に、七時前後といったところだろう。連動してはいないだろうけど、スマホを見れば……あ、フルに預けたままだった。

うーん……やはり眠れない。布団から身を起こして、隣を見る。すやすやと寝入っているミーナと桃千代……そして布団から半分くらい、はみ出しているツバキ。というか、浴衣が乱れすぎて色々はみ出

サイレンス・アマリリス

提灯の光に揺らめく女性——『ロゼリア・シルヴェストリ』と名乗った彼女は、名前とは裏腹にどうみても日本人だ。少なくとも、東アジア系の人種であることは間違いない。肩にかかる程度の髪は、周囲の宵闇に負けず劣らず黒く——それでいて、濡れたように艶やかだ。年は成人しているかどうかといった風に見える。

「それにしても失礼だよ、君は。ボクのどこを見ればお化けと勘違いするんだい？」

「顔……かな」

「本当に失礼すぎない!？」

「や、この世ならざる美貌的な意味でさ」

「そ……そう？ 褒めてくれるのは嬉しいけど、流石にそれは言い過ぎじゃないかな」

「うん、よく見返したらそこまででもなかったよ」

「それはそれでひどいよー」

白を基調とした着流しに、これまた白い羽織を着こなして……ところどころにあしらった花の柄がなければ、まるで死装束だ。そしてなにより、この年齢にして『ボク』である。いわゆるボクっ娘と言うやつなのだろうが、実際に前にしてみると、なんともむず痒い。

「……っ！ ん、んんっ……ごほんっ！」

考えてみると、一人称とは不思議なものだ。年齢、家柄、場所、時と場合によつてこれほどコロコロ変わるものもないだろう。しかし十歳を過ぎても『俺』『ボク』などを使用する女性は、大抵の場合、創作物などに影響を受けた痛々しい人物という印象だ。

「……っ……っ、うぐぐ……！」

好きなキャラクター、あるいは好きな俳優さんなどが演じる、現実ではそうそう有り得ない所作を真似る——そう、憧れは時に自分の『イタさ』を忘れさせるのだ。それでも十代半ば程になれば、過去の汚点として葬られることがほとんどだろう。しかし彼女は十代後半……もしかすると成人しているかもしれない年代だ。彼女が自分を

『ボク』と呼び続けるのは、いったいどのような理由なんだろう。興味が尽きない。

「はう…い…ううつ…い…」

…というか、さつきから彼女…：うーん…：w s t r フ ホ イ J K
L P ;。 ;、 m n b v c x z r せ t チ ユ v 日 j n k m ; l k j h g c
f x d z r c づ y b n k m ; i x d f c g v b h k m ; l ; h v b n
m x f c v h b k j n c v h b k j n ; m l n j h j v g c h f v b
n k l j b k h v g c v b n。

「——うわあああつ!？」

「もしかして僕の心、読んでる?」

「な、なに、今の思考——はっ!?! い、いや…」

やっぱり読まれてるよね。なんだなんだ、歴史から抹消された種族とか言われながら、こんなところに居ちやうんだ。まあルーチエの言から察するに、あまりよろしくない事情があるのは間違いないだろうけど。勘違いとはいえ、ルーチエがいきなり僕を拘束しようとした事実を考えれば——ロクなことにはならなさそうだ。

「僕、そろそろ寝なきや。じゃね」

「ま、ま、待ってよ!。ちよつとひどいんじゃないかな!」

「いや、心を読まれるってあんまり愉快じゃないし…」

漫画やアニメじゃあるまいし『心を読まれるくらいなんでもないさ。一緒にいよう』なんて、口が裂けても言えはしない。そしてそんな感情すら読まれてしまうのだから、一緒にいればいるほどお互いが不幸になるだけだ。ならばさっさとお暇いとました方がいい。ああ、心配しなくても、君がそういう種族だつてことは吹聴したりしないからさ。じゃねっ。

「——逃がすもんかあ…い…」

「ぬぐぐ…い。ね、年齢を考えて行動してくれないかな」

脱兎のごとく逃げ出そうとした僕に、全身でしがみつく彼女。幼児が足にしがみついてくるのと似ているが、大の大人がしていい行動ではないだろう。人の目はないにしても、もう少し外聞というものを考えた方がいいぞ。

「ボクにはわかる！ 君は良い人だ！」

「確かに僕は良い人だけど、限度はあるんだよね」

「——不愉快な気持ちだが、ボクに読まれて……それでボクが悲しむから！ 逃げようとしてるんだろ？」

「わかってるんなら放してくれよ。お互いにとってよくないのはわかるだろ」

「…その思いやりの心だって読める。そう思える人は貴重だから、だから……むしろボクは嬉しいんだ」

「いや、僕が不快だって部分は解決してないんだけど」

「我慢してほしい」

ええ……？ というか、心を読める人ってこう……なんて言えればいいんだろう。もつとアンニュイな感じにならないのだろうか。シニカル皮肉でひねくれ者で、ピカレスク小悪党かつ偏屈者なイメージなんだけど。なんだこのアグレッシブさは。さとり妖怪でも見習ってほしいものだ。

「他人に勝手なイメージを持つのはよくないよ。これがボクなんだから……ああ、君にはもつとよく知ってほしいな」

「…あのさ、出会って数分しか経ってないんだぜ？ 僕に執着する意味がわからないんだけど」

「さつき言ったよ。君みたいに思ってくれる人は貴重……ううん、はつきり言うて初めてだ。友達になってほしい——そう思うのは自然だろ？ この街へ来るまでに五つの村へ寄ってきたけど……ボクが心を読めるって知ったら、例外なく追い出そうとしたしね」

「…同情を誘おうたって、そうはいかないぜ。そんなこと聞いたくらいじゃ、僕の心は揺らがない」

「めちやくちや同情してるけど!?!」

「くっ……なんて厄介な能力なんだ」

なんて可哀相な娘なんだ。友達になってほしいというのなら、友達になってあげたい気持ちはある……しかし、しかしだ。彼女と友達になるということは、喜怒哀楽の全てが見透かされ、些細な感情の機微も把握されるということだ。履いている下着の色から、手持ちのエロ

テイカルな諸々、そして性癖の全てを詳らかにされるといふことだ。

——そして過去の全てを暴かれるといふことでもある。他人、友達、恋人、家族……段階によって知られてもいい、知ってほしい情報は変わるものだ。少しずつ距離を埋めながら、互いを知っていく過程こそが、信頼と信用を厚くするのだ。それをすつ飛ばして全てを知られてもいいなんて、初対面ではどうしても思えない。心苦しくはあるが、それが偽らざる本音だ。

「ちよ、ちよつと勘違いしてるよ？　ボクが読むのは『心』『記憶』じゃない。君が年がら年中、過去を思い返してるとかならともかく……」

「そうなのかい？」

「そもそも、人の思考なんて常に漠然としたものだよ。言葉にする段階で、ようやくはつきりと形作られるんだ。わかりやすくいうなら、ボクが読むのは雨垂れや耳垂れがつくような、短い感嘆の感情がほとんどさ」

「うーん……」

「そういう意味でも、君は珍しい人だよ。常に思考を巡らせて、発する言葉を先に考えてから口にする。とても理路整然とした思考形態だ」

雨垂れや耳垂れ——要はビツクリマークやハテナマークが付く類の、ふとした驚きや疑問が、彼女の読心のほとんどを占めるというところか。確かに、日常でいちいち過去を思い返しているような人物はあまりいないだろう。

しかし人間は唐突に記憶が湧き上がることもあるし、プルスト現象なるものだってある。音、匂い、味覚などと紐付けられていた記憶が、それらによってフラッシュバックする現象を指すものだが——例えば、そうだ。

食パンを食べる時に、いつもエロいことを考えていたとしよう。その際、いつも同じ音楽を聞いていれば……人はその全てを関連付ける。

つまりその音楽を聞いただけで、食パンの味とエロスが鮮明に思い返されるのだ。そして彼女は、いつでもその記憶を覗き見ることがで

きる。とんだ変態だ。

「いわれのない誹謗はやめてくれないかな!？」

「でもさ、僕は君のことを何一つ知らない。そんな人に心を読まれて、どんな気持ちになるか……わかるだろう？」

「う、で、でも……」

「誰だって平等じゃないんだ。君のそれはハンデとも言えるし、長じているとも言える。でも捨てられるものじゃないんだろ？ なら上手く付き合っていかなくちや。嫌がる人間を追い求めるより、君を心から受け入れてくれる人を探す方が、きつといいさ」

「——そんな『いつか』より、ボクは目の前を優先したい」

「……やめてくれ。これ以上は、嫌いになる」

「っ……!」

誰とでも友宜をかわせる——そんなのは夢物語だ。人間である以上、どうしたって合う合わないはある。僕はその許容が広い方だけど、今回ばかりは厳しいものがある。

「……ごめんね」

「お願いだ、なんでもするよ……!」

「オーケー、今から君と僕は友達だ」

「嘘すぎない!？」

「そんなことないさ」

「頭の中がおっぱい一色! ——ボクの切実な願いとか……思いとか! おっぱいより下なの!？」

「いいや、違う。君の切実な願いや思いが、胸に響いたんだ」

「“胸”の一字に全てが詰まってるう……」

「君の言葉が、想いが、僕に届いたのは事実だよ。心を読むだけじゃ、読まれるだけじゃ響かない……言葉にして初めて届くものがあるんだ。僕の心を変えさせた、自分を誇って胸を出せばいい——じゃなかった、胸を張ればいい」

「欲望ダダ漏れだよー!」

でもさ、『なんでもする』を『おっぱい』に変換しただけでも、結構な讓歩だと思うんだよ。そこは僕の自制を褒めてほしいものだ。高

校生の時の僕なら、それはもうR18待った無しだった。

「え、えっと……触つてもいいけど、その、今すぐとは言つてないよ。友情ってそんなすぐに育めるものじゃないから——もう少し仲良くなつてから、ね?」

「…」

「…ダメ?」

「いいよ。ただ利息はトイチね」

「なんの利息!?!」

「十日ごとに0.1おっぱいが加算されて、それを元おっぱいにも含める……いわゆる雪だるま式つてやつだね」

半年も経てば五倍以上に跳ね上がる、恐ろしい計算方法である。しかし約束した以上は、守ってもらう他ないだろう。条件を後付けしてきた以上、何かを差し出すのは当然の話だ。友人だからこそ、こういう部分はきつちりすべきなのだ。貸し借りをなあなあにして、一方が得ばかりする関係は、いずれ破綻してしまうものだ。

「じゃ、改めて……僕は沙羅双樹。よろしくね」

「うん、よろしく。さっきも言ったけど、ボクは『ロゼリア・シルヴェストリ』。親しい人はロゼって呼ぶよ——いい、いい、いまっ! 『親しい人なんているの?』って思ったよね! ひどいよ!」

「親しい人なんているの?」

「口にまで出した!」

「…ああ、家族とかか。ごめんごめん、思い当たるのが遅かったね」

「謝りどころに物申したい……! 合ってるけど、合ってるけどさ……!」

「とにかくよろしくね。ゼリ」

「なんでそこ!? ロゼでいいじゃないか!」

「や、あんまり親しくなるのが早いとおっぱいも増えないし……」

「増えなくていいよ!」

さて、そろそろいい時間だし、戻るとしようかな……はて、そういえばロゼはどこに泊まっているんだろう。というかよく考えたら、素性と現状くらいは聞いておかないと、ルーチエと出会った時に一悶着ありそうだ。

「…！ ルーチエ…『ルーチエ・ルミナリア』？」

「ああ、うん。知ってるのかい？」

「…ボクたち『イニマ』で知らない人はいないだろうね。そもそもとして『ルミナリア一族』自体、すごく有名だし」

「ふうん…？ そうなんだ」

「むしろ原種なのになんで知らないの？ …というか、原種がこんなところにいる時点でおかしいけどさ。どうやって来たの？」

「ん？ そうだね… ……ほい。理解できた？」

「できるか！」

「ええ…？ ……せつかく今日一日を振り返ったのに…」

「あ、あのねえ……双樹はさ、早送りとスキップだけで映像が理解できるのかい？ 頭の方は普通の人と大して変わらないんだよ？ 他人が体験したことを理解しようとするなら、同じくらい時間がかかるものなの！」

「うーん……意外とシヨボい能力だね」

「失礼な！」

「ちよつと待ってね。わかりやすくかいつまんで、頭の中で纏めるから」

「いや、それ結構すごい…」

道をとてくと歩いていたら、光と共に周囲が変化して——そこは見知らぬ大森林。よくわからない植物に捕まって、助けてくれたのは可愛らしくも頼もしい浮葉の子。会話している内に理解できたのは、未来だか平行世界だかといった荒唐無稽な現実。

湯屋での一件、コタ君との出会い、桃千代たちとの出会い、そして混浴。様々な大きさのおっぱい。ラリカの異常な食欲と、質量保存の法則を無視した胃袋の謎は、そういえばまだ聞いていなかったな。

狂方病の一件と、それに付随する諸々の事情。ルーチエとの出会い。大ききの割に柔らかかったこと。そして人々を救うために中央へ向かった三人との別れ——再会の約束。寝付けずに外へ散歩に出かけ、今に至る。

「…へえ。『ルミナス』の三人が来てるのか」

「ルミナス?」

「チーム名だよ。彼女たちの」

「——ああ、そういえば有名なんだっけ」

「有名も有名さ。『解放者』の直系が二人……なのに、もつとも実力が高いのは浮葉の子。色んな意味で、有り得ないチームだよ」

「…」

「…っ！　べ、別にわざとわかりにくく言ってるわけじゃないよ！

意味深な方がカッコいいとか、思っていないから！　やめっ、あつ……そんな風に思わないでほしいな！」

「…」

「い、Eもないよ！　Dカッ——ってなに考えてるんだい!？」

今の状況をはたから見れば、ロゼが一人で喚いているだけの異常者にしか見えないな。まあそれはともかく、解放者やらなんやらの説明をさっさとしてほしいものだ。いちいち情報を小出しにしたところで、カッコよさには繋がらないぜ。そういうのが許されるのは、週刊雑誌の引きくらいのものだ。

「だから違うって!」

「それで、解放者ってというのは?」

「…もう。ええと、解放者ってというのは——つまり異世界の核を解放した人間のことだよ。『エアズハート』『黄金林檎』『ロホ・アラーニャ』『ヴィス』……無機物、生物、非物質と様々だけど、それらを壊した人間は、例外なく強大な力を体に取り込めるんだ」

「ふむふむ」

「そしてその強大な力は、遺伝する。『ルミナリア』『クルトクルン』『サンタクロス』……このあたりの姓を持つ人間は、生物としての格が違うんだ」

「『シルヴェストリ』は?」

「…っ、そ、うだね……うん、シルヴェストリも、そうだよ。一族なんて言うほど人数はいないけどね……あのさ、ちょっと察しが良すぎないかな」

「勘がいいとはよく言われるね。しかしなんというか……ジャンプ漫

画並みに血統が重要そうだねえ」

「ジャンプ？ …へえ、週刊雑誌…ははあ…面白そうだね」

「…今はないのか。ちよつと残念」

「二度、文明が崩壊しかけてるからね。残ったものも多いけど、失われたものも沢山ある」

…さらつと驚愕の事実を聞いてしまった。第三次世界大戦がどうのとフルが言つてたけど、それに関係しているのだろうか。どこかの学者が『第三次世界大戦は核の撃ち合い、第四次世界大戦は石の投げ合い』だと言つていたが、流石にそこまでは衰退しなかったのかな。

「そうだね、人類はそこまで馬鹿じゃない…:…と言いたいところだけど、たぶん異世界の発見がなければそうなつてたんじゃないかな」

「なるほどねえ…」

「そう、それで——話を戻すけど、血統についてさ。解放者の血を引く人間は、身体機能も能力も高くなる傾向にあるし、直系ともなると間違いなく強者として生まれることになる。血統から外れた人間が、受け継ぐ人間に勝つことは稀だ」

「ふうん…:…そうなるかと、フルはどうなのかな？ さつき『フリット』

の名前は出てこなかったけど」

「そう、だから『有り得ない』つて言ったのさ。一般人が解放者の血族を打ち負かすことはあるけど…:…それは前者が一般の枠組みで天才と呼ばれ、後者が血族の枠組みで無能だった場合くらいだよ。原種で言うなら、大人が幼児に負けるくらいの珍事さ」

「へえ…:…あれ、でもフルは——自分のこと、かなり強いつて言つてたけど」

「かなりなんてもんじゃない。フル・フリットは、解放者本人である『ルーカス・ルミナリア』と引き分けるほどの、世界有数の実力者だ」

…なるほど。『フリット』は解放者の血を引いていない…:…けれど『フル』は世界有数の強者。そこから導き出される答えは、ただ一つ。きつと母親が一夜の過ちを犯してしまったんだろう。薄い本よろしく『ああつ、だめ、私には愛する夫が…!』みたいなシーンがあつたのかもしれない。

「だいぶ失礼なこと考えてるよ!？」

「え、でも種違いか腹違いか取り間違いくらいしかないような…」

「そういうことじゃないんだよ。地球には『解放者の血を引く浮葉』はいないし、異世界でも確認されてないんだ」

「…つまり、浮葉って種族には——フル以外に『絶対的な強者』がいなくていいことかい?」

「だね。まあ浮葉って種族自体、平均的な身体能力が高いから強者は多いけどね」

つまり「ダストパイル」の解放者はいない……ってのは違うか。入口が解放されてる時点で、誰かしらがそれを成したのは確かだ。だとすればその解放者が子供を作らなかつた、あるいは作る前に死んでしまった線が濃厚だろうか。でもそれだとフルの説明がつかないし…

「ま、そのあたりは本人に聞くしかないんじゃないかな。本人が知っていたら、だけどね」

「…」

「やだな、わざわざ質問したりしないさ。詮索屋は嫌われるって言うしね——ふああっ!? 『じゃあ君は嫌われるしかないじゃん』って……ひどすぎるよ!」

「…」

「——っ! つ、都合が悪くなるとエッチなこと考えだすのやめてくれないかな!」

「…」

「せめてボクを出すのはやめてくれ! ——っっていうか胸のポリウムがおかしいんだけど!? あ、あ、ちよっ、そんなところまで……!」

うーん……今までの人生でそういう思考と無縁だったとは思えないんだけど、妙にウブなのは何なんだ。男なんて、起きてる時間の四分の一くらいはエロいことを考えてるもんだ。それとも、人と関わらずに育ってきたとでもいうのだろうか。

「…ふ、うっ……はあ、んっ……ん、その通りだよ。ボクたちの種族は一般に認知されてない……というか、むしろ秘匿されてる。異世界」

セクシュ〃の奥で、ごく少数がひっそり生き残ってるだけだしね」

「セックス？」

「セ・ク・シユ！」

「うーん……じゃあなんでロゼはここにいるんだい？ ルーチェの反応から考えると……ああ、そうだ、『生き残りか！』なんて言ってたし……見つかったら面倒なことになるんじゃないの？ 穏やかな接触とはいかなさそうだよね」

「…外の世界に、憧れて。父さんや母さん以外の心に触れたくて。どれだけ危険があつても、どれだけ悪意にさらされても——未知への憧れには勝てないんだ」

「…」

「——なんでおっぱいのこと考えてるの!？」

「や、なんかちよつと恥ずかしくなったからさ」

「おっぱいの方が恥ずかしいよ!」

「じゃあ君は、常に恥ずかしいものをぶら下げて歩いてることになるね」

「うぐう……!」

しかし『危険にさらされても』ということは——もしかして、ルーチェに見つかったら本気でまずいんじゃないかなろうか。殺される……なんてことは流石にないよね？ そもそも、何をもってロゼたちの種族を危険と判断してるんだろう。心を読む能力……まあ迫害されるには充分すぎるっちゃすぎるけど、危険かと言われれば、首をかしげるところだ。

「…色々あるのさ」

「——ロゼ。隠し事はナシって約束しただろ？」

「してないけど!？」

「そうだった？ ま、言いにくいことは言わなくてもいいさ。僕の方は強制的に知られちゃうわけだけど、言いにくいことは言わなくていいよ」

「うぐつ……! ……本当に気にしてないのは助かるんだけど、それならわざわざ皮肉ることないじゃないか。意地悪だな、君は」

その年で頬を膨らませるのはどうかと思うが……それより、聞いたことが一つだけある。ルーチエが戻ってきた時、どうなるのかってことだ。どう足掻いても争いになるといふのなら、会ってほしくはないんだけど。

「さてね、あつちの出方次第さ。でも、そうだね……いい機会だし、先祖の恨みをここで晴らすのもいいかな——」

「…」

「——なんてね、冗談さ。罪悪感から逃げるために百年も引きこもったんだろうし……傷口に塩を塗り込むような真似はしないよ」

「——」

「…っ！ あ、ご、ごめん……悪意を吹き込もうとか、そんなんじゃないよ……」

「本人のいないところで否定的なことを言うのも、聞くのも嫌いなんだ」

「う、うん……ごめん」

「利息。トイチから、カラス銭にするからね」

「うん……えっ、それはおかしくないかな!？」

「え? ……ああ、ごめんごめん。カラス銭じゃなくてカラスおっぱいか。一日一割だから……半年も経てばいつでも揉み放題だぜ。やったね」

「勘弁してほしいんだけど!」

正直、彼女たちの邂逅には不安しか残らないが……まあなるようになるだろう。なるようにしかならないとも言える。もし諍いが決定的なものになってしまった場合は——ああ、その場合は……強い方につくとしよう。

「ひどくない!？」

「水は低きに流れ、人は易きに流れるものさ」

「それ迎合しちやダメな言葉だよ!」

……ま、二人がどうなっても友達に友達だ。知らない友人同士の仲を取り持つのも、友達の努めってやつだろう。ルーチエが戻ってくるまではまだかかるだろうし、それまでにもう少し色々聞ければ、妙案

でも思いつくかもしれないし……頑張りますかと

フオスフオファイライト・ファイアフロレスト

午後十時までにはベッドにインし、午前六時に起床する。猫たちのご飯の補充、トイレの掃除をした後に家を出て——時計の長針が一周りするくらいの時間、ランニングに耽^{ふけ}る。戻った後に熱いシャワーを浴び、家族の食事を用意し始める……それが僕の日常だ。

世界が違ったとしても、それは変わらない。起床時間とランニング、そしてお風呂だけは欠かせないし欠かしたくない。いつもと同じ行動をすることで、日常を逸脱した状況からくるストレスの軽減も狙いだ。

新しい出会いや楽しさはあるにしても、それとこれとは別なのだ。人間というものは、ストレスに無自覚な生物である。体に異常が出始めてようやく気付くなんて話は、枚挙にいとまがない。自分で平気だと思っただけでも、予防のために行動しておくのは大事だ。

体感でしか時間が計れないのは痛いのが、僕の体内時計はかなり正確な方だ。走った時間は、一時間プラマイ五分以内に収まっているだろう。ついでに近場の地理もかなり把握できた。ご近所さんとの立ち話も何度か挟んだため、外に出ていた時間は一時間半といったところだろうか。

街中に水路が走り、畑と住居が混在している様子はなんとも奇妙だ。街中に畑があることも、都会っ子からすると違和感しかない。どの場所でも、なんの植物でも育つという特殊性が、街の構造にも影響しているのだろう。

見たところ排水は水路に垂れ流しの様だけど、しかし流れている水は澄んでいる。どういう浄水システムなのか興味深いな。江戸時代なんかは、リサイクルの理想形とも呼ばれるほどゴミが出なかったらしいが——この街もそうなのかな？

色々と考えさせられる街並みを、クールダウンしながら見回す。物行き帰り共に視線を向けられまくったが、手を振ると振り返してくれる人も多い。人と人との距離が、現代より幾分か近いように思える……と、そんなことを思っている内にコタ君の家へと戻ってきた。

——しかしなにやら騒がしそうで、いったい何事かと首をかしげながら部屋へと向かう。縁側を通ると、庭には見事な家庭菜園があった。見たことのある野菜もあれば、よくわからないものもあるごった煮状態だ。朝ご飯に出てくるのだろうかとかとワクワクしながら通り過ぎると、部屋に近付くにつれ言い合いの声が大きくなってきた。

「お前！ 双樹をどこにやったんだよ！」

「い、いや、だからね？ ボクも知らないんだよ……朝起きたらいなくなってるし……」

「…だいたいテメエは誰だ？ 人の家でぐーすか寝こけて……招いた覚えはねえが」

「だ、ただ、だってここで寝ていいって双樹が言うから……！」

「双樹お兄さんは、私たちと一緒に寝たのよ？」

「わざわざ真夜中に外へ出て、知り合ったばかりの女を連れ込んで——それで自分はいなくなったってのか？ 信用できるかよ」

…ほほう、なにやら面白いことになっているようだ。あの後、外で野宿しようとしていたロゼを引き止めて、お屋敷へ連れ帰ったわけだが……わざわざコタ君を起こしてまで了解を取るのもなんだったので、事後承諾でいいかと部屋へ連れ込んだのだ。まさかこんなことになるとは。まあちよつと思つてたけど。

とにかく誤解を解くために、ふすまを勢いよく開けた。ふらつきながら片膝をついて、息を荒げる。そしてそのまま力尽きたように畳へ倒れ込んで、息も絶え絶えにロゼを指差した。

「…やら……れた……その……女に……気をつける……！」

「まさかすぎるんだけど!？」

「テメエ……！ うちの客人に何しやがった!？」

「ごかつ、ごつつ、誤解だよ！ 双樹がボクを陥れようとしてるんだ!？」

「ミーナ、ツバキ！ ふん縛るぞ!？」

「くつ……仕方ないな……！ ——『トレイスプレゼーチェー!』」

「——っ!? ……いっ——痛っだあああっ!?」

「ぐっ……!？」

おお、ロゼがなにやら言葉を発したと思えば、全員が片足を押さえ

て跳び上がった。まるでダンスの角に足の小指をぶつけたような騒ぎだ。そしてその隙について、彼女が僕の方へ飛びかかってきた。寝転がっていたままだったので上手く避けられず、背中に馬乗りされてしまった。いや、馬乗りとは言えないか。重すぎて潰れてしまったので、『下敷きになってしまった』が正しい。

「重くない！」

「僕はなんの力も持ってないんだぜ？ 君の体重を五十キロ程度だと仮定して……いま、ロゼは二メートル先から放物線を描いて僕の背中に飛び乗ったんだ。か弱い僕にとつては、ちよつとした事故レベルだよね」

「え、う……そ、それについては謝るけど……」

「じゃあ利息をさらに——」

「ダメー！ これ以上あがると一生揉まれ続けちゃうよ！」

「その何が悪いって言うんだ！」

「なんで怒られてるの!? ——というか、双樹が僕を嵌めようとするからだろー！」

「証拠はあるのかい？」

「君の心だよ！」

「おお、なんかちよつと感動的なセリフだ」

「…はあ。ほんと、涙がちよびぎれそうだよ」

「ところで、さっきの『トレイスプレゼーチェ』っていうのは…?」

「え？ ああ、あれは『ボクが過去に体験した痛み』を他人に追体験させる技だよ。実際に怪我させるわけじゃないから、牽制に便利な『さ』」

「いや、そうじゃなくて技名の方。声に出さなきゃ技も出ないのかい？」

「へっ？ あ、いや……な、なんだよう！ 技にどんな名前を付けようが、ボクの勝手だろー！」

「…」

「なんなのさー！ 思春期特有の病気って…！ そつ、そういうレッテル貼りが個性を失わせるんだ！」

「…」

「納得しながら憐れむのはやめてよ！」

「…」

「だっ…！　ま、またエツチなこと考えてえ…！」

「…」

「えっ？　なに？　ボクが頭おかしい人になつてる…？　——はっ！」

僕の背中の上で、ブツブツと一人で喋っているヤバい奴…それが今のロゼを客観的に見た時の評価だ。彼女がバツと振り返ると、四人全員が一斉に目をそらした。意思疎通のできない、不気味な力を持った存在に対しては、大変に適当な行動と言えるだろう。

「はは、冗談だつて。ごめんねみんな、ロゼは僕の友達なんだ。こんな風に…：ちよつと頭のおかしいところもあるけど仲良くしてあげてよ」

「そんなひどい紹介つてある!？」

「っ—かお前、いつの間に連れ込んだんだ…？」

「そりゃあね、コタ君。良い男の傍には良い女が寄ってくるもの…」

ん？　…良い男の傍には、女が寄ってくるもんさ」

「わざわざ『良い』を外さなくてもいいじゃないか！」

「良い男には、都合の良い女が寄ってくるもんさ」

「だからって増やさないでほしいんだけど!？　…はあ…：流石に突っ込み疲れてきたよ…」

なんとも言えない表情でへたり込むロゼを見て、何かを察したようにため息をつくコタ君。とりあえず不法侵入者ではないことを理解してもらえたようで何よりだ。事後承諾になったことを謝罪すると、肩をすくめてニヒルな笑いを零された。様になつていて実にかっこいい。

朝食の用意が整っているそうで、汗を拭いてから居間へ来いとのことだ。シャツを脱いで上半身裸になり、濡れたタオルで体を清めると——ツバキが近付いてきて、僕の体をクンクンと嗅ぎ始めた。もしや匂いフェチなのだろうかと彼女の将来を心配し始めたところで、

なにやら訝しげな表情で問いかけられる。

「…なんで双樹から、ちよの匂いがするんだ？」

「え？ ああ…：桃千代の布団で寝てたから、匂いが付いちやったのかな」

「ぶっ——!?! おまつ、なっ…：どういことだよ！」

「いやほら、ロゼは僕の布団で寝てもらったからさ。僕にも寝る場所
は必要だろ？」

「だからってなんで私なんだよ！」

「だって、ミーナとツバキを畳に放り出すのは忍びないし…」

「私、追い出されてたのか!? 同衾どうきんよりひどい！」

「冗談冗談、ちゃんと僕の腕の中でスヤスヤ眠ってたさ」

「どっちだよ！」

「どっちがいいの？」

「どっ…! どっちって…：そりゃ…」

「よし、今だロゼ。読んでくれ」

「今までの人生で一番ゲスい頼みだよ…!」

ロゼは人の思考が漠然としたものだと言っていたが、それは正しくもあり、しかし全てを伝えてはいないと思う。思考に耽っている時や、問いに対する答えを用意する時、人は言葉には出さずとも脳内でけいしよう形象しているものだ。

特に、僕が桃千代に問いかけたような二者択一の問題であれば、明確な答えが心の中に映し出されていることだろう。さあ！ 早く教えるんだロゼ——ぐっふうう!!

「卑しい行為はダメだよ、双樹」

「いやらしい行為と言ってほしいな」

「もつとダメだろ!?!」

お腹を殴られるのは別にいいのだが、もし力加減を間違えられると、上半身と下半身が泣き別れるのは間違いないだろう。なるべく控えてほしいものだ。

とまあ、そんなこんなで食堂へ向かうと、立派な朝食が用意されていた。湯屋とは違って野菜も豊富に使われている。みんなできつち

り手を合わせた後、食事が始まった。『いただきます』は六百年先の異世界でも使われているようで、文化というものの根強さを感じられる。屋敷の格式に反して、作法に厳格というわけでもないようで、みんなで姦かしましくお喋りに興じる。テレビも何もないと、団欒だんらんの大切さがよくわかるものだ。

「…あ、そうだコタ君。なにかお手伝いできることとかある?」

「あん? なんだよ急に」

「お世話になってるのに何もしいってのはちよつとね。雑用でもなんでもやるぜ」

「…つってもなあ、力仕事は向いてねえだろうし…:…なんか特技とかあるか?」

「うーん…:…炊事、洗濯、お裁縫さいほうとかかな」

「オカンかお前は」

不思議パワーがある時点で、男女の能力差は無意味なものになると思うが——それでも家事は女性中心のようだ。となると、これは単純に『男は家事が下手くそ』という話に帰結するのもかもしれない。

「ま、そのへんは気にすんなよ。客人は客人らしくもてなされときな」

「うん、わかった。おかわりもらえる?」

「居候いせうこう三杯目はそつと出し」って知ってるか?」

「そつ…」

「口だけじゃねーか! …:…たく、ほらよ」

「ありがと。いやあ、上げ膳据え膳でなんだか申し訳ないね」

「全然申し訳なくなさそうなんだが」

「行動じゃなくて、言葉で示すのが大事なんだよ」

「逆だ、逆! 行動で示せ!」

「オカズが足りねえなあ、虎太郎」

「態度まで逆にすんじやねえよ!」

切れの良い突っ込みを入れつつも、お漬物をこちらに寄越してくるコタ君。オカンなのは彼の方ではなからうか。そしてお漬物の方はというと、丁度いい漬かり具合でご飯がすすむぜ。細かく刻んだ高菜の醤油漬けを白米に乗せ、お茶漬けで食事を締めくくる。

熱いお茶を啜りながらふと横を見ると、桃千代が満足そうな表情で畳に寝そべっていた。仰向けになるとぽっこりしたお腹がキュートで、つい触りたくなっちゃうな。胃下垂気味なのかな？ いや、単純に食べ過ぎなだけか……コタ君含め、今まで出会った人が全て大食いだったことを考えると、強さの代償として燃費が悪いのかもしれない。

…いや、違うか。あれだけの力を出しているのにこの程度の食事で済んでいるのだから、むしろ消費カロリーと摂取エネルギーの関係は、最効率を叩き出している筈だ。原種との格差がますます理解できず、悲しい限りである。

「桃千代たちはどうするんだい？」

「私たちは外でなんか狩ってくる。肉も食いたいしな」

「…大丈夫なの？ いくら強いついていても、子供だけであんな魔境に出るのは…」

「大丈夫だろ。ガキつつつても、十三支族の系譜だしな」

「ぎくつ」

「な、なんで？」

「着物に『猫柳』って刺繍してんじゃねーか」

「勝手に見るなよー！ 変態！」

「手入れしてやったんだつーの。袖口も掛衿も汚れ散らかして、着物が泣いてるぜ……悉皆屋としちゃ、そのままにしてらんねえな」

うーん……ツンデレもここに極まれり。洋服と違い、和服のお手入れは非常に面倒なのだ。そもそも頻繁に洗濯するようなものではないのだから、彼女たちのように動き回ったり、ましてや狩りに出るような人間が普段着にするものじゃないんだけど。

ただ素材が僕の知るどんなものとも違うようだから、手入れも実は簡単なかもしれない……しれないが、コタ君が気遣いのできる男という事実は変わらない。迷惑をかけられた相手に食事を施し、寝間着を貸し与え、着物の手入れまでしてあげる優しさよ。というかあの風貌で悉皆屋って意外すぎるな。

「ロゼはどうするっ？」

「ボクは……どうしようかな」

「やること無いんなら、ちよつと頼みたいことがあるんだけど」

「……！——ああ、なんでも言ってくれ！　と……友達の、頼みごとだからね……」

「ありがとう。じゃあまず、僕に服従を誓ってくれるかい？」

「友達じゃなくなってるんだけど!？」

「転移した辺りを調べてみたいんだけど、一人じゃ遠すぎてさ。そもそも辿り着く前に死んじゃうだろうし」

「護衛と、足代わりになつてほしいってことかい？　そのくらいならお安い御用さ」

拳で胸を叩き、任せろとでも言うように胸を張るロゼ。ちよくちよくと芝居がかつた動作をする姿は、見ていて少し恥ずかしくなってしまう。とはいえ外に出る以上、彼女が僕の生命線だ。機嫌を損ねないよう、お世辞の一つでも言っておこう。

「いやあ、ロゼは本当に頼もしいねえ」
「全部聞こえてるからね!？」

おっと、しまった。仕方ない、誤魔化すために妄想を膨らませよう。ロゼの着物は見たところ——桃千代たちのものよりも、更に謎の素材で出来ているようだ。フルたちと同じく、最先端の技術によつて作製された代物なんだろう。真つ白な出で立ちでありながら、染み一つ見当たらないのがその証拠だ。

そして着物と同様に、見えている部分の肌には傷一つない。潤いたつぷりのキメ細やかな白い肌は、シルクのような滑らかさを覚える。本来、着物とはスタイルの良さも悪さも引つくるめてわからなくしてしまうものだが、しかし彼女の立ち姿を見てしまえばそんな常識は霞んでしまう。

厚めの反越^{たん}しでもわかる均整の取れた肢体は、新雪のような美しさを魅せる着物ですら、引き立て役に成り下がる。顔立ちは日本美人を思わせるが、どこか欧州の血を感じる美麗さも伴っている。細く小さな手は、まるで白魚のようだ。

「あぐっ……や、やめ——うう……！　顔から火が出ちゃうよ……！」

しかし……なんというか、アレだな。わざわざ言ったりはしないよ
うだが、心を読めることを隠そうとはしないんだ。他の場所でも『追
い出された』と言うからには、ことさらに隠そうとはしなかったんだ
ろう。己を装いたくはないってことかな？ だったらおっぱいも隠
さずにいてほしいものだ。

「どういう結論?!」

しかしロゼがこのままの態度を貫くなら、遠からずコタ君たちも察
してしまおう。彼等の度量が低いなんて言いたくはないけれど、
そう簡単に受け入れられるような能力じゃないのも確かだ。最悪の
場合、僕の分のおっぱいを分ける可能性も視野に入れておこう。

「どんだけおっぱいに可能性感じてるの!?!」

とりあえずみんなが怖がっているから、独り言はやめてほしいもの
だ。たとえ怖いもの知らずの不良でも、壁に向かって話しかけている
人間には恐怖を覚えるものだ。客観的に見て、今のロゼはそんな感じ
である。

「う……」

「あー……その、なんだ。大丈夫か？ 色々と」

「ごめんね、コタ君。できれば優しく見守ってあげてよ」

「お、おう……」

「くっ……!」

「まあ、なんつーか……外に出るんなら気をつけろよ。命あつての物
種ってもんだ——過去だか未来だか知んねえけどよ、帰れねえってん
なら居着いちゃいいさ。住めば都って言うしな」

コタ君の優しさが身に沁みるぜ。しかし帰還を諦めるつもりは毛
頭ない。家族も友人も愛猫も、とても大切な宝物だ。簡単に諦められ
るほど安いものじゃない。ま、悪縁契り深しとも言おうし、それを信じ
るならば、元の世界との縁はきつと続いている。

切っても切れない「絆」ってやつが、僕にはある。最近では前向き
なイメージが強いが、「絆」とは元来、呪縛や束縛といった意味合い
が強い言葉だ。それに苦しめられたこともあるし、感謝したこともあるが——
なんにしても大切なことには変わりはない。

兎にも角にも、帰還のためには心当たりを片っ端から調査していくしかないのだ。フルたちが帰ってきてからの予定ではあったが、ロゼが彼女たちと同じくらい強いというなら、前倒しで進めてしまってもいいだろう。

余りご飯でおにぎりを作ってもらい、竹の水筒を頂いて外へ向かう——そこでふと気付いたのだが、ロゼの荷物はいったどこにあるんだろう。まさか手ぶらでここまで来たわけでもないだろうし。コタ君に見送ってもらいながらそんなことを考えていると、思考を読まれたのかすぐに答えが返ってきた。

「——もちろん手ぶらだよ。この服は形状記憶繊維だし、汚れも自動で落ちるからね。他に要るものなんて……ふふっ、希望と情熱くらいさ」

「うわあ……」

「な、なな、なんだよ『うわあ』って!」

「いや、うん……大切だよね、希望と情熱。わざわざ口にするのは憚はばかられるけど」

「むう……」

「にしても、だよ。着るものよりもさ、食糧事情の方が重要じゃない？
現地調達だけじゃいくらなんでも……」

「ああ、それは——必要ないから大丈夫なんだ。ボクたちの種族は、食事の必要がほとんどないし」

「…マジ?」

「マジもマジや」

「でもさつき食べてなかった?」

「食べられないわけじゃないけど、食べなくても生きていけるんだよ。正確に言うなら、エネルギーの補給は『ウイス・ウィーウア』に依存してる」

「ウイス……?」

「昨日説明を受けてただろ? 世界中に漂ってるエネルギーの総称だよ。場所によって結構呼び方も変わってくるけどね」

…なんともはや、人間をやめかけていないだろうかそれは。世界中

に漂っているエネルギーが生命の源だと言うならば、エコロジーなんでもんじゃない。もつとも世界に優しい生物とすら言えるだろう。

「…そうさ。まるで世界がそうあれと望んでるように…新しい異世界を発見する度に、人は変わっていく。人という種族が進化していく度に、どこか人間性を失っていくんだ。そして行き着く先は、遺伝子の記憶集合体…完全なる一本の系統樹が成った時、人類は——」
「うわあ、うわあ…」

「二回も言った！」

「そういう小難しい話は、学者さんとかに頼むよ。僕は壮大なストーリーより、小さな日常の話が好きなんだ」

「むむ…男の子なんだからさ、もつと夢見ようよ」

「平凡な日常にだって、ドラマは潜んでるもんさ」

「…ふふ、今の君が言うと言得力あるね」

街の外に出ると、文字通りおんぶに抱っこで『最初の場所』へと運んでもらった。巨大樹というわかりやすい目印があつてよかった。加えて、ロゼは心を読めるから僕の体調もお見通しなのだ。酔つて吐き気をもよおす前に速度を緩めてくれたりと、至れり尽くせりである。

「うーん…何もないか。ロゼはなにか感じない？」

「ううん、特には」

「…そっか。無駄足だったかなあ…」

「…」

どうしたものか。というかここがダメなら、他に当てがなさすぎて困るんだけど。目を凝らして辺りを見回すが、やはりおかしいところはない。魔法陣とか祭壇とかあればわかりやすいのに、現実是非情である。難しい顔で考え込んでいると、ロゼが少し固い笑顔で僕の手を掴んできた。

「…そんなに気落ちしないで。ちよつとこの辺りを『読んで』みるから」

「…どづいうことっ」

「——記憶は魂に宿り、ウイス・ウィーウアがそれを保存し、投影する。

ボクたち「イニマ」はそれを読み取るだけに過ぎない……濃い血を受け継いで、強い能力を発現させたイニマは、空間の記憶すら読み取れるのさ」

「へえ……」

「…」

「じゃあやつぱり——『そう簡単に過去の記憶は読めない』ってのは、嘘だったんだ。空間の記憶が読めて、人の記憶が読めないってことはないよね」

「…っ……正確には……読もうとしなければ読めない、だね。表層の意識は、ボクの意志に関わらず流れ込んでくるから」

「なるほど」

「…嘘ついて、ごめん」

「うん、もう君とはやっていけない。さよならだ」

「えええっ!? こっつ、こういう時は笑って許してくれるもんだろ!」

「ふう……いいかい? ロゼ。いま君は、困ってる僕に手を差し伸べてくれた。たとえそれが元で、僕が君の嘘を暴くだろうと察していても、だ」

「う、うん——それでもボクは、双樹のためならっ……」

「あざとい」

「ひゅいっ!?!」

「僕におためごかしは通用しないぜ。あたかも僕への献身に見せかけた君の行動は、実のところ——挺身ていしんを装っただけの、好意のおねだりに過ぎない。『笑って許してくれるもんだろ?』なんて言葉が、その証拠さ」

「うぐっ……」

「浅ましい。卑しい。最初っから見返りを期待してる。そんな助平根性丸出しの善意に——僕が絆ほどされるとでも思ったのかい?」

「すごく感謝してくれてるけど!?!」

「くっ……やつぱり厄介な能力だ」

ある程度、僕のことを理解はしたんだろうけど——それでも拒絶する可能性はゼロじゃなかったんだから、能力を披露するにあたっての

リスクはあった。そのリスクと可能性の差し引きが僕への信頼だと言うならば、全力で応えたいところだ。

「そういえば……ロゼはこの先、どうするつもりなんだい？ 外に憧れて出てきたって言ってたけど、ずっと当てもなく冒険するするつもりなのかな」

「ん……冒険したいとは思ってたけど、ボクがここにいるのは『ある男』を追ってきたからさ。自分の意志とは、少し違うんだ」

「へえ……その割には急いでるようには見えないけど」

「ああ、もう大丈夫。ボクが追わなくても解決するだろうし」

「…」

「…っ！ だ、だからあ！ 別に意味深に言ってるわけじゃないんだって！」

「…」

「うう……つまりね？ わかりやすく説明するなら、僕は犯罪者を追ってここまで来たんだよ。特級の『シン』……あ、シンってわかる？ そうそう、それぞれ。この街で流行ってるっていう狂方病も、たぶんそいつが病原菌をばら撒いたんじゃないかな。浮葉だけしかない状況で、自然に発生するようなものじゃないしね」

わざわざ未開の地にまできて細菌をばら撒くって、どんな人間なんだろう。頭の具合が異次元すぎて、理解したくもない。そしていったい、どこが大丈夫なんだろうか。ほっておけばさらなる被害が出そうな気がするけど。

『ルミナス』の三人もいるし……他にも……こっちはすごく意外だったけど——いや、確定はしてないか……でも限りなく正解に近い……だとすると大発見——」

「…」

「——はっ！ い、いまのは違っ……違うからね！」

「いや……ほら、創作物とかならよくあることだけだし。実際に誰かを目の前にしながら思考に沈んで、ぶつぶつ独り言を呟くなんて人間は——中々いないぜ。ちよっと尊敬」

「ううう……！ ほんとに尊敬してるのが腹立つう……！」

会話してるのに、いきなり黙り込んで考え込む人間に出会ったことはあるだろうか？ 僕はない。なにかを考えたり思い出したりするにしても、一言なりジェスチャーなりはあるだろう。いったいどんな交友関係をしてきたんだ——あつ…

「憐れむなあ！」

「まあそれはそれとしてだよ。こんなとこまで来た理由が消滅したんなら、なおさらどうするつもりなんだい？ 悪いけど、僕は自分の世界へ帰るのを諦めるつもりはないよ」

「…着いてく」

「それは——正直、正気を疑うけど。出会って一日も経ってない男に、何もかも捨てて着いてくるってのかい？」

「至って正気だよ。家族との別れなんて、外へ出るって決めた時に済ませてる。だって、ボクが欲しいものは、一番欲しいものは——」

「…そりゃまあ、友情は大切だと思うけど…あんまり固執するのはよくないぜ。今の君はさ、飢え死にしそうな時におにぎりを見つけたようなもんさ。ごちそうには程遠いけど、今が“足りてない”から、元々の価値以上に良く見えるっただけだよ。いつかきつとありふれるものに、人生までかける必要はないと思う」

「…“いつかきつと”…それは必ずくる未来なのかい？」

「ワンチャンあるって」

「軽い！——というか！ チャンスが一つなら！ 今がそれだよ！——」

「うーん…まあ…最後に決断するのは自分だもんな。後悔しないなら、好きなようにすればいいんじゃない？ 口出しする義理はあっても、否定する権利はないしね…君が着いてくるって言うなら、僕は僕なりに、君が後悔しないよう尽力するよ」

「う、うん…！」

「ベッドが狭くなるのも我慢するさ」

「ベッドの一つくらいは用意してほしいんだけど」

「え？ うーん…ダブルベッド、部屋に入るかな…？」

「なんで同衾前提なの!？」

「選べる」のなら。それは幸福以外のなにものでもない。選択肢すら与えられない人間など、世の中に掃いて捨てるほどいるものだ。そんな中で、自分自身の行く末を選ぶことができるのなら、たとえ何がどうなっても責任は自身が負うべきである。だからこそ、僕がロゼに言うべきことは、もう何一つとしてない。

「さて、と……じゃあ気を取り直して、始めるよ。何時間前くらい前かはわかる？」

「んー……最後にスマホ確認してから……一回気絶してるんだよな。丸一日は経ってないと思うけど……」

「了解。じゃあ二十四時間前から、ぎつと読んでみるよ」

そう言うと、ロゼは少しのあいだ眼を閉じて——次にその瞳が開いた時には、りんこう燐光を伴った蒼碧そうへきの目を輝かせていた。ゾツとするほど美しく、淡く、そして儂く臃氣めいめつに明滅している。今ならおっぱいを触っても気付かないのではないかと思ひ至り、そつと手を伸ばしたら……パシンと叩かれてしまった。実に残念だ。

フオックスフェイス・フラテーション

「イニマ」という種族は心を読む——そして解放者の血が濃ければ記憶すら読み取ると、ロゼはそう言った。しかし脳の処理速度は原種と大して変わりないとも口にしていた。とすると、記憶の読み取りとはいったいどのようなに行われるのだろうか。彼女の口ぶりからすると、大した時間はかからないように思えるけど。

「…記憶の閲覧は…魂の接触…それは時と空間の概念が変わる…多次元のコンタクト…」

「ふうん…? 『空間の記憶』を読み取って言ってたっけ。さっきの解釈で言うなら、生物だけじゃなくてあらゆる物質に『魂』があるってことになるけど」

「うん…でも…双樹が思ってる『魂』とは…少し違う。幽霊だとか…霊体だとか…オカルトなものじゃ…ない」

「気が散るなら黙っとこうか?」

「うん…その方が…助かるかな…」

「それで、何か掴めたかい?」

「黙るんじやなかったの!?!」

うーん、ぼんやり蒼く光るロゼの瞳は本当に綺麗だ。白人の中でも『金髪碧眼がステータス』なんて風潮が、一部にはあるらしいけど…少し納得である。まあ蒼に発光しているのと碧眼では、根本的に違うかもだけど。

「…ふう…終わったよ、双樹」

「ありがと、お疲れ様。それで…どうだった?」

「うん…なんだかこの辺り、色々とおかしなことになってるみたいだ。普段はこんなに時間がかかるものじゃないんだけど、かなりかかっちゃったし」

「おかしなこと?」

「空間がバラバラになってる——って言えばいいのかな? 一度バラけて、適当にくっついたような感じというか…『ルミナス』の三人も巻き込まれてるし」

「へえ…？ そうだったんだ」

「君がフル・フリットに初めて会った時、仲間とはぐれてただろ？ あんな化け物連中がそんな状況に追い込まれるなんて、ちよつとやそつとじゃあり得ない事態だよ。たぶん空間の相転移に巻き込まれたんだらうね」

なんだ空間の相転移って。どこまで不思議な現象があれば気が済むんだ、この世界は。しかし空間が無茶苦茶に入れ替わるということは、変な巻き込まれ方をすると体がねじ切れたりするのだろうか。恐ろしい限りである。

「そんなことないさ。『物質』っていうのは、君が想像してる以上に力があるものなんだ。空間が入れ替わる境目に密度の高い物質があれば、弾かれるのは『現象』の方だよ」

「ふーん…：…なんかさ、ロゼも学者みたいなところあるよね」

「それは——情報を得られる手段が、人より多いからね。特にさつきみたいなやり方だと、時間効率もすごく良いし」

なるほどなるほど…：…それにしても『相転移』か。僕がこの世界にきたのも、それが原因だろうか。もしそうなら、気になるのは自然現象なのか人為的なものなのかという点だ。後者であれば、業腹ではあるものの、帰還の手段は明確なだけ——問題は前者だった時だ。

それが偶然だとするならば、宝くじの一等に当たるよりも薄い確率に違いない。となれば、再度それを期待するのは無茶というものだ。

「…自然現象じゃないと思うよ。なんだか妙な意志を感じたし…：…悪意じゃなさそうだったけど」

「そんなのまでわかっちゃうんだ？」

「漠然と、だけどね。普通の人間だって、近くににいる人がピリピリしているとなんとなくわかるだろ？」

確かに。しかし…：…なんというか、ロゼに着いてきてもらってよかった。彼女と一緒にやなければ、これほど情報を得られることもなかっただらう。僕の中のロゼ株が上昇しすぎて、ストップ高である。

「うえへっ…：…そ、そう？ それならボクも嬉しいよ」

「うんうん。笑い方がちよつと気持ち悪かったけど、すごく感謝して

るよ」

「ひどい！」

「こんな状況だし、なんのお礼もできないのが心苦しいけど……」

「そんなのいいさ。ボクたち……とっ、友達だもん」

「あ、よかつたら体で払おうか？」

『『友達』だつて言ってるだろ!』

「うーん……果たして男女間の友情とは、一切の性欲なく成立するものなのか……」

「するさ。男と女だからって、常に性愛が介在するとは限らない。双樹はお母さんとかお姉ちゃんに興奮したりするのかい？」

『『義理の』がつけば、一大ジャンルだぜ』

「つけなくていいから。だいたい創作じゃあるまいし、現実で義理の家族に手を出す人なんてまずいないからね？」

『でも『義を見てせざるは勇なきなり』って言うし……』

「違う意味になってるよ！ そんなイヤらしい勇気いらないから！」

さて、これ以上の情報はないとのことだし……とりあえず街へ戻るとしよう。この状況が人為的なものだとするなら、実行者は確実に存在することになる。問題はそれが故意なのか、それとも何かの事故かという点だ。故意なら故意で、僕を狙い撃ちしたのか、誰でもよかつたのかという部分も気になる。

——後ろ髪を引かれつつも、僕はその場を後にした。

ロゼに抱えられながら街へ戻ると、何やら見覚えのある巨体が街の外に鎮座していた。爬虫類のような見た目といい、へこんだ頭といい、おそろくはフルが殴り倒したドラゴンのようなアレだろう。結構な人数で解体作業が進められており、凄まじい勢いでバラバラになっている。一人一人が重機並の働きをすればこそ、あの速度を可能とするんだろう。

気になるのは、血液がほとんど出ていないこと——そして腐敗臭がまったくしないことだろうか。気温は春先くらいの温度が保たれているが、丸一日死骸が放置されていたとするならば、少なからず腐敗は進んでいる筈だ。

「——ああ、あれは半分ぐらい植物みたいなものだからさ。野菜や果物と一緒に、そんなすぐには傷まないよ」

「どこをどう見たら植物なんだ…」

「普段は地中で、植物の株みたいに丸まってるんだよ。土壌が特殊なのは聞いているだろう？ あんな巨体でも陸上で生息できるのは、それだけ地中に流れるエネルギーが豊富って証明さ」

「ならさ、なんでわざわざ地上の獲物を狙うんだい？」

「さあ？ ボクは生物学者じゃないし、そもそも異世界の生物は謎だらけだもん。宇宙や深海よりも解明が進んでないって言われてるよ」
ううむ…：まあ僕が考えても詮無いことではあるし、気にしないでおくのが一番か。クジラの解体とかもこんな感じなのかな、と眺めていると——僕の姿に気付いたツバキが、テテつと駆け寄ってきた。

「双樹！ 大物だぞ！」

「みたいだね…：…これ、三人で運んだのかい？」

「おう、なんか死んでたから持ってきた！ 儲けもんだな！」

三人で…：シロナガスクジラ並の巨体を運べるのか。二、三百トンくらいはありそうだが、凄まじい膂力である。というか彼女たちですら恐れるフル一行って、いったいどんな領域にいるか想像もつかないんだだけ。

もしかして僕、かなり分をわきまえてない感じなのだろうか。王様

に馴れ馴れしく話しかける一般市民みたいな立ち位置だったとしたら……したら……うん、別にどうもこうもないな。時代は四民平等である。

「こんだけの量だと、やっぱり一財産なのかい？」

「そーだなー……百万円くらいいくかもな！」

ほうほう……ん？ 可食部位が……かなり少なく見積もって五十トンくらいだとして……キロ二十円？ 百グラム二円って、もはや価格破壊ってレベルじゃないぞ。貨幣そのものは違うけど、単位は僕の常識と大差ないって昨日確認できたから、『百万円』は僕が考える百万円とおおよそ同じだ。

「食料の価値だけはね、双樹。君の常識よりは極端に低いと思うよ……ダストパイルで食うに困るなんてことはありえないからね」

「ああ、なるほど……でもそれだと、持ち込まれた種が貴重っておかしい——あ、作物じゃないのか」

「作物もあるけど、基本的には利便性を高めるものが好まれるのさ。衣食住全てに植物が密接に関わってくるってのは、今も昔も同じだよ」

となると、相対的に衣服やらなんやらの方が高い価値を持つわけだ。悉皆屋のコタクくんがお屋敷を構えていたのは、そういう事情もあるのかもしれない。ハテナ顔で小首をかしげているツバキの頭をくしゃりと撫で、ミーナの方へ向かう。なにやら狐耳を生やした男性と交渉しており、どうやら頭脳担当は彼女ということらしい。

男性の方は百八十センチと少しといったところだろうか。僕よりも少し高く、小顔で糸目の金髪だ。大ボスの側近とか、後々に裏切りそうな仲間とかにいそうなタイプである。良い人そうに見えて腹黒い……けどやっぱり実は良い人って言われるとしっくりくる。

「ほんならまあ、これでどやろか」

「ん……わかつた」

煙管を一吸いした後、巾着からごそごそと硬貨を取り出す男性。それをミーナに渡し、こちらに視線を向けると——彼の片目が少しだけ見開いた。逆さにした煙管からポンポンと灰を落とし、値踏みするよ

うな胡散臭い笑みで話しかけてくる。

「ここらで浮葉以外見んのは久しぶりやなあ……お二人さん、どちらから?」

「消防署の方から来ました」

「なんでやねん! ……つてやめやめ、いきなりご挨拶やなあ。また古臭いネタ持ってきたよってからに……」

「むしろ通じたことにびつくりさ」

「この銀狐ぎんこさんはなあ、古今東西おもしろいネタは網羅しとるんや」

「へえ……じゃあなにか面白いこと言つてよ」

「——関西人と見ればそのセリフよ。『面白いこと言つてよ』言われで、面白いこと言える人間がなんぼほどおるかちゅう話やで」

「そう? ……じゃあ僕が言うよ」

「なんで!」

「この前、全身真っ白な犬を見かけてさ。それで——」

「尾オモシロも白かった、とか言わんといてや?」

「……そんな程度の低い冗談を言うように見えるかい?」

「なはは、ちやうかつたか。すまんすまん、続けてや」

「まったく……そう、それで——その犬、なんと尾も白かったのさ!

あつははは——」

「まんまやんけ!」

「ということで、僕は沙羅双樹。よろしく」

「ええ……? ううん………けつたいな兄さんやなあ。俺は『黄泉国銀狐』よもつくにぎんこ

や、よろしゅうに」

「わお、今にも死んじやいそうな名前だね」

「自分も大概やん。そのうち解脱げだつでもするんちやう?」

「——今のは………侮辱と受け取るぜ」

「沸点おかしい!」

釈然としない表情で顎をさするギンコ。しかし関西人やらなんやらと言うあたり、どう考えてもここで生まれ育ったとは思えないのだが——彼もワールド・ワイド・ウォーカーズということなのだろうか。それにしても随分馴染んでいるような気もするけど。

「関西人ってことは、ギンコは外から来たのかい？」

「ん？ ああ、そやで。ちよいつと旧世界で悪さしすぎたらなあ、追い出されてしもて。『ピリカ・カムイ』って知つとる？　そこで叔父貴が隊長やつとるんやけどなあ、尻尾ひつつかまれて無理やり連れてこられたんや」

「ピリカ……ああ、ド○ミちゃんの呪文かなにかだっけ」

「なんやそれ」

「——ピリカ・カムイは国営の調査団の一つだよ、双樹。ワールド・ワイド・ウォーカーズは民営の営利団体でね、目的は様々だけど……調査団の方は、人類の発展を目的として異世界を探索するのさ」

「へえ……聞いた感じ、好きなことだけして生きていけるような世界だと思つてたけど……国営の方に所属してなにかメリットでもあるのかい？」

「そらオオアリやで。『母集団に利益を運ぶ自分』が好きなんや、あいつらは」

「ふうん……？」

「色んな人間がおるつちゆうことや。おつきい集団に帰属するんが好きで、せつせと母体に餌を運び込む……銀狐さんから言わせてもらうとなあ、ああいうやつらこそ本能だけで生きとるんやわ」

「んー……どういうこと？」

「昔っから人は集団で生きてきたやろ？　それがいまだに細胞に染み付いとるつちゆうか……『駒』やら『歯車』であることが安心に繋がる輩は、一定数おるもんや。奴隷の幸福が好きなんやろなあ」

「ふむふむ……それで調査中に、桁外れに大きい街を発見したのを良いことに、君は逃げ出したってわけかな？」

「おお、よおわかつとるやん。他人のために生きたいんならなあ、それはそれでえええけど、人に強要するもんちやうわな。幸い——つて姉ちゃん目え怖っ！　なんやのん？　それ」

「……ロゼ？」

なにやら驚いているギンコにつられて、僕も後ろを振り向く。するとそこには、瞳を蒼く発光させているロゼが、鋭くギンコを見据えて

いた。しかしそれも僅か数瞬といった程度で、すぐに元の彼女へと戻る。行動の意味を考えれば、彼女がギンコの記憶を読み取ったということなのだろうが——ロゼにとつて、それは不誠実な行為だと認識していたように思う。だってのに、いったいどうしたと言うんだろう。

「——少し、ね。危ない人間を双樹には近付けたくないから」

「うん？ 『追い出された』言うたかて、そんな大層なもんちゃうがな。彼氏の心配すんのもええけど、構いすぎると逃げるんが男っちゅうもんやで、姉ちゃん」

「…そうだね。とりあえずは大丈夫かな」

「…？ なんのこっちゃか」

…悪人の可能性があったから、記憶を覗いたのだろうか。抱いていた印象からすれば、少し意外と言うのが本音である。ついでに言うのと、『彼氏』という言葉を否定しなかったのも意外である。これも、好きにしているよというサインと受け取っていいのだろうか。

「よくないよー！」

「は…？ え、なんやの？ 急に」

「ああ、ごめんね。彼女、たまに情緒不安定になるんだ」

「そら大変やなあ…ま、女心と秋の空っちゅうしな。ワガママ聞くんも甲斐性のうちやで」

「くうっ…」

ぐぬぬと唇を噛みしめるロゼ。僕としても、こう何度も『頭のおかしい人』扱いをして申し訳ないとは思うのだが、いかんせん、いきなり独り言を叫びだす人物の説明などそれ以外にないのだ。『彼女は心が読めるんです』と僕が言っても、ロゼは別に気にしないだろうが、色々と面倒になるのは確かだし。

「ところでさ、ギンコはお肉屋さんなの？」

「アホ言いなや。ただの肉屋がこんな量の肉さばける訳ないやろ？

この銀狐さんはなあ、香炭^{こうたん}周辺の流通を取り仕切つとるんよ。こう見えて、中央にも割と顔利かせられるんやでー」

「へえ…じゃあ情報通つてこと？」

「モチのロンや。旧世界みたいにネットワークが発達しとるより、こ

こみたいに原始的な方が情報の価値はお高いんやで？ …まあ叔父貴が戻ってきた時、ちゃっちゃと逃げ出せるように綱張つとるだけやけどな」

「じゃあ色々聞きたいことがあるんだけど……いいかな？」

「そりや兄さん、見返り次第や。さつきも言うたやろ？ 情報つてのはお高いんや」

「僕と君の仲じゃないか」

「初対面やんけ」

「まずは僕の事情を話すから、その後——」

「聞いとる!？」

「——無一文の僕から何を取ろうって言うんだ！」

「無一文でなんかくれつちゅうのがおかしいやろ!？」

「確かに。じゃあ情報交換なんてどうかな？ 情報のお礼には情報で……って感じでさ」

「おお、それならええで。まあ価値のある情報かどうかは、こつちで判断させてもらうけど」

「僕の恋愛遍歴なんかどうかな？」

「いらんわい！」

ううむ……情報交換とは言っても、彼が知りたそうな情報など持ち合わせていない。どうしたものだろうかと思案していると、横で話を聞いていたミーナがくいくいと袖を引っ張ってきた。どうやら代わりには払おうかと気を遣ってくれたらしい。

「んー……ありがと、でも気持ちだけ貰つとくよ。返す当てもないしね」

「べつにいいのよ？ どっちみちすぐに使っちゃうもの」

「すぐって……百万くらいあるんだろ？ 何に使うのさ」

「花札」

「丁半博打！」

「麻雀！」

「うわっ!? 桃千代、いつのまに……というか、どんだけ博打好きなんだ……」

「宵越しの銭は持たない主義だ！」

「なんて不健全なんだ……」

うーん……すぐに消えてしまうとはいえ、やはりそれは彼女たちのお金なわけで。手段がわかればさっさと帰る都合上、お金の貸し借りはなるべく避けたいよね。ミーナたちが気にしなさそうだからこそ、こちらが気を使わないと、不義理を重ねてしまいそうさ。

「うーん……」

「……なんならいま嬢ちゃんたちが言うた——博打で決めてもええで？」

「と言っても、種銭がないしね」

「ええねんええねん、鉄砲すかんびんで打つアホもそこら中におるしな。そうと決まったら——ひよわっ!!」

ギンコと——ついでにミーナたちも、毛を逆立てて僕の後ろを見つめている。振り返ってみても、そこには微笑む口ゼの姿があるだけだ。ふーむ……？ 察するに、これは湯屋でフルが怒った時と同じなんだろう。僕が原種だからエネルギーを認識できないだけで、わかる人間にはわかるヤベエ状態なのかもしれない。

「……なら麻雀にしようか。それならボクも参加できるし」

「あ、ああ……それはええけど……」

ううん……ギンコがなにか良からぬことを企んでいたのだろうか。僕も人を見る目はあるつもりだし、彼からはそんなに嫌な感じはしなかったけど……まあ口ゼが介助してくれるというなら、悪いようにはならないだろう。なんせ全員の考えが透けて見えるんだし。

冷や汗を流すギンコに案内され、ゾロゾロと道を歩く。そして僕はそつと速度を緩め、桃千代の手を取りつつ耳元に口を寄せた。

（……っ!? なな、なんだよ……）

（桃千代はさ、結構打てるほう?）

（そりゃあ……まあ、そこそこな）

（そっか——ちよつとお願いがあるんだけど、いいかな?）

（……? 別にいいけど……）

（よし、じゃあルールを教えてください）

「今から!？」

「しっ! 声が大きいぜ」

「なんで勝負受けたんだお前……」

「いやだって、答える前にロゼが……」

ちらりと前を見ると、ギンコの冷や汗がロゼにも伝染していた。なんかもう筒抜けみたいだし、普通に教えてもらうか———と思っただけど、ヒソヒソと耳元に当たる桃千代の吐息が、くすぐったくも心地良いのでそのままにした。ついでにそつと腰に手を回すと、脇腹にコークスクリューを食らった……が、胴体が泣き別れにならなかつたあたり、手加減はしてくれたのだろう。麻雀の役を脳内に刻みつつ、どこまで許してくれるのかをドキドキしながら試す。

猫耳はセーフ。肩もセーフ。尻尾はゲフウツ!

「く、癖になりそう……」

「なにやっとなんねん……ほれ、着いたで。ここが香炭鉄火場———ジギタリス〴〵や」

そう言ったギンコの目の前には、まるで竜宮城のような異色の建物があった。横の桃千代に目をやると、なにやら目を輝かせている。とつかツバキもミーナもなんかウズウズしてるし……彼女たちが金欠だったのもわかると思うものだ。

さてさて、鬼が出るか蛇が出るか———あ、麻雀が出るのか。ガクリと肩を落としたロゼに続き、僕たちは建物に足を踏み入れた。

ジニア・レゾナンス

綺麗な白い牌に上手く掘られた様々な模様……この独特な質感は、素材が竜の骨だからという事らしいが、さもありなん。今まで触れたどんなものよりも固く滑らかな質感は、竜のような不可思議生物の骨だと言われた方がしっくりくる。ギャンブルの道具でしかないと言うのに、まるで芸術品だ。一つくらい持って帰ってもバレないかな？

「ロン」

「おつ……ほおお……嘘やろ……？」

勝負の最中だというのに、ここまで暢気のんきでいられるのは、勿論ロゼのおかげである。というか四人で遊ぶゲームだと言うのに、僕は完全に蚊帳の外だ。よく判らないままに牌を切っていくだけの、ツモ切りマシンと化している。時折ロゼが切つてはいけない牌を教えてくれるので、その指示に従っていけば危険もない。

「そろそろ諦めたら？　ギンコ。引き際って大事だと思うぜ」

「そやなあ……姉ちゃん、サマの仕掛け教えてくれたら高値付けるけど、どやろか」

「遠慮しておくよ」

「イケズやなあ——つたく、降参や降参。ほんで？　何が聞きたいんや兄ちゃん」

花札、丁半博打、麻雀、その他幾つかのギャンブルを提供しているこの館——『ジギタリス』。何が面白いって、イカサマが容認されているところだろう。もちろん仕掛けがバレればペナルティはあるが、見抜かれない限りは『見抜けない方が間抜け』とされるのだ。

まあロゼのはイカサマ以前の問題だし、早々に看破できる類のものではないだろう。『してやられた』と苦笑気味に顎をさするギンコも、腹を立てている訳じゃなさそうだ。

情報料にしては充分すぎる負け額に達したらしく、お手上げとばかりに僕へ質問を促した。ちなみに四人目の面子だった狸のおじさんは、ただただロゼの被害を受けて去っていった。なんだか申し訳ない。

「んー……『聞きたいこと』って言われると、ちよつと漠然としちゃうんだよね。とりあえず僕の状況をそのまま話すから、何か関連付けられる事とかあつたら教えてくれる？」

「ほおん……？」

興味津々といった風に、身を乗り出したギンコ。うーん……僕が見知った人間に限るが、この世界の外から来た人間は、なんとも好奇心旺盛だ。彼も無理やり連れてこられたという割には、既知ではない物事に興味を覚えるタチらしい。

そんな彼に、僕の身に起きたことをかいつまんで話す。煙管を咥えながら、フンフンと頷いて耳を傾けるギンコは——うん、男にこのよな形容詞は使いたくないが、妙に可愛らしい。狐つて、猫のニャンコ感と犬のワンコ感を良いとこどりしたような魅力があるよね。

「ふんふん……なるほどなあ。時間移動か、平行世界か、新しい異世界か……」

「新しい異世界？——あ……そっか、そういう可能性もあるのか」なるほど。色んな異世界があるというなら、似たような歴史を辿った世界も無いとは言えないか。僕のいた世界が『この世界と似ているだけの異世界』という可能性もある……うん、やはり他人の協力は仰いでおくものだ。この推測が役立つかどうかはともかく、あらゆる可能性は考えておくべきだろう。

……しかし誰に話してもぜんぜん僕を疑わないよな。僕自身が誰かにこんなことを言われたら、そう簡単に信じることは難しいと思うけど。

「ふーむ……流石になあ、そんなんに関連する情報言われてもちよつと……」

「別に核心とか元凶の情報は期待してないさ。最近、何か変わったこととかあれば聞きたいなって」

「それやったら——やっぱ『人の入り』やるなあ。ルミナスの三人に、兄ちゃんやる？ それとその嬢ちゃん……ほんで少し前に奇杏の男や。外から人が来ること自体早々あらへんし、変わったこと言うたら変わったことやで」

「へえ……僕らの前にも来た人いたんだね」

「…たぶん、ボクが追つてたシンのことだろうね」

ロゼが少し剣呑な雰囲気を出して、目を細めた。そう言えば彼女が追っていた人間については深く聞かなかったが、種族としてはラリカと同じだったようだ。そしてロゼの言葉にピクリと反応したギンコが、またもや興味深げに詳細を聞いてくる。情報屋というよりは、詮索好きのおばちゃんみたい。

「いくらシンちゆうたかて、こんなところまで逃げてくるとか相当やで？　——もちろん追いかけてくる方もなあ。なんぞ因縁でもあるん？」

「別にそんなのじゃないよ。ただ、特級のシンを野放しにするのはマズいだろう？　…特に『ヴァイラス』ともなると、放っておけない」

「ほおん……ん？　ヴァイラスってあの？」

「その」

「ヤバない？」

「ルミナスの三人が、ワクチンを持って中央に向かっている」

「いや——んん……まあ……いや……」

難しい顔をしながら、ううんと唸っているギンコ。ヴァイラスさんとはそんなに危険な人物なのだろうか？　特級のシンはヤバいとラリカも言っていたが、何がどうヤバいのか気になるところである。そんなことを考えながらチラツとロゼに視線を移すと、その意を汲んでくれたのか説明をし始めた。

「特級のシンはね、思想や考え方は一級のシンと同程度なんだ……と言うより、最も危険思想のレベルが高い人間を『一級』と定めてるっと言った方がいいかな？」

「ふうん……？　なら一級と特級はどういう線引きなの？」

「『強さ』だね。解放者の血族とか、偶に現れる天才とか——そんなのが一級の危険思想を持った場合、特級と定められるんだよ」

「なるほどねえ……じゃあヴァイラスって人は、フルたちでも手こずるかもってこと？」

「それはないね。格が違う」

うん…？ ああ、『もう追わなくて大丈夫』ってのはそういうことか。どれだけ危ないシンだろうと、フルたちには敵わない——故に、三人が事態の解決に向かった時点で収束は間違いないと。

「——それは違うよ、双樹。この街…いや、もう国って言ってもいい規模か。この国だから大丈夫なんだ。そうだろう？ おじさん」

「まだ二十六やねんけど…ま、でも姉ちゃんの言う通りやな」
「どゆこと？」

「前に言っただろ？ 浮葉には解放者の血筋が居ないって。だから浮葉という種族において、突出した強者はフル・フリットだけだった。僕もここへ来て驚いたんだけどね——いくら浮葉とはいえ、強さの平均値が異常だよこの国」

「…？ …結論から言ってくれた方が嬉しいかな」

「つまりや。ここはいつちゃん最初の『解放者』が興おこした街つちゆうことやな。他の解放者…『ルーカス・ルミナリア』、『賓登枢くるとくると』、『ネルヴァ・ミエテロンカ』…この辺は教科書にも載つとるくらい有名なんやけど、浮葉の解放者はずっと謎やってん」

「…それが結論なの？」

「へっ？ あ、いや…」

「僕にもわかるように、結論から言えつつただらろ？」

「す、すまん……つてなんで謝らなアカンのじやい！」

「説明され役狂言回しも楽じゃないんだぜ」

「ほんまに理解してないんか!？」

「とにかく、馬鹿でもわかるような感じに訳してよ」

「…この街、ツヨイ人いっぱい。ヴァイラスよりツヨイ人いっぱい。ダカラ安心」

「言語障害？」

「解りやすく言うたつたんやろが！」

「ヴァイラスはね、双樹。奇杏の中でただ一人『ウイルス』を生み出せる人間なんだ。どんな天才だって……それこそあの『ラリカ・クルトクルン』だって、有機的に変化させられるのは『単細胞』——つまり『細菌』までが限度なのに。彼は直接的な戦闘能力こそ高くないけど、

その特異さをもって特級のシンに指定されてるんだよ」

「はあ……こんな未開の地に、どうやってウイルスなんて持ち込んだのかと思っただけ、そういう事だったのか。つまりこの街は解放者の血筋、そして直系が多いから、特級のシンを相手にしても問題はないってことか。」

そして最大の問題であるウイルスの方は、ルーチエたちがどうにかするって訳だ。浮葉が感染するのは狂方病だけだってフルが言っていたから、その対処さえ終われば新たな被害は出ないだろうし。

「……まあヴァイラスが逃げてきとるつちゆうんがほんまやとしたら、姉ちゃんもナニモンやって話になる訳やけど。『直接的な戦闘能力は高くない』って、特級のシン相手に言える人間そんなおらんぞ？ 実際、姉ちゃんとの戦い避けてこんなところまで来とるんなら尚更や」

「……？ 対処できる人、この街にだってそれなりにいるんでしょ？」

「『この街』にはな。兄ちゃんの想像よりだいぶ特殊やと思つとき……そもそもこの街、始まりは絶対に少数やった筈や。つまり近親交配の温床——濃い薄いはあるにしても、全員血が繋がつとる言うても過言やないで」

「……北海道くらいの大きさなんだよね？」

「浮葉は多産が多いし、ダストパイルの環境は人口が増えやすいからなあ。元が少のうても、五百年六百年あれば百万都市になつてもおかしくない」

「いや、そんな無茶苦茶な……というより、そんなことあり得るのか？ 人口の増え方云々は抜きにして、血縁に近い者同士で交配を繰り返すと——遺伝子疾患の可能性が高まる筈だ。」

五、六世代もすれば洒落にならない確率で先天性の障害が発現するだろう。元々が少数で、今の人口が百万を超えと言うなら、多産ということを考えても、世代交代は少なくとも数十回以上……本当にあり得るのか？

「……双樹。原種とそれ以外で、一番違うのは何かわかる？」

「……？ エネルギーを認識できるかどうか、かな？」

「それもあるけど、一番大きいのは遺伝子の『強さ』なんだ」

「『違い』じゃなくて？」

「生物としての基盤は同じなんだよ。ただ『受け継ぐ』という点に関して、大きな違いがある。解りやすく言うとな、原種以外は……遺伝子疾患や染色体異常を持って産まれてくることがない。代謝異常、奇形、あるいはダウン症——そういったハンデとは無縁なんだよ」

「そりやまた……」

「さつき森の中でボクが言ったこと覚えてる？ 君が『うわあ……』って茶化したの」

「えつと……『行きつく先は遺伝子の記憶集合体』だっけ？」

「そう。細胞が、遺伝子が、強固に記憶を保持して子孫に紡いでいく……たとえばこの街だつてそうさ。数百年もかけて独自に発展した場所で、こんなに違和感なく会話できるのおかしいと思わない？」

「ん、まあ……そうだね」

「——遺伝子の記憶が実際の記憶として存在する訳じゃないけど、影響は強く出る。文化形態、言語、思想……多様性の喪失という欠点はあるけど、恩恵はそれ以上だ」

「……なるほど」

「それに精神的な成熟の早さもそうだね……フル・フリットやあの娘たちを見て、君は何度も思ってただろ？ 年齢に対して聡明すぎるのか、せ、せつ……性的な、ち、知識が、しっかりしてるのか」

「あざとい……」

でも可愛い。しかしなるほど……感情の動きは子供そのものなのに、言動が妙にそぐわないのはそういうことか。自分の言葉を『相手に理解させる』というのは、子供にとって意外と難しいものだが——フルなんて教師か何かと思うくらい説明が上手かったし。そもそも、大人であっても説明下手な人間など、掃いて捨てる程いるだろう。

「——それと『ナニモンヤ』なんて回りくどい聞き方しなくても、もう気付いてるだろ？ お兄さん」

「……そらまあ、兄ちゃんが黙つとるのに説明し始める時点でなあ。さつきのサマもそれで説明つくし……なんや、俺がこつち来とる間に新しい異世界でも発見されたんか？ 姉ちゃん、解放者本人か？」

「どつちもノーだね。一般には秘匿されてる異世界から来ただけさ」

「ほおん……まあなんにしても、羨ましい能力やわ」

「内心と言動が合っていないよ」

「そらしゃあないやろ。まともな人間関係築きたいんやったら、隠さんとアカンこともあるで姉ちゃん。少なくとも、そうせえへんのはエゴ以外のナニモンでもないわなあ……兄ちゃんも、知ってて一緒にいるんやったら正気疑うで」

「仲良くなったら、おっぱいを触らせてくれるんだ」

「それだけで!？」

「何にどう価値をつけるかは、人それぞれさ」

「いや、でもおっぱいで自分……」

「——僕だって、ただのおっぱいに価値を見出してる訳じゃないぜ。例えば……風呂上がりならしく晒してる妹のおっぱいと、同級生の女の子のおっぱいは同価値じゃないだろ？」

「なに言うてんの？」

「かつて賢者は言った。『私は貧乳の女子が好きなのではなく、貧乳にコンプレックスを持っている女子が好きなのだ』って。つまり物質的には同じものでも、持ち主の精神性こそがその価値を左右するんだよ。その点、ロゼが持つジレンマは——おっぱいの価値を限界まで高めていると言える」

「真面目な顔でなんちゆう下世話なセリフや……」

「これを心底から言ってるんだよ、双樹は」

考え方一つで物の価値などいくらでも変わるものだ。それは自分の考え方でもそうだし、相手の考え方でもそうだろう。例えば『人に感謝されるのが好き』という感情は、多かれ少なかれ誰でも持ち合わせている筈だ。しかしそれを拗こじらせると、卑こじしさだけが膨れ上がっていくに違いない。

奴隷に普通の待遇を与えたら感激されたとか——そんな様子を見て喜ぶ、あるいはそんな物語を読んで心を満たすのは、さっき言った『拗らせ』に近いように思う。そういう人間は得てして、奴隷がその状況を『当たり前』と思つた時点で不満を感じるものだ。『調子に乗る

な』とさえ思うんじゃないだろうか。

なんと言えはいいのか……利他的な行為を自発的にしておいて、しかし感謝を求める様子に酷く浅ましさを感じてしまうのだ。愛されたいから尽くすというのなら、それは良くわかる。でも他者を勝手に見下し施しを与え、感謝をしなかったから不満に思うというのは、あまりにもエゴが過ぎるだろう。

博愛主義が正義だと言ってる訳じゃない。ただ僕は、誰かに対して『同情』というものを、出来る限りしたくないのだ。だからこそ、ロゼを目の前にして逃げたくなつたつてのもある。

自分が嫌なことを、人にしてはいけない。僕は誰かに可哀想だと思われるのが嫌いだから——逆に誰かを可哀想だと思いたくない。自尊心が高いと言えはそうなのかもしれない。ただ、世の中に本当の『正義』というものがあるなら……それは『おっぱい』だと思う。

『どういう結論?!』

「ほあっ!? ね、姉ちゃん、急に叫びだすんやめてくれへん?」

「あ、ご、ごめん……」

さて、ギンコにはロゼの正体がバレてしまった訳だが……内心でどう思っているかはともかく、表面上は特に嫌悪感を出している様子はない。情報屋である以上、金銭が絡まなければ吹聴もしなさそうだし、まだ広まる心配はしなくていいかな? まあロゼが隠そうとしていない以上、時間の問題だろうけど。

「しかしまあ……よお考えたら兄ちゃん、割と危険やな」

「……? なんて?」

「原種以外はなあ、大抵のウイルスなんぞ克服しとる。だからヴァイラスが脅威になるんは、地球における時……つまり原種が多くおるとこやねん。こんなとこまで来てもうたら、特技も活かせへんわな——兄ちゃん以外」

「え、なにそれ怖い」

「まあ姉ちゃんが一緒におつたら大丈夫やろけど」

……ん? ということはもしかして……ロゼは僕を守るためにずっと傍にいてくれたのか? 今この街で一番危険なのは、確かに僕かも

しれないし……『追う必要がなくなった』ってのは、僕を氣遣って言うてくれたのだろうか。そう思つてロゼの方を振り向くと、テレつとそっぽを向かれた。あざとい。

「あ、あざといつてなんなのさー！」

「——待てよ？ まさかこの展開を予測していて、自分の株を上げようと画策していたのでは……」

「そんな訳ないだろ!?」

「…見損なつたぞ！ ロゼ」

「内心は感謝一色だね……——つ、あ……あは、家族以外でこんなに好きになつてもらつたの、初めてだな……」

「僕も、家族以外でこんなに好きになつた人……五人目くらいだ」

「意外と多い！」

「吊り橋効果を利用されたのかな……？」

「邪推が過ぎるよー！」

うーむ……常に好感度を可視化されてるつても、なんだか不思議な感じだ。まるで乙女ゲーの攻略対象キャラにされた気分である。

しかし出会つてからたつた一日で、彼女に対してとても好意を抱いている自覚がある。チョロい男だと思われていやしないだろうな。一応、心の中だけでも牽制はしとくか……べ、別にアンタのことなんか好きじゃないんだからね！

「ボクはどういう反応をすべきなんだ……？」

『そ、そんなあ…… トホホ……』とか

「そ、そんなあ…… トホホ……？」

「で、でも嫌いつてワケじゃないんだからね！」

「めんどくさいよー！」

「だけどね……女の子がすると可愛いんだよ、これが」

「そ、そうなの？ えと、じゃあ——べ、別に双樹のことなんか好きじゃないんだからね！」

「女の『子』がするつて言わなかつたっけ」

「ひどいー！」

うーん……それにしても、有益な情報は結局なかつたな。まさか

ヴァイラスさんとやらが僕の状況に関与しているとは思えないし、少々手詰まり感。長期戦を覚悟すべきなのか？ 猫がとても心配だ……餓死したらどうしよう。

誰か異常に気付いて我が家に侵入してたりしないかな。一応、勝手に入り込みそうな友人に心当たりはある。いつもの靈感商法が上手くいってなかったら、食料を求めて侵入してるかも。

「大丈夫だよ、双樹。ボクも出来る限り頑張ってみるから……」

「ロゼ……」

「ほら、元気出してこ」

「うん、ありがと……しかし弱ったところへの的確につけ込んでくるな……」

「人聞き悪いよ！ ——ん……？」

……ん？ 外から鐘の音が響いてくる。もしかして、湯屋の前にあった鐘塔だろうか……しかしあれは中身空洞、外に棒無しで鳴らす機構がなかったように思うが。

なにか異世界っぽい超理論で動いたりするのかな？ そう思ってたギンコを見ると、彼の細い瞳が片方だけ開かれていた。糸目キヤラの目が開く時……それは、結構な事態が起こった証に違いない。

——まったく、異世界というのは騒動に事欠かないな。